

ない。囚はれたる心を解脱せしめんが爲に、これを研究してゐるのである。此方便に合せざる文藝は如何なる威壓の下に強ひらるゝとも學ぶ事を敢てせざるの自信と決心とを有して居る。我々は此自信と決心とを有するの點に於て普通の人間とは異つてゐる。文藝は技術でもない、事務でもない。より多く人生の根本義に觸れた社會の原動力である。我々は此意味に於て文藝を研究し、此意味に於て如上の自信と決心とを有し、此意味に於て今夕の會合に一般以上の重大なる影響を想見するのである。

社會は烈しく搖きつゝある。社會の産物たる文藝もまた搖きつゝある。搖く勢に乗じて、我々の理想通りに文藝を導くためには、零碎なる個人を團結して、自己の運命を充實し發展し膨脹しなくてはならぬ。今夕の麥酒と珈琲は、かゝる隠れたる目的を、一歩前に進めた點に於て、普通の麥酒と珈琲よりも百倍以上の價ある貴き麥酒と珈琲である。

演説の意味はざつと斯んなものである。演説が濟んだ時、席に在つた學生は悉く喝采した。三四郎は尤も熱心なる喝采者の一人であつた。すると與次郎が突然立つた。

「ダーターフアブラ、沙翁の使つた字數が何萬字だの、イブセンの白髮の數が何千本だのと云つてたつて仕方がない。尤もそんな馬鹿げた講義を聞いたつて囚はれる氣遣はないから大丈夫だが、大學に氣の毒で不可ない。どうしても新時代の青年を満足させる様な人間を引張て來なくっちゃ。西洋人ぢや駄目だ。第一幅が利かない。……」

滿堂は又悉く喝采した。さうして悉く笑つた。與次郎の隣にゐたものが、
「ダーターフアブラの爲に祝盃を擧やう」と云ひ出した。さつき演説をした學生がすぐに贊成した。生憎麥酒がみな空である。よろしいと云つて與次郎はすぐ臺所の方へ驅て行つた。給仕が酒を持つて出る。祝盃を擧るや否や、

「もう一つ。今度は偉大なる暗闇の爲に」と云つたものがある。與次郎の周圍にゐたものは聲を合して、アハ、と笑つた。與次郎は頭を掻いてゐる。

散會の時刻が來て、若い男がみな暗い夜の中に散た時に、三四郎が與次郎に聞いた。
「ダーターフアブラとは何の事だ」
「希臘語だ」

與次郎はそれより外に答へなかつた。三四郎も夫より外に聞かなかつた。二人は美しい空を戴

いて家に歸つた。

あくる日は豫想の如く好天氣である。今年は例年より氣候がずつと緩んでゐる。殊更今日は暖かい。三四郎は朝のうち湯に行つた。閑人の少ない世の中だから、午前は頗る空いてゐる。三四郎は板の間に懸けてある三越呉服店の看板を見た。綺麗な女が畫いてある。其女の顔が何處か美禰子に似てゐる。能く見ると目付が違つてゐる。齒竝が分らない。美禰子の顔で尤も三四郎を驚かしたものは眼付と齒竝である。與次郎の説によると、あの女は反つ齒の氣味だから、あゝ始終齒が出るんださうだが、三四郎には決してさうは思へない。……

三四郎は湯に浸つてこんな事を考へてゐたので、身體の方はあまり洗はずに出た。昨夕から急に新時代の青年といふ自覺が強くなつたけれども、強いのは自覺丈で、身體の方は元の儘である。休になると他のものよりずつと樂にしてゐる。今日は午から大學の陸上運動會を見に行く氣である。

三四郎は元來あまり運動好きではない。國に居るとき兎狩を二三度した事がある。それから高等學校の端艇競漕のときに旗振の役を勤めた事がある。其時青と赤と間違へて振つて大變苦情が

出た。尤も決勝の鐵砲を打つ掛りの教授が鐵砲を打ち損なつた。打つには打つたが音がしなかつた。これが三四郎の狼狽た原因である。それより以來三四郎は運動會へ近づかなかつた。然し今日は上京以來始めての競技會だから是非行つて見る積である。與次郎も是非行つて見ると勧めた。與次郎の云ふ所によると競技より女の方が見に行く價値があるのださうだ。女のうちには野々宮さんの妹がゐるだらう。野々宮さんの妹と一所に美禰子もゐるだらう。其處へ行つて、今日はとか何とか挨拶をして見たい。

午過になつたから出掛けた。會場の入口は運動場の南の隅にある。大きな日の丸と英吉利の國旗が交叉してある。日の丸は合點が行くが、英吉利の國旗は何の爲だか解らない。三四郎は日英同盟の所爲かとも考へた。けれども日英同盟と大學の陸上運動會とはどう云ふ關係があるか、頓と見當が付かなかつた。

運動場は長方形の芝生である。秋が深いので芝の色が大分褪めてゐる。競技を看る所は西側にある。後に大きな築山を一杯に控へて、前は運動場の柵で仕切られた中へ、みんなを追ひ込む仕掛になつてゐる。狭い割に見物人が多いので甚だ窮屈である。幸ひ日和が好いので寒くはない。

然し外套を着てゐるものが大分ある。其代り傘をさして来た女もある。

三四郎が失望したのは婦人席が別になつてゐて、普通の人間には近寄れない事であつた。それからフロックコートや何か着た偉さうな男が澤山集つて、自分が存外幅の利かない様に見えた事であつた。新時代の青年を以て自から居る三四郎は少し小さくなつてゐた。それでも人と人の間から婦人席の方を見渡す事は忘れなかつた。横からだから能く見えないが、此處は流石に奇麗である。悉く着飾つてゐる。其上遠距離だから顔がみんな美しい。その代り誰が目立つて美しいといふ事もない。只總體が總體として美しい。女が男を征服する色である。甲の女が乙の女に打ち勝つ色ではなかつた。そこで三四郎は又失望した。然し注意したら、何處かにゐるだらうと思つて、能く見渡すと、果して前列の一番柵に近い所に二人竝んでゐた。

三四郎は目の着け所が漸く解つたので、先づ一段落告げた様な氣で、安心してゐると、忽ち五人の男が眼の前に飛んで出た。二百メートルの競走が済んだのである。決勝點は美禰子とよし子が坐つてゐる眞正面で、しかも鼻の先だから、二人を見詰めてゐた三四郎の視線のうちには是非共是等の壯觀が遣入つて来る。五六人はやがて十二三人に殖えた。みんな呼吸を喘ませてゐる

様に見える。三四郎は是等の學生の態度と自分の態度とを比べて見て、其相違に驚いた。どうして、あゝ無分別に走ける氣になれたものだらうと思つた。然し婦人連は悉く熱心に見てゐる。そのうちでも美禰子とよし子は尤も熱心らしい。三四郎は自分も無分別に走つて見たくなつた。一番に到着したものが、紫の猿股を穿いて婦人席の方を向いて立つてゐる。能く見ると昨夜の親睦會で演説をした學生に似てゐる。あゝ脊が高くは一番になる筈である。計測掛が黒板に二十五秒七四と書いた。書き終つて、餘りの白墨を向へ抛げて、此方をむいた所を見ると野々宮さんであつた。野々宮さんは何時になく眞黒なフロックを着て、胸に掛員の徽章を付けて、大分人品が宜い。半帛を出して、洋服の袖を二三度はたいだが、やがて黒板を離れて、芝生の上を横切つて来た。丁度美禰子とよし子の坐つてゐる眞前の所へ出た。低い柵の向側から首を婦人席の中へ延ばして、何か云つてゐる。美禰子は立つた。野々宮さんの所迄歩いて行く。柵の向ふと此方で話しを始めた様に見える。美禰子は急に振り返つた。嬉しさうな笑に充ちた顔である。三四郎は遠くから一生懸命に二人を見守つてゐた。すると、よし子が立つた。又柵の側へ寄つて行く。二人が三人になつた。芝生の中では砲丸抛が始つた。

砲丸抛程院の力の要るものはなからう。力の要る割に是程面白くないものも澤山ない。たゞ文字通り砲丸を抛げるのである。藝でも何でもなし。野々宮さんは柵の所で、一寸此様子を見て笑つてゐた。けれども見物の邪魔になると悪いと思つたのであらう。柵を離れて芝生の中へ引き取つた。二人の女も元の席へ復した。砲丸は時々抛げられてゐる。第一どの位遠く迄行くんだか殆んど三四郎には分らない。三四郎は馬鹿々々しくなつた。それでも我慢して立つてゐた。漸くの事で片が付いたと見えて、野々宮さんは又黒板へ十一メートル三八と書いた。

それから又競走があつて、長飛があつて、其次には槌抛げが始まつた。三四郎は此槌抛げに至つて、とう／＼辛抱が仕切れなくなつた。運動會は各自勝手に開くべきものである。人に見せべきものではない。あんなものを熱心に見物する女は悉く間違つてゐると迄思ひ込んで、會場を抜け出して、裏の築山の所迄來た。幕が張つてあつて通れない。引き返して砂利の敷いてある所を少し來ると、會場から逃げた人がちらほら歩いてゐる。盛装した婦人も見える。三四郎は又右へ折れて、爪先上りを岡の頂點迄來た。路は頂點で盡きてゐる。大きな石がある。三四郎は其上へ腰を掛けて、高い崖の下にある池を眺めた。下の運動會場でわあといふ多勢の聲がする。

三四郎はおよそ五分許石へ腰を掛けた儘ぼんやりしてゐた。やがて又動く氣になつたので腰を上げて、立ちながら靴の踵を向け直すと、岡の上り際の、薄く色づいた紅葉の間に、先刻の女の影が見えた。竝んで岡の裾を通る。

三四郎は上から、二人を見下してゐた。二人は枝の隙から明かな日向へ出て來た。黙つてゐると、前を通り抜けて仕舞ふ。三四郎は聲を掛けやうかと考へた。距離があまり遠過ぎる。急いで二三歩芝の上を裾の方へ下りた。下り出すと好い具合に女の一人が此方に向けて呉れた。三四郎はそれで留つた。實は此方からあまり御機嫌を取りたくない。運動會が少し癢に障つてゐる。

「あんな所に……」とよし子が云ひ出した。驚いて笑つてゐる。この女はどんな陳腐なものを見ても珍らしさうな眼付をする様に思はれる。其代り、如何な珍らしいものに出逢つても、やはり待ち受けてゐた様な眼付で迎へるかと思像される。だから此女に逢ふと重苦しい所が少しもなかつて、しかも落付いた感じが起る。三四郎は立つた儘、これは全く、この大きな、常に濡れてゐる、黒い眸の御蔭だと考へた。

美禰子も留つた。三四郎を見た。然し其眼は此時に限つて何物をも訴へてゐなかつた。丸で高

い木を眺める様な眼であつた。三四郎は心の裡で、火の消えた洋燈を見る心持がした。元の所に立ちすくんでゐる。美禰子も動かない。

「何故競技を御覽にならないの」とよし子が下から聞いた。

「今迄見てゐたんですが、詰らないから已めて來たのです」

よし子は美禰子を顧みた。美禰子はやはり顔色を動かさない。三四郎は、

「夫より、あなた方こそ何故出て來たんです。大變熱心に見て居たぢやありませんか」と當た様な當てない様な事を大きな聲で云つた。美禰子は此時始めて、少し笑つた。三四郎には其笑ひの意味が能く分らない。二歩ばかり女の方に近付いた。

「もう宅へ歸るんですか」

女は二人とも答へなかつた。三四郎は又二歩ばかり女の方へ近付いた。

「何處かへ行くんですか」

「え、一寸」と美禰子が小さな聲で云ふ。よく聞えない。三四郎はとうとう女の前途下りて來た。しかし何處へ行くとも追窮もしないで立つてゐる。會場の方で囁きの聲が聞える。

「高飛よ」とよし子が云ふ。「今度は何メートルになつたでせう」

美禰子は軽く笑つた許である。三四郎も黙つてゐる。三四郎は高飛に口を出すのを屑しとした積である。すると美禰子が聞いた。

「此上には何か面白いものが有つて？」

此上には石があつて、崖がある許りである。面白いものがあり様筈がない。

「何にもないです」

「さう」と疑を残した様に云つた。

「一寸上がつて見ませうか」とよし子が、快く云ふ。

「あなた、まだ此處を御存じないの」と相手の女は落ち付いて出た。

「宜いから入つしやいよ」

よし子は先へ上る。二人は又跟いて行つた。よし子は足を芝生の端迄出して、振り向きながら、「絶壁ね」と大袈裟な言葉を使つた。「サツフオーでも飛び込みさうな所ぢやありませんか」美禰子と三四郎は聲を出して笑つた。其癖三四郎はサツフオーがどんな所から飛び込んだか能

く分らなかつた。

「あなたも飛び込んで御覽なさい」と美禰子が云ふ。

「私？飛び込みませうか。でも餘まり水が汚ないわね」と云ひながら、此方へ歸つて來た。

やがて女二人の間に用談が始まつた。

「あなた、入らしつて」と美禰子がいふ。

「えゝ。あなたは」とよし子がいふ。

「何うませう」

「どうでも。なんなら私一寸行つてくるから、此處に待つて入らしやい」

「さうね」

中々片付かない。三四郎が聞いて見ると、よし子が病院の看護婦の所へ、序だから、一寸禮に行つてくるんだと云ふ。美禰子は此夏自分の親戚が入院してゐた時近付になつた看護婦を訪ねれば訪ねるのだが、是は必要でも何でもないのださうだ。

よし子は、素直に氣の軽い女だから、仕舞に、すぐ歸つて來ますと云ひ捨て、早足に一人丘

を下りて行つた。止める程の必要もなし、一所に行く程の事件でもないので、二人は自然後に遺る譯になつた。二人の消極な態度から云へば、遺るといふより、遺されたかたちにもなる。

三四郎は又石に腰を掛けた。女は立つてゐる。秋の日は鏡の様に濁つた池の上に着ちた。中に小さな島がある。島にはたゞ二本の樹が生えてゐる。青い松と薄い紅葉が具合よく枝を交し合つて、箱庭の趣がある。島を越して向側の突き當りが蒼鬱とどす黒く光つてゐる。女は丘の上から其暗い木蔭を指した。

「あの木を知つて入らしつて」といふ。

「あれは椎」

女は笑ひ出した。

「能く覺えて入らしやる事」

「あの時の看護婦ですか、あなたが今訪ねやうと云つたのは」

「えゝ」

「よし子さんの看護婦とは違んですか」

「違います。是は椎——といった看護婦です」
今度は三四郎が笑ひ出した。

「彼處ですね。あなたがあの看護婦と一所に團扇を持つて立つてゐたのは」

二人のゐる所は高く池の中に突き出してゐる。此丘とは丸で縁のない小山が一段低く、右側を走つてゐる。大きな松と御殿の一角と、運動會の幕の一部と、なだらな芝生が見える。

「熱い日でしたね。病院があんまり暑いものだから、とうとう堪え切れなくて出て來たの。」

「あなたは又何であんな所に跣がんで入らしたんです」

「熱いからです。あの日は始めて野々宮さんに逢つて、それから、彼處へ來てぼんやりして居たのです。何だか心細くなつて」

「野々宮さんに御逢ひになつてから、心細く御成になつたの」

「いゝえ、左う云ふ譯ぢやない」と云ひ掛けて、美禰子の顔を見たが、急に話頭を轉じた。

「野々宮さんと云へば、今日は大變働いてゐますね」

「えゝ、珍らしくプロツクコートを御着になつて——随分御迷惑でせう。朝から晩迄ですから」

「だつて大分得意の様ぢや在ませんか」

「誰が、野々宮さんが。——あなたも随分ね」

「何故ですか」

「だつて、眞逆運動會の計測掛になつて得意になる様な方でもないでせう」

三四郎は又話頭を轉じた。

「先刻あなたの所へ來て何か話してゐましたね」

「會場で？」

「えゝ、運動場の柵の所で」と云つたが、三四郎は此間を急に撤回したくなつた。女は「えゝ」と云つた儘男の顔を凝と見てゐる。少し下唇を反らして笑ひ掛けてゐる。三四郎は堪らなくなつた。何か云つて紛らかさうとした時に、女は口を開いた。

「あなたは未だ此間の繪端書の返事を下さらないのね」

三四郎は迷付ながら「上げます」と答へた。女は呉れとも何とも云はない。

「あなた、原口さんといふ畫工を御存じ？」と聞き直した。

「知りません」

「さう」

「何うかしましたか」

「なに、その原口さんが、今日見に来て入らしつてね。みんなを寫生してゐるから、私達も用心しないと、ポンチに畫かれるからつて、野々宮さんがわざ／＼注意して下すつたんです」
美禰子は傍へ来て腰を掛けた。三四郎は自分が如何にも愚物の様な氣がした。

「よし予さんは兄さんと一所に歸らないんですか」

「一所に歸らうつたつて歸れないわ。よし予さんは、昨日から私の家にゐるんですもの」

三四郎は其時始めて美禰子から野々宮の御母さんが國へ歸つたと云ふ事を聞いた。御母さんが歸ると同時に、大久保を引拂つて、野々宮さんは下宿をする、よし予は當分美禰子の宅から學校へ通ふ事に、相談が極つたんださうである。

三四郎は寧ろ野々宮さんの氣樂なのに驚いた。さう容易く下宿生活に戻る位なら、始めから家を持たない方が善からう。第一鍋、釜、手桶杯といふ世帯道具の始末はどう付けたらうと餘計な

事迄考へたが、口に出して云ふ程の事でもないから、別段の批評は加へなかつた。其上、野々宮さんが一家の主人から、後戻りをして、再び純書生と同様な生活状態に復するのは、取も直さず家族制度から一步遠退いたと同じ事で、自分に取つては、目前の迷惑を少し長距離へ引き移した様な好都合にもなる。其代りよし予が美禰子の家へ同居して仕舞つた。此兄妹は絶えず往來してゐないと治らない様に出來上つてゐる。絶えず往來してゐるうちには野々宮さんと美禰子との關係も次第々々に移つて來る。すると野々宮さんが又いつ何時下宿生活を永久に已める時機が來ないとも限らない。

三四郎は頭の中に、かう云ふ疑ある未來を、描きながら、美禰子と應對をしてゐる。一向に氣が乗らない。それを外部の態度丈でも普通の如く繕はうとすると苦痛になつて來る。其處へ旨い具合によし予が歸つて來て呉れた。女同志の間には、もう一遍競技を見に行かうかと云ふ相談があつたが、短くなりかけた秋の日が大分回つたのと、回るに連れて、廣い戸外の肌寒が漸く増してくるので、歸る事に話が極る。

三四郎も女連に別れて下宿へ戻らうと思つたが、三人が話しながら、する／＼べつたり歩き

出したものだから、際立つた挨拶をする機会がない。二人は自分を引張つて行く様に見える。自分も亦引つ張られて行きたい様な気がする。それで二人に食つ付いて池の端を圖書館の横から、方角違ひの赤門の方へ向いて来た。其時三四郎は、よし子に向つて、

「御兄いさんは下宿をなすつたさうですね」と聞いたら、よし子は、すぐ、

「えゝ。とう／＼。他を美禰子さんの所へ押し付けて置いて。苛いでせう」と同意を求める様に云つた。三四郎は何か返事をしやうとした。其前に美禰子が口を開いた。

「宗八さんの様な方は、我々の考へぢやありませんよ。ずつと高い所に居て、大きな事を考へて居らつしやるんだから」と大いに野々宮さんを賞め出した。よし子は黙つて聞いてゐる。

學問をする人が煩瑣い俗用を避けて、成るべく單純な生活に我慢するのは、みんな研究の爲己を得ないんだから仕方がない。野々宮の様な外國に迄聞える程の仕事をする人が、普通の學生同様な下宿に這入つてゐるのも必竟野々宮が偉いからの事で、下宿が汚なければ汚ない程尊敬しなくつてはならない。——美禰子の野々宮に對する讚辭のつゞきは、ざつと斯うである。

三四郎は赤門の所で二人に別れた。追分の方へ足を向けながら考へ出した。——成程美禰子の

云つた通りである。自分と野々宮を比較して見ると大分段が違ふ。自分は田舎から出て大學へ這入つた許りである。學問といふ學問もなければ、見識と云ふ見識もない。自分が、野々宮に對する程な尊敬を美禰子から受け得ないのは當然である。さう云へば何だか、あの女から馬鹿にされてゐる様でもある。先刻、運動會はつまらないから、此處にゐると、丘の上で答へた時に、美禰子は眞面目な顔をして、此上には何か面白いものがありますかと聞いた。あの時は氣が付かなかつたが、今解釋して見ると、故意に自分を愚弄した言葉かも知れない。——三四郎は氣が付いて、今日迄美禰子の自分に對する態度や言語を一々繰返して見ると、どれも是もみんな悪い意味が付けられる。三四郎は往來の眞中で眞赤になつて俯向いた。不圖、顔を上げると向ふから、與次郎と昨夕の會で演説をした學生が竝んで来た。與次郎は首を豎に振つたぎり黙つてゐる。學生は帽子を脱つて禮をしながら、

「昨夜は。何うですか。囚はれちや不可ませんよ」と笑つて行き過ぎた。

裏から回つて婆さんに聞くと、婆さんが小さな聲で、與次郎さんは昨日から御歸りなさらないと云ふ。三四郎は勝手口に立つて考へた。婆さんは氣を利かして、まあ御這入りなさい。先生は書齋に御出ですからと云ひながら、手を休めずに、膳碗を洗つてゐる。今晚食が濟んだ許の所らしい。

三四郎は茶の間を通り抜けて、廊下傳ひに書齋の入口迄來た。戸が開いてゐる。中から「おい」と人を呼ぶ聲がする。三四郎は敷居のうちへ這入つた。先生は机に向つてゐる。机の上には何かあるか分らない。高い脊が研究を隠してゐる。三四郎は入口に近く坐つて、

「御勉強ですか」と丁寧に聞いた。先生は顔を後へ振り向けた。髭の影が不明瞭にもぢや／＼してゐる。寫眞版で見た誰かの肖像に似てゐる。

「やあ、與次郎かと思つたら、君ですか、失敬した」と云つて、席を立つた。机の上には筆と紙がある。先生は何か書いてゐた。與次郎の話に、うちの先生は時々何か書いてゐる。然し何を書いてゐるんだか、他の者が讀んでも些とも分らない。生きてゐるうちに、大著述にでも纏められれば結構だが、あれで死んで仕舞つちやあ、反古が積る許だ。實に話らない。と嘆息してゐた。

事がある。三四郎は廣田の机の上を見て、すぐ與次郎の話と思ひ出した。

「御邪魔なら歸ります。別段の用事でもありません」

「いや、歸つてもらふ程邪魔でもありません。此方の用事も別段の事でもないんだから。さう急に片付ける性質のものを遣つてゐたんぢやない」

三四郎は一寸挨拶が出来なかつた。然し腹のうちでは、此人の様な氣分になれたら、勉強も樂に出来て好からうと思つた。しばらくしてから、斯う云つた。

「實は佐々木君の所へ來たんですが、居なかつたものですから……」

「あゝ。與次郎は何でも昨夜から歸らない様だ。時々漂泊して困る」

「何か急に用事でも出来たんですか」

「用事は決して出来る男ぢやない。たゞ用事を拵へる男でね。あゝ云ふ馬鹿は少い」

三四郎は仕方がないから、

「中々氣樂ですな」と云つた。

「氣樂なら好いけれども。與次郎のは氣樂なのぢやない。氣が移るので——例へば田の中を流

れてゐる。小川の様なものと思つてゐれば間違はない。淺くて狭い。しかし水丈は始終變つてゐる。だから、する事が、ちつとも縮りが無い。縁日へひやかしになど行くと、急に思ひ出した様に、先生松を一鉢御買ひなさいなんて妙な事を云ふ。さうして買ふとも何とも云はないうちに値切つて買つて仕舞ふ。其代り縁日ものを買ふ事などは上手でね。あいつに買はせると大變安く買へる。さうかと思ふと、夏になつてみんなが家を留守にするときなんか、松を座敷へ入れたまんま、雨戸を閉て、錠を卸して仕舞ふ。歸つて見ると、松が温氣で蒸れて眞赤になつてゐる。萬事さう云ふ風で洵に困る」

實を云ふと三四郎は此間與次郎に二十圓借した。二週間後には文藝時評社から原稿料が取れる筈だから、それ迄立替てくれると云ふ。事理を聞いて見ると、氣の毒であつたから、國から送つて来た許りの爲替を五圓引いて、餘は悉く貸して仕舞つた。まだ返す期限ではないが、廣田の話を書いて見ると少々心配になる。しかし先生にそんな事は打ち明けられないから、反對に、「でも佐々木君は、大いに先生に敬服して、蔭では先生の爲に中々盡力してゐます」と云ふと、先生は眞面目になつて、

「どんな盡力をしてゐるんですか」と聞き出した。所が「偉大なる暗闇」其他凡て廣田先生に關する與次郎の所爲は、先生に話してはならないと、當人から封じられてゐる。やり掛けた途中でそんな事が知れると先生に叱られるに極つて居るべきだといふ。話して可い時には己が話すと明言してゐるんだから仕方がない。三四郎は話を外らして仕舞つた。

三四郎が廣田の家へ来るには色々な意味がある。一つは、此人の生活其他が普通のものとなつてゐる。ことに自分の性情とは全く容れない様な所がある。そこで三四郎は何うしたらあゝなるだらうと云ふ好奇心から参考の爲め研究に来る。次に此人の前に出ると呑氣になる。世の中の競争が餘り苦にならない。野々宮さんも廣田先生と同じく世外の趣はあるが、世外の功名心の爲めに、流俗の嗜慾を遠ざけてゐるかの様に思はれる。だから野々宮さんを相手に二人限で話してゐると、自分も早く一人前の仕事をして、學海に貢獻しなくては濟まない様な氣が起る。焦慮して堪らない。そこへ行くと廣田先生は太平である。先生は高等學校でたゞ語學を教へる丈で、外に何の藝もない——と云つては失禮だが、外に何等の研究も公けにしない。しかも泰然と取り澄ましてゐる。其處に、此暢氣の源は伏在してゐるのだらうと思ふ。三四郎は近頃女に囚れた。戀人

「母です」

「國の誰が」

「國のものは勧めますが」

「まだ早いですね。今から細君を持つちやあ大變だ」

「私は……」

「君はどうです」と聞いた。

三四郎は苦笑をして、餘計な事を云つたと思つた。すると廣田さんが、

「あるかも知れない。佳いのを周旋して遣り玉へ」

「奥さんでも御貰になる御考へはないんでせうか」

「分らない。又突然家を持ちかも知れない」

「當分あゝ遣て御出の積なんでせうか」

代り學問にかけると非常に神經質だ」

「えゝ、そんな事には一向無頓着な方でね。あの服装を見ても分る。家庭的な人ぢやない。其

「家を持つたものが、又下宿をしたら不便だらうと思ひますが、野々宮さんは能く……」

「えゝ、下宿したさうです」

「野々宮さんは下宿なすつたさうですね」

今夜は一つ聞いて見やうかしらと、心を動かした。

すれば、自分の態度も判然極める事が出来る。其癖二人の事を未だ曾て先生に聞いた事がない。

と、野々宮さんと美禰子との關係が自ら明瞭になつてくるだらうと思ふ。これが明瞭になりさへ

を置くと猶苦しんで来る。其野々宮さんに尤も近いものは此先生である。だから先生の所へ来る

訪問理由の第三は大分矛盾してゐる。自分は美禰子に苦しんでゐる。美禰子の傍に野々宮さん

の七分方此意味である。

になる。女の一人や二人どうなつても構はないと思ふ。實を云ふと、三四郎が今夜出掛けて来た

三四郎は忌々敷なつた。さう云ふ時は廣田さんに限る。卅分程先生と相對してゐると心持が悠揚

に可いんだか、蔑んで可いんだか、廢すべきだか、續けべきだか譯の分らない囚はれ方である。

に囚はれたのなら、却つて面白いが、惚れられてゐるんだか、馬鹿にされてゐるんだか、怖がつ

て可いんだか、蔑んで可いんだか、廢すべきだか、續けべきだか譯の分らない囚はれ方である。

三四郎は忌々敷なつた。さう云ふ時は廣田さんに限る。卅分程先生と相對してゐると心持が悠揚

になる。女の一人や二人どうなつても構はないと思ふ。實を云ふと、三四郎が今夜出掛けて来た

の七分方此意味である。

訪問理由の第三は大分矛盾してゐる。自分は美禰子に苦しんでゐる。美禰子の傍に野々宮さん

を置くと猶苦しんで来る。其野々宮さんに尤も近いものは此先生である。だから先生の所へ来る

と、野々宮さんと美禰子との關係が自ら明瞭になつてくるだらうと思ふ。これが明瞭になりさへ

すれば、自分の態度も判然極める事が出来る。其癖二人の事を未だ曾て先生に聞いた事がない。

今夜は一つ聞いて見やうかしらと、心を動かした。

「野々宮さんは下宿なすつたさうですね」

「御母さんの云通り持氣になりますか」

「中々なりません」

廣田さんは髭の下から齒を出して笑つた。割合に奇麗な齒を持つてゐる。三四郎は其時急になつかしい心持がした。けれども其なつかしさは美禰子を離れてゐる。野々宮を離れてゐる。三四郎の眼前の利害には超絶したなつかしさであつた。三四郎は是で、野々宮杯の事を聞くのが恥づかしい氣がし出して、質問を已めて仕舞つた。すると廣田先生が又話し出した。――

「御母さんの云ふ事は成べく聞いて上げるが可い。近頃の青年は我々時代の青年と違つて自我の意識が強過ぎて不可ない。吾々の書生をして居る頃には、する事爲す事一として他を離れた事はなかつた。凡てが、君とか、親とか、國とか、社會とか、みんな他本位であつた。それを一口にいふと教育を受けるものが悉く偽善家であつた。其偽善が社會の變化で、とう／＼張り通せなくなつた結果、漸々自己本位を思想行爲の上に輸入すると、今度は我意識が非常に發展し過つて仕舞つた。昔しの偽善家に對して、今は露悪家許りの状態にある。――君、露悪家といふ言葉を聞いた事がありますか」

「いゝえ」

「今僕が即席に作つた言葉だ。君も其露悪家の一人――だかどうだか、まあ多分さうだらう。

與次郎の如きに至ると其最たるものだ。あの君の知つてる里見といふ女があるでせう。あれも一種の露悪家で、それから野々宮の妹ね。あれはまた、あれなりに露悪家だから面白い。昔は殿様と親父丈が露悪家で濟んでゐたが、今日では各自同等の權利で露悪家になりたがる。尤も悪い事でも何でもない。臭いものゝ蓋を除けば肥桶で、美事な形式を剥ぐと大抵は露悪になるのは知れ切つてゐる。形式丈美事だつて面倒な許だから、みんな節約して木地丈で用を足してゐる。甚だ痛快である。天醜爛漫としてゐる。所が此爛漫が度を越すと、露悪家同志が御互に不便を感じて来る。其不便が段々高じて極端に達した時利他主義が又復活する。それが又形式に流れて腐敗すると又利己主義に歸參する。つまり際限はない。我々はさう云ふ風にして暮して行くものと思へば差支ない。さうして行くうちに進歩する。英國を見給へ。此兩主義が昔からうまく平衡が取れてゐる。だから動かない。だから進歩しない。イブセンも出なければニイチエも出ない。氣の毒なものだ。自分丈は得意の様だが、傍から見れば堅くなつて、化石しかつてゐる。……」

三四郎は内心感心した様なものゝ、話が外れて飛んだ所へ曲がつて、曲りなりに太くなつて行くので、少し驚いてゐた。すると廣田さんも漸く氣が付いた。

「一體何を話してゐたのかな」

「結婚の事です」

「結婚？」

「えゝ、私が母の云ふ事を聞いて……」

「うん、左うゝ。なるべく御母さんの言ふ事を聞かなければ不可ない」と云てにこゝしてゐる。丸で子供に對する様である。三四郎は別に腹も立たなかつた。

「我々が露悪家なのは、可いですが、先生時代の人が偽善家なのは、どういふ意味ですか」

「君、人から親切にされて愉快ですか」

「えゝ、まあ愉快です」

「屹度？僕はさうでない、大變親切にされて不愉快な事がある」

「どんな場合ですか」

「形式丈は親切に適つてゐる。然し親切自身が目的でない場合」

「そんな場合があるでせうか」

「君、元日に御目出度と云はれて、實際御目出たい氣がしますか」

「そりや……」

「しないだらう。それと同じく腹を抱へて笑ふだの、轉げかへつて笑ふだのと云ふ奴に、一人だつて實際笑つてる奴はない。親切も其通り。御役目に親切をして呉れるのがある。僕が學校で教師をしてゐる様なものでね。實際の目的は衣食にあるんだから、生徒から見たら定めて不愉快だらう。之に反して與次郎の如きは露悪黨の領袖だけに、度々僕に迷惑を掛けて、始末に了へぬいたづらものだが、惡氣がない。可愛らしい所がある。丁度亞米利加人の金錢に對して露骨なものと一般だ。それ自身が目的である。それ自身が目的である行爲程正直なものはなくつて、正直程厭味のないものは無いんだから、萬事正直に出られない様な我々時代の小六づかしい教育を受けたいものはみんな氣障だ」

此處迄の理窟は三四郎にも分つてゐる。けれども三四郎に取つて、目下痛切な問題は、大體に

わたつての理窟ではない。實際に交渉のある或格段な相手が、正直か正直でないかを知りたいのである。三四郎は腹の中で美禰子の自分に對する素振をもう一遍考へて見た。所が氣障か氣障でないか殆んど判断が出来ない。三四郎は自分の感受性が人一倍鈍いのではなからうかと疑ひ出した。

其時廣田さんは急にうんと云つて、何か思ひ出した様である。

「うん、まだある。此二十世紀になつてから妙なのが流行る。利他本位の内容を利己本位で充たすと云ふ六づかしい遣口なんだが、君そんな人に出逢つたですか」

「何んなのです」

「外の言葉で云ふと、偽善を行ふに露悪を以てする。まだ分らないだらうな。ちと説明し方が悪い様だ。——昔の偽善家はね、何でも人に善く思はれたいが先に立つんでせう。所が其反對で、人の感觸を害する爲めに、わざ／＼偽善をやる。横から見ても縦から見ても、相手には偽善と思はれない様に仕向けて行く。相手は無論厭な心持がする。そこで本人の目的は達せられる。偽善を偽善其儘で先方に通用させ様とする。正直な所が露悪家の特色で、しかも表面上の行爲言語

は飽迄も善に違ないから、——そら、二位一體といふ様な事になる。此方法を巧妙に用ひるものが近來大分殖えて来た様だ。極めて神經の鋭敏になつた文明人種が、尤も優美に露悪家にならうとする、これが一番好い方法になる。血を出さなければ人が殺せないといふのは随分野蠻な話だからな君、段々流行らなくなる」

廣田先生の話し方は、丁度案内者が古戰場を説明する様なもので、實際を遠くから眺めた地位に自らを置いてゐる。それが頗る樂天の趣がある。恰も教場で講義を聞くと一般の感を起させる。然し三四郎には應へた。念頭に美禰子といふ女があつて、此理論をすぐ適用出来るからである。

三四郎は頭の中に此標準を置いて、美禰子の凡てを測つて見た。然し測り切れない所が大變ある。先生は口を閉ぢて、例の如く鼻から哲學の烟を吐き始めた。

所へ玄關に足音がした。案内も乞はずに廊下傳ひに這入つて来る。忽ち與次郎が書齋の入口に坐つて、

「原口さんが御出になりました」と云ふ。只今歸りましたといふ挨拶を省いてゐる。わざと省いたのかも知れない。三四郎には存在な目禮をした許ですぐに出て行つた。

與次郎と敷居際で擦れ違つて、原口さんが這入つて來た。原口さんは佛蘭西式の髭を生やして、頭を五分刈にした、脂肪の多い男である。野々宮さんより年が二つ三つ上に見える。廣田先生よりずつと綺麗な和服を着てゐる。

「やあ、暫く。今迄佐々木が宅へ來てゐてね。一所に飯を食つたり何かして——それから、とうとう引つ張り出されて……」と大分樂天的な口調である。傍にゐると自然陽氣になる様な聲を出す。三四郎は原口と云ふ名前を聞いた時から、大方あの畫工だらうと思つてゐた。夫にしても與次郎は交際家だ。大抵な先輩とはみんな知合になつてゐるから豪いと感心して硬くなつた。三四郎は年長者の前へ出ると硬くなる。九州流の教育を受けた結果だと自分では解釋してゐる。やがて主人が原口に紹介して呉る。三四郎は丁寧に頭を下げた。向ふは軽く會釋した。三四郎はそれから黙つて二人の談話を承はつてゐた。

原口さんは先づ用談から片付けると云つて、近いうちに會をするから出て呉れと頼んでゐる。會員と名のつく程の立派なものは拵へない積だが、通知を出すものは、文學者とか藝術家とか、大學の教授とか、僅かな人数に限つて置くから差支はない。しかも大抵知り合の間だから、形式は全く不必要である。目的はたゞ大勢寄つて晚餐を食ふ。それから文藝上有益な談話を交換する。そんなものである。

廣田先生は一口「出やう」と云つた。用事は夫で済んで仕舞つた。用事は夫で済んで仕舞つたが、それから後の原口さんと廣田先生の會話が頗る面白かつた。

廣田先生が「君近頃何をしてゐるかね」と原口さんに聞くと、原口さんがこんな事を云ふ。「矢つ張り一中節を稽古してゐる。もう五つ程上げた。花紅葉吉原八景だの、小稻半兵衛唐崎心中だのつて中々面白いのがあるよ。君も少し遣つて見ないか。尤もありや、餘り大きな聲を出しちや不可ないんだつてね。本來が四疊半の座敷に限つたものださうだ。所が僕が此通り大きな聲だらう。それに節廻しがあれば中々込み入つてゐるんで、何うしても旨く不可ん。今度一つ遣るから聞いて呉れ玉へ」

廣田先生は笑つてゐた。すると原口さんは續をかう云ふ風に述べた。

「それでも僕はまだ可いんだが、里見恭助と來たら、丸で片無しだからね。どう云ふものか知らん。妹はあんなに器用だのに。此間はどうく降參して、もう唄は止める、其代り何か樂器を

習はうと云ひ出した所が、馬鹿囃を御習ひなさらないかと勧めたものが有つてね。大笑ひさ

「そりや本當かい」

「本當とも。現に里見が僕に、君が遣なら遣つても好いと云つた位だもの。あれで馬鹿囃には八通り囃かたがあるんださうだ」

「君、遣つちや何うだ。あれなら普通の人間にでも出来さうだ」

「いや馬鹿囃は厭だ。それよりか鼓が打つて見たくつてね。何故だか鼓の音を聞いてゐると、全く二十世紀の氣がしなくなるから可い。どうして今の世にあゝ間が抜けてゐられるだらうと思ふと、それ丈で大變な藥になる。いくら僕が吞氣でも、鼓の音の様な晝はとても描けないから」

「描かうともしないんぢやないか」

「描けないんだもの。今の東京にゐるものに悠揚な晝が出来るものか。尤も晝にも限るまいけれども。——晝と云へば、此間大學の運動會へ行つて、里見と野々宮さんの妹のカリカチュアを描いて遣らうと思つたら、とう／＼逃げられて仕舞つた。こんだ一つ本當の肖像晝を描いて展覧會にでも出さうかと思つて」

「誰の」

「里見の妹の。どうも普通の日本の女の顔は歌麿式や何かばかりで、西洋の晝布には移が悪くつて不可ないが、あの女や野々宮さんは可い。兩方共に晝になる。あの女が團扇を翳して、木立を後に、明るい方を向いてゐる所を等身に寫して見様かしらと思つてる。西洋の扇は厭味で不可ないが、日本の團扇は新しくつて面白いだらう。兎に角早くしないと駄目だ。今に嫁にでも行かれやうものなら、さう此方の自由に行かなくなるかも知れないから」

三四郎は多大な興味を以て原口の話聞いてゐた。ことに美禰子が團扇を翳してゐる構圖は非常な感動を三四郎に與へた。不思議の因縁が二人の間に存在してゐるのではないかと思ふ程であつた。すると廣田先生が、「そんな圖はさう面白い事もないぢやないか」と無遠慮な事を云ひ出した。

「でも當人の希望なんだもの。團扇を翳してゐる所は、どうでせうと云ふから、頗る妙でせうと云つて承知したのさ。何わるい圖どりではないよ。描き様にも因るが」

「あんまり美しく描くと、結婚の申込が多くなつて困るぜ」

「ハ、ちや中位に描いて置かう。結婚と云へば、あの女も、もう嫁に行く時期だね。どうだらう、何處か好い口はないだらうか。里見にも頼まれてゐるんだが」

「君貰つちや何うだ」

「僕か。僕で可ければ貰ふが、どうもあの女には信用がなくなつてね」

「何故」

「原口さんは洋行する時には大變な氣込で、わざ／＼鯉節を買ひ込んで、是で巴里の下宿に籠城するなんて大威張だつたが、巴里へ着くや否や、忽ち豹變したさうですわねつて笑ふんだから始末がわるい。大方兄からでも聞いたんだらう」

「あの女は自分の行きたい所でなくつちや行きつこない。勧めたつて駄目だ。好きな人がある迄獨身で置くがいゝ」

「全く西洋流だね。尤もこれからの女はみんな左うなるんだから、それも可からう」

夫から二人の間に長い繪畫談があつた。三四郎は廣田先生の西洋の畫工の名を澤山知てゐるのに驚いた。歸るとき勝手口で下駄を擦してゐると、先生が階子段の下へ来て「おい佐々木一寸降

て來い」と云つてゐた。

戸外は寒い。空は高く晴れて、何處から露が降るかと思ふ位である。手が着物に觸ると、觸つた所だけが冷りとする。人通りの少い小路を二三度折れたり曲つたりして行くうちに、突然辻占屋に逢つた。大きな丸い提灯を點けて、腰から下を眞赤にしてゐる。三四郎は辻占を買つて見たくなつた。然し敢て買はなかつた。杉垣に羽織の肩が觸る程に、赤い提灯を避けて通した。しばらくして、暗い所を斜に抜けると、追分の通へ出た。角に蕎麥屋がある。三四郎は今度は思ひ切つて暖簾を潜つた。少し酒を飲む爲である。

高等學校の生徒が三人ゐる。近頃學校の先生が午の辨當に蕎麥を食ふものが多くなつたと話してゐる。蕎麥屋の擔夫が午砲が鳴ると、蒸籠や種ものを山の様に肩へ載せて、急いで校門を這入つてくる。此處の蕎麥屋はあれで大分儲かるだらうと話してゐる。何とかいふ先生は夏でも釜揚げ餛飩を食ふが、どう云ふものだらうと云つてゐる。大方胃が悪いんだらうと云つてゐる。其外色色の事を云てゐる。教師の名は大抵呼び棄にする。中に一人廣田さんと云つたものがある。それから何故廣田さんは獨身でゐるかといふ議論を始めた。廣田さんの所へ行くと女の裸體畫が懸け

であるから、女が嫌ひなんぢやなからうと云ふ説である。尤も其裸體畫は西洋人だから當になら
ない。日本の女は嫌ひかも知れないといふ説である。いや失戀の結果に違ひないと云ふ説も出た。
失戀してあんな變人になつたのかと質問したのもあつた。然し若い美人が出入するといふ噂が
あるが本當かと聞き糺したのもあつた。

段々聞いてゐるうちに、要するに廣田先生は偉い人だといふ事になつた。何故偉いか三四郎に
も能く解らないが、兎に角此三人は三人ながら與次郎の書いた「偉大なる暗闇」を讀んでゐる。
現にあれを讀んでから、急に廣田さんが好になつたと云つてゐる。時々「偉大なる暗闇」のな
かにある警句杯を引用して來る。さうして盛んに與次郎の文章を賞めてゐる。零餘子とは誰だら
うと不思議がつてゐる。何しろ餘程よく廣田さんを知つてゐる男に相違ないといふ事には三人共
同意した。

三四郎は傍に居て成程と感心した。與次郎が「偉大なる暗闇」を書く筈である。文藝時評の賣
れ高の少いのは當人の自白した通であるのに、麗々しく彼の所謂大論文を掲げて得意がるのは、
虛榮心の満足を以て何の爲になるだらうと疑つてゐたが、是れで見ると活版の勢力は矢張り大し
郎は蕎麥屋を出た。

たものである。與次郎の主張する通り、一言でも半句でも云はない方が損になる。人の評判はこ
んな所から揚り、又こんな所から落ちると思ふと、筆を執るものゝ責任が恐ろしくなつて、三四
郎は蕎麥屋を出た。

下宿へ歸ると、酒はもう醒めて仕舞つた。何だか詰らなくつて不可ない。机の前に坐つて、ぼ
んやりしてゐると、下女が下から湯沸に熱い湯を入れて持つて來た序に、封書一通置いて行つ
た。又母の手紙である。三四郎はすぐ封を切つた。今日は母の手蹟を見るのが甚だ嬉しい。

手紙は可なり長いものであつたが、別段の事も書いてない。ことに三輪田の御光さんについて
は一口も述べてないので大いに難有かつた。けれども中に妙な助言がある。

御前は子供の時から度胸がなくなつて不可ない。度胸の悪いのは大變な損で、試験の時なぞには
どの位困るか知れない。興津の高さんは、あんなに學問が出來て、中學校の先生をしてゐるが、
検定試験を受けるたびに、身體が顫へて、うまく答案が出來ないんで、氣の毒な事に未だに月給
が上がらずにゐる。友達の醫學士とかに頼んで顫への留る丸薬を拵へて貰つて、試験前に飲んで
出たが矢つ張り顫へたさうである。御前のはぶる／＼顫へる程でもない様だから、平生から治薬

に度胸の据る薬を東京の醫者に拵へて貰つて飲んで見る。癒らない事もなからうと云ふのである。三四郎は馬鹿々々しいと思つた。けれども馬鹿々々しいうちに大なる慰藉を見出した。母は本當に親切なものであると、つくづく感心した。其晩一時頃迄かゝつて長い返事を母に遣つた。其中には東京はあまり面白い所ではないと云ふ一句があつた。

八

三四郎が與次郎に金を貸した顛末は、斯うである。

此間の晩九時頃になつて、與次郎が雨の中を突然遣つて来て、冒頭から大いに弱つたと云ふ。見ると、例になく顔の色が悪い。始めは秋雨に濡れた冷たい空気に吹かれ過ぎたからの事と思つてゐたが、座に就いて見ると、悪いのは顔色ばかりではない。珍らしく銷沈してゐる。三四郎が「具合でも好くないのか」と尋ねると、與次郎は鹿の様な眼を二度程ばちつかせて、かう答へた。「實は金を失なしてね。困つちまつた」

そこで、一寸心配さうな顔をして、煙草の煙を二三本鼻から吐いた。三四郎は黙つて待つてゐる

る譯にも行かない。どう云ふ種類の金を、どこで失くしたのかと段々聞いて見ると、すぐ解つた。與次郎は煙草の煙の、二三本鼻から出切る間丈控へてゐたばかりで、その後は、一部始終を譯もなくすらくと話して仕舞つた。

與次郎の失くした金は、額で二十圓、但し人のものである。去年廣田先生が此前の家を借りる時分に、三ヶ月の敷金に窮して、足りない所を一時野々宮さんから用達つて貰つた事がある。然るに其金は野々宮さんが、妹にヴィオリンを買つて遣らなくてはならないとかで、わざ／＼國元の親父さんから送らせたものださうだ。それだから今日が今日必要といふ程でない代りに、延びれば延びる程よし子が困る。よし子は現に今でもヴィオリンを買はずに済ましてゐる。廣田先生が返さないからである。先生だつて返せばとうに返すんだらうが、月々餘裕が一文も出ない上に、月給以外に決して稼がない男だから、つい夫なりにしてあつた。所が此夏高等學校の受験生の答案調を引き受けた時の手當が六十圓此頃になつて漸く受け取れた。それで漸く義理を済ます事になつて、與次郎が其使ひを云ひ付かつた。

「その金を失くしたんだから濟まない」と與次郎が云つてゐる。實際濟まない様な顔付でもあ

る。何處へ落したんだと聞くと、なに落したんぢやない。馬券を何枚とか買つて、みんな無くなして仕舞つたのだと云ふ。三四郎も是には呆れ返つた。あまり無分別の度を通り越してゐるので意見をする氣にもならない。其上本人が悄然としてゐる。是を平常の活潑潑地と比べると與次郎なるものが二人居るとしか思はれない。其對照が烈し過ぎる。だから可笑いのと氣の毒なのが一所になつて三四郎を襲つて來た。三四郎は笑ひ出した。すると與次郎も笑ひ出した。

「まあ可や、どうかなるだらう」と云ふ。

「先生はまだ知らないのか」と聞くと、

「まだ知らない」

「野々宮さんは」

「無論、まだ知らない」

「金は何時受取つたのか」

「金は此月始まりだから、今日で丁度二週間程になる」

「馬券を買つたのは」

「受取つた明る日だ」

「夫から今日迄其儘にして置いたのか」

「色々奔走したが出来ないんだから仕方がない。已を得なければ今月末迄此儘にして置かう」

「今月末になれば出来る見込みでもあるのか」

「文藝時評社から、どうかなるだらう」

三四郎は立つて、机の抽出を開けた。昨日母から來たばかりの手紙の中を覗いて、

「金は此處にある。今月は國から早く送つて來た」と云つた。與次郎は、

「難有い。親愛なる小川君」と急に元氣の好い聲で落語家の様な事を云つた。

二人は十時過雨を冒して、追分の通りへ出て、角の蕎麥屋へ這入つた。三四郎が蕎麥屋で酒を飲む事を覺えたのは此時である。其晩は二人共愉快に飲んだ。勘定は與次郎が拂つた。與次郎は中々人に拂はせない男である。

夫から今日に至る迄與次郎は金を返さない。三四郎は正直だから下宿屋の拂を氣にしてゐる。催促はしないけれども、どうかして呉れ、ば可いがと思つて、日を過すうちに晦日近くなつた。

もう一日二日しか餘つてゐない。間違つたら下宿の勘定を延ばして置かう杯といふ考へはまだ三四郎の頭に上らない。必ず與次郎が持つて来て呉れる——と迄は無論彼を信用してゐないのだが、まあどうか工面して見様位の親切氣はあるだらうと考へてゐる。廣田先生の評によると與次郎の頭は淺瀬の水の様に始終移つてゐるのださうだが、無暗に移る許で責任を忘れる様では困る。まさかそれ程の事もあるまい。

三四郎は二階の窓から往來を眺めてゐた。すると向から與次郎が足早にやつて來た。窓の下迄來て仰向いて、三四郎の顔を見上げて、「おい、居るか」と云ふ。三四郎は上から、與次郎を見下して、「うん、居る」と云ふ。此馬鹿見た様な挨拶が上下で一句交換されると、三四郎は部屋の中へ首を引込める。與次郎は階子段をとん／＼上がつて來た。

「待つてゐやしないか。君の事だから下宿の勘定を心配してゐるだらうと思つて、大分奔走した。馬鹿氣てゐる」

「文藝時評から原稿料を呉れたか」

「原稿料つて、原稿料はみんな取つて仕舞つた」

「だつて此間は月末に取る様に云つてゐたぢやないか」

「さうかな、夫は間違だらう。もう一文も取るのはない」

「可笑しいな。だつて君は慥に左う云つたぜ」

「なに、前借をしやうと云つたのだ。所が中々貸さない。僕に貸すと返さないと思つてゐる。

怪しからん。僅か二十圓許の金だのに。いくら偉大なる暗闇を書いて遣つても信用しない。詰らない。厭になつちまつた」

「ぢや金は出來ないのか」

「いや外で拵へたよ。君が困るだらうと思つて」

「さうか。それは氣の毒だ」

「所が困つた事が出來た。金は此處にはない。君が取りに行かなくつちや」

「何處へ」

「實は文藝時評が可けないから、原口だの何だの二三軒歩いたが、何處も月末で都合がつかない。それから最後に里見の所へ行つて——里見といふのは知らないかね。里見恭助。法學士だ。

美禰子さんの兄さんだ。あすこへ行つた所が、今度は留守で矢張り要領を得ない。其うち腹が減つて歩くのが面倒になつたから、とうとう美禰子さんに逢つて話しをした」

「野々宮さんの妹が居やしないか」

「なに午少し過ぎだから學校に行てる時分だ。それに應接間だから居たつて構やしない」

「さうか」

「それで美禰子さんが、引受けてくれて、御用立て申しますと云ふんだがね」

「あの女は自分の金があるのかい」

「そりや、何うだか知らない。然し兎に角大丈夫だよ。引き受けたんだから。ありや妙な女で、年の行かない癖に姉さんじみた事をするのが好きな性質なんだから、引き受けさへすれば、安心だ。心配しないでも可い。宜しく願つて置けば構はない。所が一番仕舞になつて、御金は此處にあります。ありますが、あなたには渡せませんと云ふんだから、驚いたね。僕はそんなに不信用なんですかと聞くと、え々と云つて笑つてゐる。厭になつちまつた。ぢや小川を遣しますか。又聞いたら、小川さんに御手渡し致しませうと云はれた。どうでも勝手にするが可い。君取りに行けるかい」

「い」

「取りに行かなければ、國へ電報でも掛けるんだな」

「電報はよさう。馬鹿氣てゐる。いくら君だつて借に行けるだらう」

「行ける」

是で漸く二十圓の埒が明いた。それが済むと、與次郎はすぐ廣田先生に關する事件の報告を始めた。

運動は着々歩を進めつゝある。暇さへあれば下宿へ出掛て行つて、一人一人に相談する。相談は一人一人に限る。大勢寄ると、各自が自分の存在を主張しやうとして、稍ともすれば異を樹てる。それでなければ、自分の存在を閑却された心持になつて、初手から冷淡に構へる。相談はどうしても一人一人に限る。其代り暇は要る。金も要る。それを苦にしてゐては運動は出来ない。それから相談中には廣田先生の名前を餘り出さない事にする。我々の爲の相談でなくつて、廣田先生の爲の相談だと思はれると、事が纏まらなくなる。

與次郎は此方法で運動の歩を進めてゐるのださうだ。それで今日迄の所は旨く行つた。西洋人

許では不可ないから、是非共日本人を入れて貰はうといふ所迄話は来た。是から先はもう一遍寄つて、委員を選んで、學長なり、總長なりに、我々の希望を述べに遣る許である。尤も會合丈はほんの形式だから略しても可い。委員になるべき學生も大體は知れてゐる。みんな廣田先生に同情を持つてゐる連中だから、談判の模様によつては、此方から先生の名を當局者へ持ち出すかも知れない。……

聞いてゐると、與次郎一人で天下が自由になる様に思はれる。三四郎は尠からず與次郎の手腕に感服した。與次郎は又此間の晩、原口さんを先生の所へ連れて來た事に就いて、辯じ出した。

「あの晩、原口さんが、先生に文藝家の會をやるから出ると、勧めてゐたらう」と云ふ。三四郎は無論覺えてゐる。與次郎の話によると、實はあれも自身の發起に係るものださうだ。其理由は色々あるが、まづ第一に手近な所を云へば、あの會員のうちには、大學の文科で有力な教授がゐる。其男と廣田先生を接觸させるのは、此際先生に取つて、大變な便利である。先生は變人だから、求めて誰とも交際しない。然し此方で相當の機會を作つて、接觸させれば、變人なりに附合つて行く。……

「左う云ふ意味があるのか、些とも知らなかつた。それで君が發起人だと云んだが、會をやる時、君の名前で通知を出して、さう云ふ偉い人達がみんな寄つて來るのかな」

與次郎は、しばらく眞面目に、三四郎を見てゐたが、やがて苦笑ひをして傍を向いた。

「馬鹿云つちや不可ない。發起人つて、表向の發起人ぢやない。たゞ僕がさう云ふ會を企てたのだ。つまり僕が原口さんを勧めて、萬事原口さんが周旋する様に拵へたのだ」

「さうか」

「さうかは田臭だね。時に君もあの會へ出るが可い。もう近いうちに有る筈だから」

「そんな偉い人ばかり出る所へ行つたつて仕方がない。僕は廢さう」

「又田臭を放つた。偉い人も偉くない人も社會へ頭を出した順序が違ふ丈だ。なにあんな連中、博士とか學士とか云つたつて、會つて話して見ると何でもないものだよ。第一向がさう偉いとも何とも思つてやしない。是非出て置くが可い。君の將來の爲だから」

「何處であるのか」

「多分上野の精養軒になるだらう」

「僕はあるな所へ這入つた事が無い。高い會費を取るんだらう」

「まあ二圓位だらう。なに會費なんか、心配しなくつても可い。無ければ僕が出して置くから」

三四郎は忽ちさきの二十圓の件を思ひ出した。けれども不思議に可笑しくならなかつた。與次郎は其上銀座の何處とかへ天麩羅を食ひに行かうと云ひ出した。金はあると云ふ。不思議な男である。云ひなり次第になる三四郎も是は斷つた。其代り一所に散歩に出た。歸りに岡野へ寄つて、與次郎は栗饅頭を澤山買った。これを先生に見舞に持つて行くんだと云つて、袋を抱へて歸つていつた。

三四郎は其晩與次郎の性格を考へた。永く東京に居るとあんなになるものかと思つた。それから里見へ金を借りに行く事を考へた。美禰子の所へ行く用事が出来たのは嬉しい様な気がする。然し頭を下げて金を借りるのは難有くない。三四郎は生れてから今日に至る迄、人に金を借りた経験のない男である。其上貸すと云ふ當人が娘である。獨立した人間ではない。たとひ金が自由になるとしても、兄の許諾を得ない内證の金を借りたとすると、借りる自分は兎に角、あとで、貸した人の迷惑になるかも知れない。或はあの女の事だから、迷惑にならない様に始から出来て

ゐるかとも思へる。何しろ逢つて見やう。逢つた上で、借りるのが面白くない様子だつたら、斷つて、少時下宿の拂を延ばして置いて、國から取り寄せれば事は済む。——當用は此處迄考へて句切りを付けた。あとは散漫に美禰子の事が頭に浮んで来る。美禰子の顔や手や、襟や、帯や、着物やらを、想像に任せて、乗けたり除つたりしてゐた。ことに明日逢ふ時に、どんな態度で、どんな事を云ふだらうと其光景が十通りにも廿通りにもなつて、色々に出て来る。三四郎は本來から斯んな男である。用談があつて人と會見の約束などをする時には、先方が何う出るだらうといふ事許り想像する。自分が、こんな顔をして、こんな事を、こんな聲で云つて遣らう杯とは決して考へない。しかも會見が済むと後から屹度其方を考へる。さうして後悔する。

ことに今夜は自分の方を想像する餘地がない。三四郎は此間から美禰子を疑つてゐる。然し疑ふばかりで一向埒が明かない。さうかと云つて面と向つて、聞き糺すべき事件は一つもないのだから、一刀兩斷の解決杯は思ひも寄らぬ事である。もし三四郎の安心の爲に解決が必要なら、それはたゞ美禰子に接觸する機會を利用して、先方の様子から、好い加減に最後の判決を自分に與へて仕舞ふ丈である。明日の會見は此判決に缺くべからざる材料である。だから、色々に向を想

像して見る。しかし、どう想像しても、自分に都合の好い光景ばかり出て来る。それでゐて、實際は甚だ疑はしい。丁度汚ない所を綺麗な寫眞に取つて眺めてゐる様な気がする。寫眞は寫眞として何處迄も本當に違ないが、實物の汚ない事も争はれないと一般で、同じでなければならぬ筈の二つが決して一致しない。

最後に嬉しい事を思ひ付いた。美禰子は與次郎に金を貸すと云つた。けれども與次郎には渡さないと云つた。實際與次郎は金錢の上に於ては、信用し悪い男かも知れない。然し其意味で美禰子が渡さないのか、どうだか疑はしい。もし其意味でないとすると、自分には甚だ頼母しい事になる。たゞ金を貸して呉れる丈でも充分の好意である。自分に逢つて手渡しにしたいと云ふのは——三四郎は此處迄己惚て見たが、忽ち、

「矢つ張り愚弄ぢやないか」と考へ出して、急に赤くなつた。もし、ある人があつて、其女は何の爲に君を愚弄するのかと聞いたたら、三四郎は恐らく答へ得なかつたらう。強ひて考へて見ると云はれたら、三四郎は愚弄其物に興味を有つてゐる女だからと迄は答へたかも知れない。自分の己惚を罰する爲とは全く考へ得なかつたに違ひない。三四郎は美禰子の爲に己惚しめられ

たんだと信じてゐる。

翌日は幸ひ教師が二人缺席して、午からの授業が休みになつた。下宿へ歸るのも面倒だから、途中で一品料理の腹を拵へて、美禰子の家へ行つた。前を通つた事は何遍でもある。けれども這入るのは始めてある。瓦葺の門の柱に里見恭助といふ標札が出てゐる。三四郎は此處を通る度に、里見恭助といふ人はどんな男だらうと思ふ。まだ逢つた事がない。門は締つてゐる。潜りかゝら這入ると玄關迄の距離は存外短い。長方形の御影石が飛び／＼に敷いてある。玄關は細い綺麗な格子で閉て切つてある。電鈴を押す。取次の下女に、「美禰子さんは御宅ですか」と云つた時、三四郎は自分ながら氣恥かしい様な妙な心持がした。他の玄關で、妙齡の女の在否を尋ねた事はまだない。甚だ尋ね悪い気がする。下女の方は案外眞面目である。しかも恭しい。一旦奥へ這入つて、又出て来て、丁寧に御辭儀をして、どうぞと云ふから尾いて上がると應接間へ通した。重い窓掛の懸つてゐる西洋室である。少し暗い。

下女は又、「暫らく、どうか……」と挨拶をして出て行つた。三四郎は静かな室の中に席を占めた。正面に壁を切り抜いた小さい暖爐がある。其上が横に長い鏡になつてゐて前に蠟燭立が二本

ある。三四郎は左右の蠟燭立の真中に自分の顔を寫して見て、又坐つた。

すると奥の方でヴィオリンの音がした。それが何處からか、風が持つて来て捨て、行つた様に、すぐ消えて仕舞つた。三四郎は惜い氣がする。厚く張つた椅子の脊に倚りかゝつて、もう少し遣れば可いかと思つて耳を澄ましてゐたが、音は夫限で已んだ。約一分も立つうちに、三四郎はヴィオリンの事を忘れた。向ふにある鏡と蠟燭立を眺めてゐる。妙に西洋の臭ひがする。それからカッリックの連想がある。何故カッリックか三四郎にも解らない。其時ヴィオリンが又鳴つた。今度は高い音と低い音が二三度急に續いて響いた。それではつたり消えて仕舞つた。三四郎は全く西洋の音楽を知らない。然し今の音は、決して、纏つたものゝ一部分を弾いたとは受け取れない。ただ鳴らした丈である。その無作法にたゞ鳴らした所が三四郎の情緒によく合つた。不意に天から二三粒落ちて來た、出鱈目の雹の様である。

三四郎が半ば感覺を失つた眼を鏡の中に移すと、鏡の中に美禰子が何時の間にか立つてゐる。下女が閉てたと思つた戸が開いてゐる。戸の後に掛けてある幕を片手で押し分けた美禰子の胸から上が明かに寫つてゐる。美禰子は鏡の中で三四郎を見た。三四郎は鏡の中の美禰子を見た。美禰子はにこりと笑つた。

「入らつしやい」

女の聲は後で聞えた。三四郎は振り向かなければならなかつた。女と男は直に顔を見合せた。其時女は廂の廣い髪を一寸前に動かして禮をした。禮をするには及ばない位に親しい態度であつた。男の方は却つて椅子から腰を浮かして頭を下げた。女は知らぬ風をして、向ふへ廻つて、鏡を脊に、三四郎の正面に腰を卸した。

「とう／＼入らした」
同じ様な親しい調子である。三四郎には此一言が非常に嬉しく聞えた。女は光る絹を着てゐる。先刻から大分待たしたところを以て見ると、應接間へ出る爲にわざ／＼奇麗なのに着換へたのかも知れない。それで端然と坐つてゐる。眼と口に笑を帯びて無言の儘三四郎を見守つた姿に、男は寧ろ甘い苦しみを感じた。凝として見らるゝに堪へない心の起つたのは、其癖女の腰を卸すや否やである。三四郎はすぐ口を開いた。殆んど發作に近い。

「佐々木が」

「佐々木さんが、あなたの所へ入らしたでせう」と云つて例の白い齒を露した。女の後には前の蠟燭立が暖爐臺の左右に並んでゐる。金で細工をした妙な形の臺である。是を蠟燭立と見たのは三四郎の臆断で、實は何だか分らない。此不可思議の蠟燭立の後に明らかな鏡がある。光線は厚い窓掛に遮られて、充分に這入らない。其上天氣は曇つてゐる。三四郎は此間に美禰子の白い齒を見た。

「佐々木が来ました」

「何と云つて入らつしやいました」

「僕にあなたの所へ行けと云つて来ました」

「左うでせう。——夫で入らしたの」とわざ／＼聞いた。

「えゝ」と云つて少し躊躇した。あとから「まあ、左うです」と答へた。女は全く齒を隠した。靜かに席を立て、窓の所へ行つて、外面を眺め出した。

「曇りましたね。寒いでせう、戸外は」

「いゝえ、存外暖かい。風は丸であります」

「さう」と云ひながら席へ歸つて来た。

「實は佐々木が金を……」と三四郎から云ひ出した。

「分つてるの」と中途でとめた。三四郎も黙つた。すると

「何うして御失くしになつたの」と聞いた。

「馬券を買つたのです」

女は「まあ」と云つた。まあと云つた割に顔は驚いてゐない。却つて笑つてゐる。すこし經つて、「悪い方ね」と附け加へた。三四郎は答へずにおた。

「馬券で中るのは、人の心を中るより六づかしいぢやありませんか。あなたは索引の附いてゐる人の心さへ中て見様となさらない呑氣な方だのに」

「僕が馬券を買つたんぢやありません」

「あら。誰が買つたの」

「佐々木が買つたのです」

女は急に笑ひ出した。三四郎も可笑しくなつた。

「ぢや、あなたが御金が御入用ぢやなかつたのね。馬鹿々々しい」

「要る事は僕が要るのです」

「本當に？」

「本當に」

「だつて夫ぢや可笑いわね」

「だから借りなくつても可いんです」

「何故。御厭なの？」

「厭ぢやないが、御兄いさんに黙つて、あなたから借りぢや、好くないからです」

「何ういふ譯で？でも兄は承知してゐるんですもの」

「左うですか。ぢや借りても好い。——然し借りないでも好い。家へさう云つて遣りさへすれば、一週間位すると來ますから」

「御迷惑なら、強ひて……」

美禰子は急に冷淡になつた。今迄傍にゐたものが一町計遠退いた氣がする。三四郎は借りて

置けば可かつたと思つた。けれども、もう仕方がない。蠟燭立を見て澄してゐる。三四郎は自分から進んで、他の機嫌を取つた事のない男である。女も遠ざかつたぎり近付いて來ない。しばらくすると又立ち上がった。窓から戸外をすかして見て、

「降りさうもありませんね」と云ふ。三四郎も同じ調子で、「降りさうもありません」と答へた。

「降らなければ、私一寸出て來やうかしら」と窓の所で立つた儘云ふ。三四郎は歸つてくれといふ意味に解釋した。光る絹を着換たのも自分の爲ではなかつた。

「もう歸りませう」と立ち上がった。美禰子は玄關迄送つて來た。沓脱へ下りて、靴を穿いてゐると、上から美禰子が、

「其處迄御一所に出ませう。可いでせう」と云つた。三四郎は靴の紐を結びながら、「え、何うでも」と答へた。女は何時の間にか、和土の上へ下りた。下りながら三四郎の耳の傍へ口を持つて來て、「怒つて入らつしやるの」と私語いた。所へ下女が周章ながら、送りに出て來た。

二人は半町程無言の儘連れ立て來た。其間三四郎は始終美禰子の事を考へてゐる。此女は我儘に育つたに違ない。それから家庭にゐて、普通の女性以上の自由を有して、萬事意の如く振舞ふ

に違ない。かうして、誰の許諾も經ずに、自分と一所に、往來を歩くのでも分る。年寄の親がな
くつて、若い兄が放任主義だから、斯うも出来るのだらうが、是が田舎であつたら、嘸困ることだ
らう。此女に三輪田の御光さんの様な生活を送れと云つたら、何うする氣かしらん。東京は田舎
と違つて、萬事が明け放しだから、此方の女は、大抵斯うなのかも分らないが、遠くから想像し
て見ると、もう少しは舊式の様でもある。すると與次郎が美禰子をイブセン流と評したのも成程
と思ひ當る。但し俗禮に拘はらない所丈がイブセン流なのか、或は腹の底の思想迄も、さうなの
か。其處は分らない。

そのうち本郷の通へ出た。一所に歩いてゐる二人は、一所に歩いてゐながら、相手が何處へ行
くのだか、全く知らない。今迄に横町を三つ許曲つた。曲るたびに、二人の足は申し合せた様に
無言の儘同じ方角へ曲つた。本郷の通りを四丁目の角へ來る途中で、女が聞いた。

「何處へ入らつしやるの」

「あなたは何處へ行くんです」

二人は一寸顔を見合せた。三四郎は至極眞面目である。女は堪へ切れずに又白い齒を露はした。

「一所に入らつしやい」

二人は四丁目の角を切り通しの方へ折れた。三十間程行くと、右側に大きな西洋館がある。美
禰子は其前に留つた。帯の間から薄い帳面と、印形を出して、

「御願ひ」と云つた。

「何ですか」

「是で御金を取つて頂戴」

三四郎は手を出して、帳面を受取つた。眞中に小口當座預金通帳とあつて、横に里見美禰子
殿と書いてある。三四郎は帳面と印形を持つた儘、女の顔を見て立つた。

「三十圓」と女が金高を云つた。恰も毎日銀行へ金を取りに行き慣れた者に對する口振である。
幸ひ、三四郎は國にゐる時分、かう云ふ帳面を持って度々豊津迄出掛けた事がある。すぐ石段を上
つて、戸を開けて、銀行の中へ這入つた。帳面と印形を掛のものに渡して、必要の金額を受取つ
て出て見ると、美禰子は待つてゐない。もう切通しの方へ二十間許歩き出してゐる。三四郎は急
いで追付いた。すぐ受取つたものを渡さうとして、隠袋へ手を入れると、美禰子が、

「丹青會の展覽會を御覽になつて」と聞いた。

「まだ覽ません」

「招待券を二枚貰つたんですけれども、つい閑がなかつたものだから、まだ行かずにゐたんですが行つて見ませうか」

「行つても可いです」

「行きませう。もうぢき閉會になりますから。私、一遍は見えて置かないと原口さんに濟まないのです」

「原口さんが招待券を呉れたんですか」

「え、あなた原口さんを御存なの？」

「廣田先生の所で一度會ひました」

「面白い方でせう。馬鹿囃を稽古なさるんですつて」

「此間は鼓を稽ひたいと云つてゐました。夫から——」

「夫から、あなたの肖像を描くとか云つてゐました。本當ですか」

「え、高等モデルなの」と云つた。男は是より以上に氣の利いた事が云へない性質である。それで黙つて仕舞つた。女は何とか云つて貰ひたかつたらしい。

三四郎は又隠袋へ手を入れた。銀行の通帳と印形を出して、女に渡した。金は帳面の間に挟んで置いた筈である。然るに女が、

「御金は」と云つた。見ると、間にはない。三四郎は又衣囊を探つた。中から手摺のした札を攫み出した。女は手を出さない。

「預かつて置いて頂戴」と云つた。三四郎は聊か迷惑の様な氣がした。然しこんな時に争ふ事を好まぬ男である。其上往來だから猶更遠慮をした。折角握つた札を又元の所へ收めて、妙な女だと思つた。

學生が多く通る。擦れ違ふ時に屹度二人を見る。中には遠くから眼を付けて來るものもある。

三四郎は池の端へ出る迄の路を頗る長く感じた。それでも電車に乗る氣にはならない。二人共のそのそ歩いてゐる。會場へ着いたのは殆んど三時近くである。妙な看板が出てゐる。丹青會と云

ふ字も、字の周圍についてゐる圖案も、三四郎の眼には悉く新しい。然し熊本では見る事の出来ない意味で新しいので、寧ろ一種異様の感がある。中は猶更である。三四郎の眼には唯油繪と水彩畫の區別が判然と映する位のものに過ぎない。

それでも好悪はある。買つてもいゝと思ふのもある。然し巧拙は全く分らない。従つて鑑別力のないものと、初手から諦らめた三四郎は、一向口を開かない。

美禰子が是は何うですかと云ふと、左うですなといふ。是は面白いちやありませんかと云ふと、面白さうですなといふ。丸で張合がない。話しの出来ない馬鹿か、此方を相手にしない偉い男か、何方かに見える。馬鹿とすれば街はない所に愛嬌がある。偉いとすれば、相手にならない所が惡らしい。

長い間外國を旅行して歩いた兄妹の畫が澤山ある。雙方共同姓で、しかも一つ所に立て掛けてある。美禰子は其一枚の前に留まつた。

「ゼニスでせう」

是は三四郎にも解つた。何だかゼニスらしい。畫物にでも乗つて見たい心持がする。三四郎は

高等學校に居る時分畫物といふ字を覺えた。それから此字が好になつた。畫物といふと、女と一所に乘らなければ濟まない様な氣がする。黙つて蒼い水と、水の左右の高い家と、倒さに映る家の影と、影の中にちら／＼する赤い片とを眺めてゐた。すると、

「兄さんの方が餘程旨い様ですね」と美禰子が云つた。三四郎には此意味が通じなかつた。

「兄さんとは……」

「此畫は兄さんの方でせう」

「誰の？」

美禰子は不思議さうな顔をして、三四郎を見た。

「だつて、彼の方が妹さんなので、此方の方が兄さんのぢやありませんか」

三四郎は一步退いて、今通つて來た路の片側を振り返つて見た。同じ様に外國の景色を描いたものが幾點となく掛つてゐる。

「違ふんですか」

「一人と思つて入らしつたの」

「え」と云つて、呆やりしてゐる。やがて二人が顔を見合した。さうして一度に笑ひ出した。美禰子は、驚いた様に、わざと大きな眼をして、しかも一段と調子を落した小聲になつて、

「随分ね」と云ひながら、一間ばかり、ずん／＼先へ行つて仕舞つた。三四郎は立ち留つた儘、もう一遍エニスの掘割を眺め出した。先へ抜た女は、此時振返つた。三四郎は自分の方を見てゐない。女は先へ行く足をびたりと留めた。向から三四郎の横顔を熟視してゐた。

「里見さん」

出し抜に誰か大きな聲で呼だ者がある。

美禰子も三四郎も等しく顔を向け直した。事務室と書いた入口を一間許離れて、原口さんが立つてゐる。原口さんの後に、少し重なり合つて、野々宮さんが立つてゐる。美禰子は呼ばれた原口よりは、原口より遠くの野々宮を見た。見るや否や、二三步後戻りをして三四郎の傍へ来た。人に目立ぬ位に、自分の口を三四郎の耳へ近寄せた。さうして何か私語いた。三四郎には何を云つたのか、少しも分らない。聞き直さうとするうちに、美禰子は二人の方へ引き返して行つた。もう挨拶をしてゐる。野々宮は三四郎に向つて、

「妙な連と來ましたね」と云つた。三四郎が何か答へやうとするうちに、美禰子が、

「似合ふでせう」と云つた。野々宮さんは何とも云はなかつた。くるりと後を向いた。後には壘一枚程の大きな畫がある。其畫は肖像畫である。さうして一面に黒い。着物も帽子も背景から區別の出来ない程光線を受けてゐない中に、顔ばかり白い。顔は瘡せて、頬の肉が落ちてゐる。

「模寫ですね」と野々宮さんが原口さんに云つた。原口は今しきりに美禰子に何か話してゐる。——もう閉會である。來觀者も大分減つた。開會の初めには毎日事務所へ來てゐたが、此頃は滅多に顔を出さない。今日は久し振りに、此方へ用があつて、野々宮さんを引張つて來た所だ。うまく出つ食はしたものだ。此會を仕舞ふと、すぐ來年の準備にかゝらなければならぬから、非常に忙がしい。何時もは花の時分に開くのだが、來年は少し會員の都合で早くする積だから、丁度會を二つ續けて開くと同じ事になる。必死の勉強をやらなければならぬ。それ迄に是非美禰子の肖像を描き上げて仕舞ふ積である。迷惑だらうが大晦日でも描かして呉れ。

「其代り此處ん所へ掛ける積です」

原口さんは此時始めて、黒い畫の方を向いた。野々宮さんは其間ほかんとして同じ畫を眺めて

わた。

「どうです。エラスケスは。尤も模寫ですがね。しかも餘り上出来ではない」と原口が始めて説明する。野々宮さんは何にも云ふ必要がなくなつた。

「どなたが御寫しになつたの」と女が聞いた。

「三井です。三井はもつと旨いんですがね。此畫はあまり感服出来ない」と二歩退がつて見た。『どうも、原畫が技巧の極點に達した人のものだから、旨く行かないね』

原口は首を曲げた。三四郎は原口の首を曲げた所を見てゐた。

「もう、皆見たんですか」と畫工が美禰子に聞いた。原口は美禰子に許話しかける。

「まだ」

「どうです。もう廢して、一所に出ちや。精養軒で御茶でも上げます。なに私は用があるから、どうせ一寸行かなければならない。——會の事でね、マネジャーに相談して置きたい事がある。懇意の男だから。——今丁度御茶に好い時分です。もう少しするとね、御茶には遅し晚餐には早し、中途半端になる。どうです。一所に入らつしやいな』

美禰子は三四郎を見た。三四郎はいつでも可い顔をしてゐる。野々宮は立つた儘關係しない。

「折角來たものだから、皆見て行きませう。ねえ、小川さん」

三四郎はえゝと云つた。

「ぢや、斯うなさい。此奥の別室にね。深見さんの遺畫があるから、それ丈見て、歸りに精養軒へ入らつしやい。先へ行つて待つてゐますから」

「難有う」

「深見さんの水彩は普通の水彩の積で見ちや不可ませんよ。何處迄も深見さんの水彩なんだから。實物を見る氣にならないで、深見さんの氣韻を見る氣になつてゐると、中々面白い所が出て來ます」と注意して、原口は野々宮と出て行つた。美禰子は禮を云つて其後影を見送つた。二人は振り返らなかつた。

女は歩を回らして、別室へ入つた。男は一足後から續いた。光線の乏しい暗い部屋である。細長い壁に一行に懸つてゐる深見先生の遺畫を見ると、成程原口さんの注意した如く殆んど水彩ばかりである。三四郎が著るしく感じたのは、其水彩の色が、どれも是も薄くて、數が少くつて、

對照に乏しくつて、日向へでも出さないと引き立たないと思ふ程地味に描いてあるといふ事である。其代り筆が些とも滞つてゐない。殆んど一氣呵成に仕上た趣がある。繪の具の下に鉛筆の輪廓が明かに透いて見えるのでも、洒落な畫風がわかる。人間杯になると、細くて長くて、丸で鼓竿の様である。こゝにもゼニスが一枚ある。

「是もゼニスですね」と女が寄つて來た。

「えゝ」と云つたが、ゼニスで急に思ひ出した。

「さつき何を云つたんですか」

女は「さつき？」と聞き返した。

「さつき、僕が立つて、彼方のゼニスを見てゐる時です」

女は又眞白な齒を露はした。けれども何とも云はない。

「用でなければ聞なくつても可いです」

「用ぢやないのよ」

三四郎はまだ變な癖をしてゐる。曇つた秋の日はもう四時を越した。部屋は薄暗くなつてくる。

觀覽人は極めて少い。別室の中には、只男女二人の影があるのみである。女は畫を離れて、三四郎の眞正面に立つた。

「野々宮さん。ね、ね」

「野々宮さん……」

「解つたでせう」

美禰子の意味は、大濤の崩れる如く一度に三四郎の胸を浸した。

「野々宮さんを愚弄したのですか」

「何んで？」

女の語氣は全く無邪氣である。三四郎は忽然として、後を云ふ勇氣がなくなつた。無言の儘二歩動き出した。女は縋る様に付いて來た。

「あなたを愚弄したんぢや無いのよ」

三四郎は又立ち留つた。三四郎は脊の高い男である。上から美禰子を見下した。

「それで宜いです」

「何故悪いの？」

「だから可いです」

女は顔を背けた。二人共戸口の方へ歩いて来た。戸口を出る拍子に互の肩が觸れた。男は急に汽車で乗り合はした女を思ひ出した。美禰子の肉に觸れた所が、夢に疼く様な心持がした。

「本當に宜いの？」と美禰子が小さい聲で聞いた。向から二三人連の觀覽者が来る。

「兎も角出ませう」と三四郎が云つた。下足を受取つて、出ると戸外は雨だ。

「精養軒へ行きますか」

美禰子は答へなかつた。雨の中を濡れながら、博物館前の廣い原の中に立つた。幸ひ雨は今降り出した許である。其上烈しくはない。女は雨の中に立つて、見廻しながら、向ふの森を指した。

「あの樹の蔭へ這入りませう」

少し待てば歇みさうである。二人は大きな杉の下に這つた。雨を防ぐには都合の好くない樹である。けれども二人とも動かない。濡れても立つてゐる。二人共寒くなつた。女が「小川さん」と云ふ。男は八の字を寄せて、空を見てゐた顔と女の背が向つた。

「悪くつて？先刻のこと」

「可いです」

「だつて」と云ひながら、寄つて来た。「私、何故だか、あゝ爲たかつたんですもの。野々宮さんに失禮する積ぢやないんですけれども」

女は瞳を定めて、三四郎を見た。三四郎は其瞳の中に言葉よりも深き訴を認めた。——必竟あなた

の爲にした事ぢやありませんかと、二重瞼の奥で訴へてゐる。三四郎は、もう一遍、

「だから、可いです」と答へた。

雨は段々濃くなつた。雫の落ちない場所は僅かしかない。二人は段々一つ所へ塊まつて来た。肩と肩と擦れ合ふ位にして立ち竦んでゐた。雨の音の中で、美禰子が、

「さつきの御金を御遣ひなさい」と云た。

「借りませう。要る丈」と答へた。

「みんな、御遣ひなさい」と云つた。

與次郎が勧めるので、三四郎はとうとう精養軒の會へ出た。其時三四郎は黒い紬の羽織を着た。此羽織は、三輪田のお光さんの御母さんが織つて呉れたのを、紋付に染めて、お光さんが縫ひ上げたものだ、母の手紙に長い説明がある。小包が届いた時、一應着て見て、面白くないから、戸棚へ入れて置いた。それを與次郎が、勿體ないから是非着ろと云ふ。三四郎が着なければ、自分が持つて行つて着さうな勢ひであつたから、つい着る氣になつた。着て見ると悪くはない様だ。

三四郎は此出立で、與次郎と二人で精養軒の玄關に立つてゐた。與次郎の説によると、御客は斯うして迎へべきものださうだ。三四郎はそんな事とは知なかつた。第一自分が御客の積でゐた。かうなると、紬の羽織では何だか安っぽい受附の氣がする。制服を着て來れば善かつたと思つた。其うち會員が段々來る。與次郎は來る人を捕まへて屹度何とか話しをする。悉く舊知の様にあしらつてゐる。御客が帽子と外套を給仕に渡し、廣い階子段の横を、暗い廊下の方へ折れると、三四郎に向つて、今のは誰某だと教へて呉れる。三四郎は御蔭で知名な人の顔を大分覚え

た。其内御客は略集つた。約三十人足らずである。廣田先生もゐる。野々宮さんもゐる。——是は理學者だけれども、畫や文學が好だからと云ふので、原口さんが、無理に引つ張り出したのださうだ。原口さんは無論ゐる。一番先へ來て、世話を焼いたり、愛嬌を振り蒔いたり、佛蘭西式の髻を撮んで見たり、萬事忙しさうである。

やがて着席となつた。各自勝手な所へ坐る。讓るものもなければ、争ふものもない。其内でも廣田先生はのろいにも似合はず一番に腰を卸して仕舞つた。たゞ與次郎と三四郎丈が一所になつて、入口に近く座を占めた。其他は悉く偶然の向ひ合せ、隣同志であつた。

野々宮さんと廣田先生の間に縞の羽織を着た批評家が坐つた。向ふには庄司と云ふ博士が座に着いた。是は與次郎の所謂文科で有力な教授である。フロツクを着た品格のある男であつた。髪を普通の倍以上長くしてゐる。それが電燈の光で、黒く渦を捲いて見える。廣田先生の坊主頭と比較すると大分相違がある。原口さんは大分離れて席を取つた。彼方の角だから、遠く三四郎と眞

向ひになる。折襟に、幅の廣い黒縞子を結んだ先がばつと開いて胸一杯になつてゐる。與次郎が、佛蘭西の畫工は、みんなあゝ云ふ襟飾を着けるものだと思へて呉れた。三四郎は肉汁を吸ひながら、丸で兵児帯の結目の様だと考へた。其うち談話が段々始まつた。與次郎は麥酒を飲む。何時もの様に口を利かない。流石の男も今日は少々謹んでゐると見える。三四郎が、小さな聲で、

「些と、ダーター、フアブラを遣らないか」と云ふと、「今日は不可ない」と答へたが、すぐ横を向いて、隣の男と話を始めた。あなたの、あの論文を拜見して、大に利益を得ましたとか何とか禮を述べてゐる。所が其論文は、彼が自分の前で、盛んに罵倒したものだから、三四郎には頗る不思議の思ひがある。與次郎は又此方を向いた。

「其羽織は中々立派だ。能く似合ふ」と白い紋を殊更注意して眺めてゐる。其時向ふの端から、原口さんが、野々宮に話しかけた。元來が大きな聲の人だから、遠くで應對するには都合が好い。今迄向ひ合せて言葉を換してゐた廣田先生と庄司といふ教授は、二人の應答を途中で遮る事を恐れて、談話をやめた。其他の人もみんな黙つた。會の中心點が始めて出來上つた。

「野々宮さん光線の壓力の試験はもう済みましたか」

「いや、まだ中々だ」

「随分手数が掛かるもんだね。我々の職業も根氣仕事だが、君の方はもつと劇しい様だ」

「畫はインスピレーションで直ぐ描けるから可いが、物理の實驗はさう旨くは不可ない」

「インスピレーションには辟易する。此夏ある所を通つたら婆さんが二人で問答をしてゐた。

聞いて見ると梅雨はもう明けたんだらうか、どうだらうかといふ研究なんだが、一人の婆さんが、昔は雷さへ鳴れば梅雨は明けるに極まつてゐたが、近頃ちや左うは不可ないと不平してゐる。

すると一人が何うして、雷位で明ける事ぢやありやしないと憤慨してゐた。——畫も其通り今の畫はインスピレーション位で描ける事ぢやありやしない。ねえ田村さん、小説だつて、左

うだらう」

隣りに田村といふ小説家が坐つて居た。此男が自分のインスピレーションは原稿の催促以外に何にもないと答へたので、大笑ひになつた。田村は、それから改たまつて、野々宮さんに、光線に壓力があるものか、あれば、どうして試験するかと聞き出した。野々宮さんの答は面白かつた。

雲母か何かで、十六武藏位の大きさの薄い圓盤を作つて、水晶の絲で釣して、眞空の中に置いて、此圓盤の面へ弧光燈の光を直角にあてると、此圓盤が光に壓されて動く。と云ふのである。一座は耳を傾けて聞いてゐた。中にも三四郎は腹の中で、あの福神漬の罐のなかに、そんな装置がしてあるのだらうと、上京の際、望遠鏡で驚かされた昔を思ひ出した。

「君、水晶の絲があるのか」と小さな聲で與次郎に聞いて見た。與次郎は頭を振つてゐる。

「野々宮さん、水晶の絲がありますか」

「え、水晶の粉をね。酸水素吹管の焰で溶かして置いて、兩方の手で、左右へ引つ張ると細い絲が出来るのです」

三四郎は「左うですか」と云つたぎり、引つ込んだ。今度は野々宮さんの隣にゐる綺の羽織の批評家が口を出した。

「我々はさう云ふ方面へ掛けると、全然無學なんです、始めは何うして氣が付いたものでせうな」

「理論上はマクスエル以來豫想されてゐたのですが、それをレベデフといふ人が始めて實驗で

證明したのです。近頃あの彗星の尾が、太陽の方へ引き付けられべき筈であるのに、出るたびに何時でも反對の方角に靡くのは光の壓力で吹き飛ばされるんぢやなからうかと思ひ付いた人もある位です」

批評家は大分感心したらしい。

「思ひ付きも面白いが、第一大きくて可いですね」と云つた。

「大きい許ぢやない、罪がなくつて愉快だ」と廣田先生が云つた。

「それで其思ひ付が外れたら猶罪がなくつて可い」と原口さんが笑つてゐる。

「否、どうも中つてゐるらしい。光線の壓力は半徑の二乗に比例するが、引力の方は半徑の三乗に比例するんだから、物が小さくなればなる程引力の方が負けて、光線の壓力が強くなる。もし彗星の尾が非常に細かい小片から出来てゐるとすれば、どうしても太陽とは反對の方へ吹き飛ばされる譯だ」

野々宮は、つい眞面目になつた。すると原口が例の調子で、

「罪がない代りに、大變計算が面倒になつて來た。矢つ張一利一害だ」と云つた。此一言で、

人々は元の通り麥酒の氣分に復した。廣田先生が、斯んな事を云ふ。

「どうも物理學者は自然派ぢや駄目の様だね」

物理學者と自然派の二字は少からず満場の興味を刺激した。

「それは何う云ふ意味ですか」と本人の野々宮さんが聞き出した。廣田先生は説明しなければならなくなつた。

「だつて、光線の壓力を試験する爲に、眼丈明けて、自然を觀察してゐたつて、駄目だからさ。自然の獻立のうちに、光線の壓力といふ事實は印刷されてゐない様ぢやないか。だから人工的に、水晶の絲だの、眞空だの、雲母だのと云ふ装置をして、其壓力が物理學者の眼に見えるやうに仕掛けるのだらう。だから自然派ぢやないよ」

「然し浪漫派でもないだらう」と原口さんが交ぜ返した。

「いや浪漫派だ」と廣田先生が勿體らしく辯解した。「光線と、光線を受けるものとを、普通の自然界に於ては見出せない様な位地關係に置く所が全く浪漫派ぢやないか」

「然し、一旦さういふ位地關係に置いた以上は、光線固有の壓力を觀察する丈だから、それからあとは自然派でせう」と野々宮さんが云つた。

「すると、物理學者は浪漫的な自然派ですね。文學の方で云ふと、イブセンの様なものぢやないか」と筋向ふの博士が比較を持ち出した。

「左様、イブセンの劇は野々宮君と同じ位な装置があるが、其装置の下に働く人物は、光線の様に自然の法則に従つてゐるか疑はしい」是は稿の羽織の批評家の言葉であつた。

「左うかも知れないが、斯う云ふ事は人間の研究上記憶して置くべき事だと思ふ。——即ち、ある状況の下に置かれた人間は、反對の方向に働き得る能力と權利とを有してゐる。と云ふ事なんだが。——所が妙な習慣で、人間も光線も同じ様に器械的の法則に従つて活動すると思ふものだから、時々飛んだ間違が出来る。怒らせやうと思つて装置をすると、笑つたり、笑はせやうと目論んで掛ると、怒つたり、丸で反對だ。然しどちらにしても人間に違ない」と廣田先生が又問題が大きくして仕舞つた。

「ぢや、ある状況の下に、ある人間が、どんな所作をしても自然だと云ふ事になりますね」と向の小説家が質問した。廣田先生は、すぐ、

「え、え。どんな人間を、どう描いても世界に一人位はゐる様ぢやないですか」と答へた。「實際人間たる吾々は、人間らしからざる行爲動作を、何うしたつて想像出来るものぢやない。たゞ下手に書くから人間と思はれないのぢやないですか」

小説家は夫で黙つた。今度は博士が又口を利いた。

「物理學者でも、ガリレオが寺院の釣り洋燈の一振動の時間が、振動の大小に拘はらず同じである事に氣が付いたり、ニュートンが林檎が引力で落ちるのを發見したりするのは、始めから自然派ですね」

「さう云ふ自然派なら、文學の方でも結構でせう。原口さん、畫の方でも自然派がありますか」と野々宮さんが聞いた。

「あるとも。恐るべきクールベと云ふ奴がゐる。Vérité vraie. 何でも事實でなければ承知しない。然しさう猖獗を極めてゐるものぢやない。たゞ一派として存在を認められる丈さ。又左うでなくつちや困るからね。小説だつて同じ事だらう、ねえ君。矢つ張りモローや、シヤヴンヌの様なものゐる筈だらうぢやないか」

「居る筈だ」と隣の小説家が答へた。

食後には卓上演説も何もなかつた。たゞ原口さんが、しきりに九段の上の銅像の悪口を云つてゐた。あんな銅像を無暗に立てられては、東京市民が迷惑する。それより、美しい藝者の銅像でも拵らへる方が氣が利いてゐるといふ説であつた。與次郎は三四郎に九段の銅像は原口さんと仲の悪い人がつたんだと教へた。

會が濟んで、外へ出ると好い月であつた。今夜の廣田先生は庄司博士に善い印象を與へたらうかと與次郎が聞いた。三四郎は與へたらうと答へた。與次郎は共同水道栓の傍に立つて、此夏、夜散歩に来て、あまり暑いから此處で水を浴びてゐたら、巡查に見付かつて、挿鉢山へ駈け上がつたと話した。二人は挿鉢山の上で月を見て歸つた。

歸り路に與次郎が三四郎に向つて、突然借金の言譯をし出した。月の牙えた比較的寒い晩である。三四郎は殆んど金の事などは考へてゐなかつた。言譯を聞くのでさへ本氣ではない。どうせ返す事はあるまいと思つてゐる。與次郎も決して返すとは云はない。たゞ返せない事情を色々に話す。其話し方のはうが三四郎には餘程面白い。——自分の知つてゐる去る男が、失戀の結果、世

の中が厭になつて、とうとう自殺を仕様と決心したが、海もいや河もいや、噴火口は猶いや、首を縊るのは尤もいやと云ふ譯で、已を得ず短銃を買つて來た。買つて來て、まだ目的を遂行しないうちに、友達が金を借りに來た。金はないと斷つたが、是非どうかして呉れと訴へるので、仕方なしに、大事の短銃を借して遣つた。友達はそれを質に入れて一時を凌いだ。都合がついて、質を受出して返しに來た時は、肝心の短銃の主はもう死ぬ氣がなくなつて居た。だから此男の命は金を借りに來られた爲に助かつたと同じ事である。

「さう云ふ事もあるからなあ」と與次郎が云つた。三四郎には只可笑しい丈である。其外には何等の意味もない。高い月を仰いで大きな聲を出して笑つた。金を返さなくても愉快である。與次郎は、

「笑つちや不可ん」と注意した。三四郎は猶可笑しくなつた。

「笑はないで、よく考へて見る。己が金を返さなければこそ、君が美禰子さんから金を借りる事が出來たんだらう」

三四郎は笑ふのを止めた。

「それで？」

「それ丈で澤山ぢやないか。——君、あの女を愛してゐるんだらう」

與次郎は善く知つてゐる。三四郎はふんと云つて、又高い月を見た。月の側に白い雲が出た。

「君、あの女には、もう返したのか」

「いゝや」

「何時迄も借りて置いてやれ」

暢氣な事を云ふ。三四郎は何とも答へなかつた。しかし何時迄も借りて置く氣は無論無かつた。實は必要な二十圓を下宿へ拂つて、残りの十圓を其翌日すぐ里見の家へ届けやうと思つたが、今返しては却つて、好意に背いて、よくないと考へ直して、折角門内に這入られる機會を犠牲にして迄も引き返した。其時何かの拍子で、氣が緩んで、其十圓をくづして仕舞つた。實は今夜の會費も其内から出てゐる。自分の許ではない。與次郎のもその内から出てゐる。あとには、漸く三圓残つてゐる。三四郎は夫で冬襦袢を買はうと思つた。

實は與次郎が到底返しさうもないから、三四郎は思ひ切つて、此間國元へ三十圓の不足を請求

した。充分な學資を月々貰つてゐながら、たゞ不足だからと云つて請求する譯には行かない。三四郎はあまり嘘を吐いた事のない男だから、請求の理由に至つて困却した。仕方がないからたゞ友達が金を失くして弱つてゐたから、つい氣の毒になつて貸してやつた。其結果として、今度は此方が弱る様になつた。どうか送つて呉れと書いた。

直返事を出して呉れれば、もう届く時分であるのにまだ來ない。今夜あたりは殊によると來てゐるかも知れぬ位に考へて、下宿へ歸つて見ると、果して、母の手蹟で書いた封筒がちやんと机の上に乗つてゐる。不思議な事に、何時も必ず書留で來るのが、今日は三錢切手一枚で濟ましてある。開いて見ると、中は例になく短い。母としては不親切な位、用事丈で申し納めて仕舞つた。依頼の金は野々宮さんの方へ送つたから、野々宮さんから受取れといふ差圖に過ぎない。三四郎は床を取つて寐た。

翌日も其翌日も三四郎は野々宮さんの所へ行かなかつた。野々宮さんの方でも何とも云つて來なかつた。さうしてゐる内に一週間程経つた。仕舞に野々宮さんから、下宿の下女を使ひに手紙を寄こした。親母さんから頼まれたものがあるから、一寸來て呉れるとある。三四郎は講義の隙を見て、又理科大學の穴倉へ降りて行つた。其處で立談の間に事を濟ませやうと思つた所が、左う旨くは行かなかつた。此夏は野々宮さん丈で專領してゐた部屋に髭の生えた人が二三人ゐる。制服を着た學生も二三人ゐる。それが、みんな熱心に、靜肅に、頭の上の日の當る世界を餘所にして、研究を遣つてゐる。其内で野々宮さんは尤も多忙に見えた。部屋の入口に顔を出した三四郎を一寸見て、無言の儘近寄つて來た。

「國から、金が届いたから、取りに來て呉れ玉へ。今此處に持つてゐないから。それからまだ外に話す事もある」

三四郎ははあと答へた。今夜でも好いかと尋ねた。野々宮は少しく考へてゐたが、仕舞に思ひ切つて宜しいと云つた。三四郎は夫で穴倉を出た。出ながら、流石に理學者は根氣の能いものだと感心した。此夏見た福神漬の罐と、望遠鏡が依然として故の通りの位地に備へ付けてあつた。次の講義の時間に與次郎に逢つて是々だと話すと、與次郎は馬鹿だと云はない許に三四郎を眺めて、

「だから何時迄も借りて置いてやれと云つたのに。餘計な事をして年寄には心配を掛ける。宗

八さんには御談義をされる。是位愚な事はない」と丸で自分から事が起つたとは認めてゐない申分である。三四郎も此問題に關しては、もう與次郎の責任を忘れて仕舞つた。従つて與次郎の頭に掛つて來ない返事をした。

「何時迄も借りて置くのは、厭だから、家へさう云つて遣つたんだ」

「君は厭でも、向ふでは喜ぶよ」

「何故」

此何故が三四郎自身には幾分か虚偽の響らしく聞えた。然し相手には何等の影響も與へなかつたらしい。

「當り前ぢやないか。僕を人にしたつて、同じ事だ。僕に金が餘つてゐるとするぜ。左うすれば、其金を君から返して貰ふよりも、君に貸して置く方が善い心持だ。人間はね、自分が困らない程度内で、成る可く人に親切がして見たいものだ」

三四郎は返事をしないで、講義を筆記し始めた。二三行書き出すと、與次郎が又、耳の傍へ口を持つて來た。

「おれだつて、金のある時は度々人に貸した事がある。然し誰も決して返したものが無い。夫だからおれは此通り愉快だ」

三四郎は眞逆、左うかとも云へなかつた。薄笑ひをした丈で、又洋筆を走らし始めた。與次郎も夫からは落付いて、時間の終る迄口を利かなかつた。

號鐘が鳴つて、二人肩を並べて教場を出るとき、與次郎が、突然聞いた。

「あの女は君に惚れてゐるのか」

二人の後から續々聽講生が出て來る。三四郎は已むを得ず無言の儘階子段を降りて横手の玄關から、圖書館傍の空地へ出て、始めて與次郎を顧みた。

「能く分らない」

與次郎は暫らく三四郎を見てゐた。

「左う云ふ事もある。然し能く分つたとして、君、あの女の夫になれるか」

三四郎は未だ曾て此問題を考へた事がなかつた。美禰子に愛せられるといふ事實其物が、彼女の夫たる唯一の資格の様な氣がしてゐた。云はれて見ると、成程疑問である。三四郎は首を傾

けた。

「野々宮さんならなれる」と與次郎が云つた。

「野々宮さんと、あの人は何か今迄に關係があるのか」

三四郎の顔は彫り付けた様に眞面目であつた。與次郎は一口、

「知らん」と云た。三四郎は黙つてゐる。

「まあ野々宮さんの所へ行つて、御談義を聞いて來い」と云ひ棄て、相手は池の方へ行き掛けた。三四郎は愚劣の看板の如く突立つた。與次郎は五六歩行つたが、又笑ひながら歸つて來た。

「君、いつそ、よし子さんを貰はないか」と云ひながら、三四郎を引つ張つて、池の方へ連れて行つた。歩きながら、あれなら好い、あれなら好いと、二度程繰返した。其内又號鐘が鳴つた。

三四郎は其夕方野々宮さんの所へ出掛けたが、時間がまだ少し早過ぎるので、散歩かた／＼四丁目迄來て、襯衣を買ひに大きな唐物屋へ入つた。小僧が奥から色々持て來たのを撫で、見たり、廣げて見たりして、容易に買はない。譯もなく鷹揚に構へてゐると、偶然美禰子とよし子が連れ立つて香水を買ひに來た。あらと云つて挨拶をした後で、美禰子が、

「先達ては難有う」と禮を述べた。三四郎には此御禮の意味が明らかに解つた。美禰子から金を借りた翌日もう一遍訪問して餘分をすぐに返すべき所を、一先見合せた代りに、二日ばかり待つて、三四郎は丁寧な禮状を美禰子に送つた。

手紙の文句は、書いた人の、書いた當時の氣分を素直に表はしたものであるが、無論書き過ぎてゐる。三四郎は出来る丈の言葉を層々と排列して感謝の意を熱烈に致した。普通のものから見れば殆ど借金の禮状とは思はれない位に、湯氣の立つたものである。然し感謝以外には、何にも書いてない。夫だから、自然の勢、感謝が感謝以上になつたのである。三四郎は此手紙を郵便に入れるとき、時を移さぬ美禰子の返事を豫期してゐた。所が折角の封書はたゞ行つた儘である。夫から美禰子に逢ふ機會は今日迄なかつた。三四郎はこの微弱なる「此間は難有う」といふ反響に對して、確乎した返事をする勇氣も出なかつた。大な襯衣を兩手で眼の先へ廣げて眺めながら、よし子が居るからあゝ冷淡なんだらうかと考へた。それから此襯衣も此女の金で買うんだなと考へた。小僧はどれになさいますと催促した。

二人の女は笑ひながら側へ來て、一所に襯衣を見て呉れた。仕舞に、よし子が「是になさい」

と云つた。三四郎はそれにした。今度は三四郎の方が香水の相談を受けた。一向分らない。ヘリオトロープと書いてある罎を持つて、好加減に、是はどうですと云ふと、美禰子が、「それに爲ませう」とすぐ極めた。三四郎は氣の毒な位であつた。

表へ出て分れやうとすると、女の方が互に御辭儀を始めた。よし子が「ぢや行つて来てよ」と云ふと、美禰子が、「御早く……」と云つてゐる。聞いて見て、妹が兄の下宿へ行く所だといふ事が解つた。三四郎は又奇麗な女と二人連で追分の方へ歩くべき宵となつた。日はまだ全く落ちてゐない。

三四郎はよし子と一所に歩くよりは、よし子と一所に野々宮の下宿で落ち合はねばならぬ機会を聊か迷惑に感じた。いつその事今夜は家へ歸つて、又出直さうかと考へた。然し、與次郎の所謂御談義を聞くには、よし子が傍に居て呉れる方が便利かも知れない。まさか人の前で、母から、斯ういふ依頼があつたと、遠慮なしの注意を與へる譯はなからう。ことに依ると、たゞ金を受取る丈で済むかも知れない。——三四郎は腹の中で、一寸狡い決心をした。

「僕も野々宮さんの所へ行く所です」

「さう、御遊びに？」

「いえ、少し用があるんです。あなたは遊びですか」

「いゝえ、私も御用なの」

両方が同じ様な事を聞いて、同じ様な答を得た。しかし両方共迷惑を感じてゐる氣色が更にない。三四郎は念の爲め、邪魔ぢやないかと尋ねて見た。些とも邪魔にはならないさうである。女は言葉で邪魔を否定した許ではない。顔では寧ろ何故そんな事を質問するかと驚いてゐる。三四郎は店先の瓦斯の光で、女の黒い眼のなかに、其驚きを認めたと思つた。事實としては、たゞ大きく黒く見えた許である。

「ヴィオリンを買ひましたか」

「何うして御存じ」

三四郎は返答に窮した。女は頓着なく、すぐ、斯う云つた。

「いくら兄さんに左う云つても、たゞ買つてやる、買つてやると云ふ許で、些とも買つて呉れなかつたんですの」

三四郎は腹の中で、野々宮よりも廣田よりも、寧ろ與次郎を非難した。

二人は追分の通りを細い露路に折れた。折れると中に家が澤山ある。暗い路を戸毎の軒燈が照らしてゐる。其軒燈の一つの前に留つた。野々宮は此奥にゐる。

三四郎の下宿とは殆んど一丁程の距離である。野々宮が此處へ移つてから、三四郎は二三度訪問した事がある。野々宮の部屋は廣い廊下を突き當つて、二段ばかり真直に上ると、左手に離れた二間である。南向に餘處の廣い庭を殆んど椽の下に控へて、晝も夜も至極靜である。此離座敷に立て籠つた野々宮さんを見た時、成程家を疊んで下宿をするのも悪い思付ではなかつたと、始めて来た時から、感心した位、居心地の好い所である。其時野々宮さんは廊下へ下りて、下から自分の部屋の軒を見上げて、一寸見給へ藁葺だと云つた。成程珍らしく屋根に瓦を置いてなかつた。

今日は夜だから、屋根は無論見えないが、部屋の中には電燈が點いてゐる。三四郎は電燈を見るや否や藁葺を思ひ出した。さうして可笑しくなつた。

「妙な御客が落ち合つたな。入口で逢つたのか」と野々宮さんが妹に聞いてゐる。妹は然らざ

る旨を説明してゐる。序に三四郎の様な襯衣を買つたら好からうと助言してゐる。夫から、此間のグイオリンは和製で音が悪くつて不可ない。買ふのを是迄延期したのだから、もう少し良いのを買ひ易へて呉れと頼んでゐる。切めて美禰子さんのなら我慢すると云つてゐる。其外似たり寄つたりの駄々をしきりに捏てゐる。野々宮さんは別段怖い顔もせず、と云つて、優しい言葉も掛けず、たゞ左うかくと聞いてゐる。

三四郎は此間何にも云はずにゐた。よし子は愚な事ばかり述べる。且つ少しも遠慮をしない。

それが馬鹿とも思へなければ、我儘とも受取れない。兄との應對を傍にゐて聞いてゐると、廣い日當の好い畠へ出た様な心持がする。三四郎は來るべき御談義の事を丸で忘れて仕舞つた。其時突然驚かされた。

「あゝ、私忘れてゐた。美禰子さんの御言傳があつてよ」

「左うか」

「嬉しいでせう。嬉しくなくつて？」

野々宮さんは痒い様な顔をした。さうして、三四郎の方を向いた。

「僕の妹は馬鹿ですね」と云つた。三四郎は仕方なしに、たゞ笑つてゐた。
「馬鹿ぢやないわ。ねえ、小川さん」

三四郎は又笑つてゐた。腹の中ではもう笑ふのが厭になつた。

「美禰子さんがね、兄さんに文藝協會の演藝會に連れて行つて頂戴つて」

「里見さんと一所に行つたら宜からう」

「御用が有るんですつて」

「御前も行くのか」

「無論だわ」

野々宮さんは行くとも行かないとも答へなかつた。又三四郎の方を向いて、今夜妹を呼んだのは、眞面目の用があるんだのに、あんな呑氣許り云つてゐて困ると話した。聞いて見ると、學者丈あつて、存外淡泊である。よし子に縁談の口がある。國へさう云つてやつたら、両親も異存はないと返事をして來た。夫に就て本人の意見をよく確める必要が起つたのだと云ふ。三四郎はたゞ結構ですと答へて、成るべく早く自分の方を片付けて歸らうとした。そこで、

「母からあなたに御面倒を願つたさうで」と切り出した。野々宮さんは、

「何、大して面倒でもありませんがね」とすぐに机の抽出から、預かつたものを出して、三四郎に渡した。

「御母さんが心配して、長い手紙を書いて寄こしましたよ。三四郎は餘儀ない事情で月々の學資を友達に貸したと云ふが、いくら友達だつて、さう無暗に金を借りるものぢやあるまいし、よし借たつて返す筈だらうつて。田舎のものは正直だから、さう思ふのも無理はない。それからね、三四郎が貸すにしても、あまり貸方が大袈裟だ。親から月々學資を送つて貰ふ身分でゐながら、一度に二十圓の三十圓のと、人に用立てるなんて、如何にも無分別だとあるんですがね——何だか僕に責任が有る様に書いてあるから困る。……」

野々宮さんは三四郎を見て、にや／＼笑つてゐる。三四郎は眞面目に、「御氣の毒です」といつた許である。野々宮さんは、若いものを、極め付ける積で云つたんで無いと見えて、少し調子を變へた。

「なに、心配する事はありませんよ。何でもない事なんだから。たゞ御母さんは、田舎の相場

で、金の價値を付けるから、三十圓が大變重くなるんだね。何でも三十圓あると、四人の家族が半年食つて行けると書いてあつたが、そんなものかな、君」と聞いた。よし子は大きな聲を出して笑つた。三四郎にも馬鹿氣てゐる所が頗る可笑しいんだが、母の言條が、全く事實を離れた作り話でないのだから、其處に氣が付いた時には、成程輕率な事をして悪かつたと少しく後悔した。「さうすると、月に五圓の割だから、一人前一圓二十五錢に當る。それを三十日に割り付ける」と、四錢ばかりだが——いくら田舎でも少し安過る様だな」と野々宮さんが計算を立てた。

「何を食べたら、その位で生きてゐられるでせう」とよし子が眞面目に聞き出した。三四郎も後悔する暇がなくなつて、自分の知つてゐる田舎生活の有様を色々話して聞かした。其中には宮籠といふ慣例もあつた。三四郎の家では、年に一度づゝ村全體へ十圓寄附する事になつてゐる。其時には六十戸から一人づゝ出て、其六十人が、仕事を休んで、村の御宮へ寄つて、朝から晩迄、酒を飲みつゞけに飲んで、御馳走を食ひつゞけに食ふんだといふ。

「それで十圓」とよし子が驚いてゐた。御談義は是で何處かへ行つたらしい。それから少し雑談をして一段落付いた時に、野々宮さんが改めて、斯う云つた。

「何しろ、御母さんの方ではね。僕が一應事情を調べて、不都合がないと認めたら、金を渡して呉れる。さうして面倒でも其事情を知らせて貰ひたいといふんだが、金は事情も何にも聞かないうちに、もう渡して仕舞つたしと、——何うするかね。君慥か佐々木に貸したんですね」

三四郎は美禰子から洩れて、よし子に傳はつて、それが野々宮さんに知れてゐるんだと判じた。然し其金が巡り巡つてヴィオリンに變形したものは兄妹とも氣が付かないから一種妙な感じがした。たゞ「左うです」と答へて置いた。

「佐々木が馬券を買つて、自分の金を失くしたんだつてね」

「えゝ」

よし子は又大きな聲を出して笑つた。

「ぢや、好加減に御母さんの所へさう云つて上げやう。然し今度から、そんな金はもう貸さない事に爲たら好いでせう」

三四郎は貸さない事にする旨を答へて、挨拶をして、立ち掛けると、よし子も、もう歸らうと云ひ出した。

「先刻の話をしなくつちや」と兄が注意した。

「能くつてよ」と妹が拒絶した。

「能くはないよ」

「能くつてよ。知らないわ」

兄は妹の顔を見て黙つてゐる。妹は、また斯う云つた。

「だつて仕方がないぢや、ありませんか。知りもしない人の所へ、行くか行かないかつて、聞いたつて。好でも嫌でもないんだから、何にも云ひ様はありやしないわ。だから知らないわ」

三四郎は知らないわの本意を漸く會得した。兄妹を其儘にして急いで表へ出た。

人の通らない軒燈ばかり明かな露路を抜て表へ出ると、風が吹く。北へ向き直ると、まともに顔へ當る。時を切つて、自分の下宿の方から吹いてくる。其時三四郎は考へた。此風のなかを、

野々宮さんは、妹を送つて里見迄連れて行つて遣るだらう。

下宿の二階へ上つて、自分の室へ這入つて、坐つて見ると、矢つ張り風の音がする。三四郎は斯う云ふ風の音を聞く度に、運命といふ字を思ひ出す。ごとくと鳴つて来る度に疎みたくなる。自

分ながら決して強い男とは思つてゐない。考へると、上京以来自分の運命は大概與次郎の爲に製らへられてゐる。しかも多少の程度に於て、和氣霽然たる翻弄を受ける様に製らへられてゐる。與次郎は愛すべき悪戯ものである。向後も此愛すべき悪戯ものゝ爲に、自分の運命を握られてゐる。さうに思ふ。風がしきりに吹く。慥に與次郎以上の風である。

三四郎は母から來た三十圓を枕元へ置いて寐た。此三十圓も運命の翻弄が産んだものである。此三十圓が是から先どんな働きをするか、丸で分らない。自分はこれを美禰子に返しに行く。美禰子がこれを受取る時に、又一煽り來るに極つてゐる。三四郎は成るべく大きく來れば好いと思つた。

三四郎は夫なり寐付いた。運命も與次郎も手を下し様のない位すこやかな眠に入つた。すると半鐘の音で眼が覺めた。何處かで人聲がする。東京の火事は是で二返目である。三四郎は寐巻の上へ羽織を引掛けて、窓を明けた。風は大分落ちてゐる。向ふの二階屋が風の鳴るなかに、眞黒に見える。家が黒い程、家の後の空は赤かつた。

三四郎は寒いのを我慢して、しばらく此赤いものを見詰めてゐた。其時三四郎の頭には運命が

あり／＼と赤く映つた。三四郎は又暖かい布團のなかに潜り込んだ。さうして、赤い運命のなかで狂ひ回る多くの人の身の上を忘れた。

夜が明ければ常の人である。制服を着けて、帳面を持つて、學校へ出た。たゞ三十圓を懐にする事だけは忘れなかつた。生憎時間割の都合が悪い。三時迄ぎつしり詰つてゐる。三時過に行けば、よし子も學校から歸つて來てゐるだらう。ことに依れば里見恭助といふ兄も在宅かも知れない。人がゐては、金を返すのが、全く駄目の様な氣がする。

又與次郎が話し掛けた。

「昨夜は御談義を聞いたか」

「なに御談義といふ程でもない」

「左うだらう、野々宮さんは、あれで理由の解つた人だからな」と云つて何處へ行つて仕舞つた。二時間後の講義のときに又出逢つた。

「廣田先生のことは大丈夫旨く行きさうだ」と云ふ。どこ迄事が運んだかと聞いて見ると、
「いや心配しないでも好い。いづれ緩くり話す。先生が君がしばらく來ないと云つて、聞いて

ゐたぞ。時々行くが好い。先生は一人ものだからな。吾々が慰めて遣らんと、不可ん。今度何か買つて來い」と云ひつ放して、それなり消えて仕舞つた。すると、次の時間に又何處からか現れた。今度は何と思つたか、講義の最中に、突然、

「金受取たりや」と電報の様なものを白紙へ書いて出した。三四郎は返事を書かうと思つて、教師の方を見ると、教師がちやんと此方を見てゐる。白紙を丸めて足の下へ抛げた。講義が終るのを待つて、始めて返事をした。

「金は受取つた、此處にある」

「左うか夫は好かつた。返す積りか」

「無論返すさ」

「それが好からう。早く返すが好い」

「今日返さうと思ふ」

「うん午過遅くならゐるかもしれない」

「何處かへ行くのか」

「行くとも、毎日々々晝に描かれに行く。もう餘程出来たらう」

「原口さんの所か」

「うん」

三四郎は與次郎から原口さんの宿所を聞き取つた。

十

廣田先生が病氣だと云ふから、三四郎が見舞に來た。門を這入ると、玄關に靴が一足揃へてある。醫者かも知れないと思つた。いつもの通り勝手口へ回ると誰もゐない。のそ／＼上り込んで茶の間へ來ると、座敷で話し聲がする。三四郎はしばらく佇んでゐた。手に可なり大きな風呂敷包を提げてゐる。中には樽柄が一杯入つてゐる。今度來る時は、何か買つてこいと、與次郎の注意があつたから、追分の通で買つて來た。すると座敷のうちで、突然どたりばたりと云ふ音がした。誰か組打を始めたらしい。三四郎は必定喧嘩と思ひ込んだ。風呂敷包を提げた儘、仕切りの唐紙を鋭どく一尺許明けて屹と覗き込んだ。廣田先生が茶の袴を穿いた大きな男に組み敷かれ

てゐる。先生は俯伏の顔を際どく疊から上げて、三四郎を見たが、にやりと笑ひながら、

「やあ、御出」と云つた。上の男は一寸振り返つた儘である。

「先生、失禮ですが、起きて御覽なさい」と云ふ。何でも先生の手を逆に取りつて、肘の關節を表から、膝頭で壓さへてゐるらしい。先生は下から、到底起きられない旨を答へた。上の男は、それで、手を離して、膝を立て、袴の襷を正しく、居住居を直した。見れば立派な男である。先生もすぐ起き直つた。

「成程」と云つてゐる。

「あの流で行くと、無理に逆らつたら、腕を折る恐れがあるから、危険です」

三四郎は此間答で、始めて、此兩人の今何をしてゐたかを悟つた。

「御病氣ださうですが、もう宜しいんですか」

「え、もう宜しい」

三四郎は風呂敷包を解いて、中にあるものを、二人の間に廣げた。

「柿を買つて來ました」

廣田先生は書齋へ行つて、小刀を取つて来る。三四郎は臺所から庖丁を持つて来た。三人で柿を食ひ出した。食ひながら、先生と知らぬ男はしきりに地方の中學の話を始めた。生活難の事、紛擾の事、一つ所に長く留つてゐられぬ事、學科以外に柔術の教師をした事、ある教師は、下駄の臺を買つて、鼻緒は古いのを、着せ更へて、用ひられる文用ひる位にしてゐる事、今度辭職した以上は、容易に口が見付かりさうもない事、已を得ず、それ迄妻を國元へ預けた事——中々盡きさうもない。

三四郎は柿の核を吐き出しながら、此男の顔を見てゐて、情なくなつた。今の自分と、此男と比較して見ると、丸で人種が違ふ様な氣がする。此男の言葉のうちには、もう一遍學生生活がして見たい。學生生活程氣樂なものはないと云ふ文句が何度も繰返された。三四郎は此文句を聞くたびに、自分の壽命も僅か二三年の間なのか知らんと、盆槍考へ始めた。與次郎と蕎麥などを食ふ時の様に、氣が冴えない。

廣田先生は又立つて書齋に入つた。歸つた時は、手に一卷の書物を持つてゐた。表紙が赤黒くつて、切り口の埃で汚れたものである。

「是が此間話したハイドリオタフヒア。退屈なら見てゐ玉へ」

三四郎は禮を述べて書物を受け取つた。

「寂寞の罌粟花を散らすや頻なり。人の記念に對しては、永劫に價すると否とを問ふ事なし」といふ句が眼に付いた。先生は安心して柔術の學士と談話をつゞける。——中學教師杯の生活状態を聞いて見ると、みな氣の毒なもの許の様だが、眞に氣の毒と思ふのは當人丈である。なぜといふと、現代人は事實を好むが、事實に伴ふ情操は切棄る習慣である。切棄なければならぬ程世間が切迫してゐるのだから仕方がない。其證據には新聞を見ると分る。新聞の社會記事は十の九迄悲劇である。けれども我々は此悲劇を悲劇として味はう餘裕がない。たゞ事實の報道として讀む丈である。自分の取る新聞杯は、死人十何人と題して、一日に變死した人間の年齢、戸籍、死因を六號活字で一行づゝに書く事がある。簡潔明瞭の極である。又泥棒早見と云ふ欄があつて、何處へどんな泥棒が入つたか、一目に分る様に泥棒がかたまつてゐる。是も至極便利である。すべてが、この調子と思はなくつちや不可ない。辭職もその通り。當人には悲劇に近い出來事かも知れないが、他人には夫程痛切な感じを與へないと覺悟しなければなるまい。其積で運動したら

好からう。

「だつて先生位餘裕があるなら、少しは痛切に感じて善さうなものだが」と柔術の男が眞面目な顔をして云つた。此時は廣田先生も三四郎も、さう云つた當人も一度に笑つた。此男が中歸りさうもないので三四郎は、書物を借りて、勝手から表へ出た。

「朽ちざる墓に眠り、傳はる事に生き、知らるゝ名に残り、しからずば滄桑の變に任せて、後の世に存せんと思ふ事、昔より人の願なり。此願のかなへるとき、人は天國にあり。去れども眞なる信仰の教法より視れば、此願も此満足も無きが如くに果敢なきものなり。生きるとは、再の我に歸るの意にして、再の我に歸るとは、願にもあらず、望にもあらず、氣高き信者の見たる明白なる事實なれば、聖徒イノセントの墓地に横はるは猶埃及の砂中に埋まるが如し。常住の吾身を觀じ悦べば、六尺の狭きもアドリエーナスの大廟と異なる所あらず。成るが儘に成るとのみ覺悟せよ」

是はハイドリオタフピアの末節である。三四郎はぶら／＼白山の方へ歩ながら、往來のなかで、此一節を讀んだ。廣田先生から聞く所によると、此著者は有名な名文家で、此一篇は名文家の書いたうちの名文であるさうだ。廣田先生は其話をした時に、笑ひながら、尤も是は私の説ぢやないよと斷られた。成程三四郎にも何處が名文だか能く解らない。只句切りが悪くつて、字遣が異様で、言葉の運び方が重苦しくつて、丸で古い御寺を見る様な心持がした丈である。此一節又讀むにも道程にすると、三四町も掛つた。しかも判然とはしない。

贏ち得た所は物寂びてゐる。奈良の大佛の鐘を撞て、其餘波の響が、東京にゐる自分の耳に微に届いたと同じ事である。三四郎は此一節の齎す意味よりも、其意味の上に這ひかゝる情緒の影を嬉しがつた。三四郎は切實に生死の問題を考へた事のない男である。考へるには、青春の血が、あまりに暖か過ぎる。眼の前には眉を焦す程な大きな火が燃えてゐる。其感じが、眞の自分である。三四郎は是から曙の町の原口の所へ行く。

子供の葬式が來た。羽織を着た男がたつた二人着いてゐる。小さい棺は眞白な布で巻いてある。其傍に綺麗な風車を結び付けた。車がしきりに回る。車の羽瓣が五色に塗つてある。それが一色になつて回る。白い棺は綺麗な風車を斷間なく揺かして、三四郎の横を通り越した。三四郎は美しい葬だと思つた。

三四郎は他の文章と、他の葬式を餘處から見た。もし誰か来て、序に美禰子を餘處から見ると注意したら、三四郎は驚ろいたに違ひない。三四郎は美禰子を餘處から見る事が出来ない様な眼になつてゐる。第一餘處も餘處でもないもそんな區別は丸で意識してゐない。たゞ事實として、他の死に對しては、美しい穏やかな味があると共に、生きてゐる美禰子に對しては、美しい享樂の底に、一種の苦悶がある。三四郎は此苦悶を拂はうとして、眞直に進んで行く。進んで行けば苦悶が除れる様に思ふ。苦悶を除る爲めに一步傍へ退く事は夢にも案じ得ない。これを案じ得ない三四郎は、現に遠くから、寂滅の會を文字の上に眺めて、天折の憐れを、三尺の外に感じたのである。しかも、悲しい筈の所を、快く眺めて、美しく感じたのである。

曙町へ曲ると大きな松がある。此松を目標に來いと教はつた。松の下へ來ると、家が違つてゐる。向ふを見ると又松がある。其先にも松がある。松が澤山ある。三四郎は好い所だと思つた。多くの松を通り越して左へ折れると、生垣に奇麗な門がある。果して原口といふ標札が出てゐた。其標札は木理の込んだ黒つばい板に、緑の油で名前を派手に書いたものである。字だか模様だか分らない位凝つてゐる。門から玄關迄はかりりとして何にもない。左右に芝が植てある。

玄關には美禰子の下駄が揃へてあつた。鼻緒の二本が右左で色が違ふ。それで能く覚えてゐる。今仕事中だが、可ければ上れと云ふ小女の取次に尾いて、畫室へ這入つた。廣い部屋である。細長く南北に延びた床の上は、畫家らしく、取り亂れてゐる。先づ一部分には絨毯が敷いてある。それが部屋の大きさに較べると、丸で釣り合が取れないから、敷物として敷いたといふよりは、色の好い、模様の雅な織物として放りだした様に見える。離れて向に置いた大きな虎の皮も其通り、坐る爲の、設けの座とは受け取れない。絨毯とは不調和な位置に筋違に尾を長く曳いてゐる。砂を鍊り固めた様な大きな甕がある。其中から矢が二本出てゐる。鼠色の羽根と羽根の間が金箔で強く光る。其傍に鎧もあつた。三四郎は卵の花緘しと云ふのだらうと思つた。向ふ側の隅にはつと眼を射るものがある。紫の裾模様の小袖に金糸の刺繡が見える。袖から袖へ幔幕の綱を通して、蟲干の時の様に釣るした。袖は丸くて短い。是が元祿かと三四郎も氣が付いた。其外には畫が澤山ある。壁に掛けたの許でも大小合せると餘程になる。額縁を附けない下畫といふ様なものは、重ねて巻いた端が、巻き崩れて、小口をしたらなく露はした。

描かれつゝある人の肖像は、此彩色の眼を亂す間にある。描かれつゝある人は、突き當りの正

面に團扇を翳して立つた。描く男は丸い脊をぐるりと返して、調色板を持つた儘、三四郎に向つた。口に太い烟管を啣へてゐる。

「遣つて来たね」と云つて烟管を口から取つて、小さい丸卓の上に置いた。燐寸と灰皿が載つてゐる。椅子もある。

「掛け給へ。——あれだ」と云つて、描き掛けた畫布の方を見た。長さは六尺もある。三四郎はたゞ、

「成程大きなものですな」と云つた。原口さんは、耳にも留めない風で、

「うん、中々」と獨言の様に、髪の毛と、背景の境の所を塗り始めた。三四郎は此時漸く美禰子の方を見た。すると女の翳した團扇の陰で、白い齒がかすかに光つた。

それから二三分は全く静かになつた。部屋は煖爐で温めてある。今日は外面でも、さう寒くはない。風は死に盡した。枯れた樹が音なく冬の日に包まれて立つてゐる。三四郎は畫室へ導かれた時、霞の中へ這入つた様な気がした。丸卓に腕を持たして、此静かさの夜に勝る境に、憚りなき精神を溺れしめた。此静かさのうちに、美禰子がゐる。美禰子の影が次第に出来上りつゝある。

肥つた畫工の畫筆丈が動く。夫も眼に動く丈で、耳には静である。肥つた畫工も動く事がある。然し足音はしない。

静なものに封じ込められた美禰子は全く動かない。團扇を翳して立つた姿其儘が既に畫である。三四郎から見ると、原口さんは、美禰子を寫してゐるのではない。不可思議に奥行のある畫から、精出して、其奥行丈を落して、普通の畫に美禰子を描き直してゐるのである。にも拘らず第二の美禰子は、この静さのうちに、次第と第一に近づいて来る。三四郎には、此二人の美禰子の間に、時計の音に觸れない、静かな長い時間が含まれてゐる様に思はれた。其時間が畫家の意識にさへ上らない程柔順しく經つて従つて、第二の美禰子が漸く追付いて来る。もう少しで雙方がびたりと出合つて一つに収まると云ふ所で、時の流れが急に向を換へて永久の中に注いで仕舞ふ。原口さんの畫筆は夫より先には進めない。三四郎は其處迄跟いて行つて、氣が付いて、不圖美禰子を見た。美禰子は依然として動かずに居る。三四郎の頭は此静かな空氣のうちに覺えず動いてゐた。酔つた心持である。すると突然原口さんが笑ひ出した。

「又苦しくなつた様ですな」

女は何にも云はずに、すぐ姿勢を崩して、傍に置いた安樂椅子へ落ちる様にとんと腰を卸した。其時白い齒が又光つた。さうして動く時の袖と共に三四郎を見た。其眼は流星の様に三四郎の眉間を通り越して行つた。

原口さんは丸卓の傍迄来て、三四郎に、

「何うです」と云ひながら、燐寸を擦つて先刻の烟管に火を付けて、再び口に啣へた。大きな木の雁首を指で抑へて、二吹許り濃い烟を髭の中から出したが、やがて又丸い脊中を向けて畫に近付いた。勝手な所を自由に塗つてゐる。

繪は無論仕上つてゐないものだらう。けれども何處も彼處も萬遍なく繪の具が塗つてあるから、素人の三四郎が見ると、中々立派である。旨いか無味いか無論分らない。技巧の批評の出来ない三四郎には、たゞ技巧の齎す感じ丈がある。それすら、経験がないから、頗る正鵠を失してゐるらしい。藝術の影響に全然無頓着な人間でないと自らを證據立てる丈でも三四郎は風流人である。三四郎が見ると、此畫は一體にばつととしてゐる。何だか一面に粉が吹いて、光澤のない日光に當つた様に思はれる。影の所でも黒くはない。寧ろ薄い紫が射してゐる。三四郎は此畫を見て、

何となく軽快な感じがした。浮いた調子は猪牙船に乗つた心持がある。それでも何處か落ち付いてゐる。劍呑でない。苦つた所、澁つた所、毒々しい所は無論ない。三四郎は原口さんらしい畫だと思つた。すると原口さんは無雑作に畫筆を使ひながら、こんな事を云ふ。

「小川さん面白い話がある。僕の知つた男にね、細君が厭になつて離縁を請求したものがあつた。所が細君が承知をしないで、私は縁あつて、此家へ方付いたものですから、假令あなたが御厭でも私は決して出て参りません」

原口さんは其處で一吋畫を離れて、畫筆の結果を眺めてゐたが、今度は、美禰子に向つて、「里見さん。あなたが單衣を着て呉れないものだから、着物が描き悪くつて困る。丸で好加減にやるんだから、少し大膽過ぎますね」

「御氣の毒さま」と美禰子が云つた。

原口さんは返事もせず又畫面へ近寄つた。「それでね、細君の御尻が離縁するには餘り重くあつたものだから、友人が細君に向つて、斯う云つたんだとさ。出るのが厭なら、出ないでも好い。何時迄も家にゐるが好い。其代り己の方が出るから。——里見さん一寸立つて見て下さい。

團扇は何うでも好い。たゞ立てば。さう。難有う。——細君が、私が家に居つても、貴方が出て御仕舞になれば、後が困るぢやありませんかと云ふと、何構はないさ、御前は勝手に入夫でもしたら宜からうと答へたんだつて」

「それから、何うなりました」と三四郎が聞いた。原口さんは、語るに足りないと思つたものか、まだ後をつけた。

「何うもならないのさ。だから結婚は考へ物だよ。離合聚散、共に自由にならない。廣田先生を見給へ、野々宮さんを見給へ、里見恭助君を見給へ、序に僕を見給へ。みんな結婚をしてゐない。女が偉くなると、かう云ふ獨身ものが澤山出来て来る。だから社會の原則は、獨身ものが、出来得ない程度内に於て、女が偉くならなくつちや駄目だね」

「でも兄は近々結婚致しますよ」

「おや、左うですか。すると貴方は何うなります」

「存じません」

三四郎は美禰子を見た。美禰子も三四郎を見て笑つた。原口さん丈は畫に向いてゐる。「存じ

ません。存じません——ぢや」と畫筆を動かした。

三四郎は此機會を利用して、丸卓の側を離れて、美禰子の傍へ近寄つた。美禰子は椅子の脊に、油氣のない頭を、無雜作に持たせて、疲れた人の、身繕に心なき放擲の姿である。明らかさまに襦袢の襟から咽喉頸が出てゐる。椅子には脱ぎ捨てた羽織を掛けた。廂髪の上に綺麗な裏が見える。

三四郎は懷に三十圓入れてゐる。此三十圓が二人の間にある、説明しにくいものを代表してゐる。——と三四郎は信じた。返さうと思つて、返さなかつたのも是が爲である。思ひ切つて、今返さうとするのも是が爲である。返すと用がなくなつて、遠ざかるか、用がなくなつても、一層近付いて来るか、——普通の人から見ると、三四郎は少し迷信家の調子を帯びてゐる。

「里見さん」と云つた。

「なに」と答へた。仰向いて下から三四郎を見た。顔を故の如くに落ち付けてゐる。眼丈は動いた。それも三四郎の眞正面で穩かに留つた。三四郎は女を多少疲れてゐると判じた。

「丁度序だから、此處で返しませう」と云ひながら、鉤を一つ外して、内懐へ手を入れた。

女は又、

「なに」と繰り返した。故の通り、刺激のない調子である。内懐へ手を入れながら、三四郎は何うしやうと考へた。やがて思ひ切つた。

「此間の金です」

「今下すつても仕方がないわ」

女は下から見上げた儘である。手も出さない。身體も動かさない。顔も元の所に落ち付けてゐる。男は女の返事さへ能くは解し兼ねた。其時、

「もう少しだから、何うです」と云ふ聲が後で聞えた。見ると、原口さんが此方を向いて立つてゐる。畫筆を指の股に挟んだまゝ、三角に刈り込んだ髻の先を引つ張つて笑つた。美禰子は兩手を椅子の肘に掛けて、腰を卸したなり、頭と脊を眞直に延ばした。三四郎は小さな聲で、

「まだ餘程掛りますか」と聞いた。

「もう一時間ばかり」と美禰子も小さな聲で答へた。三四郎は又丸卓に歸つた。女はもう描かるべき姿勢を取つた。原口さんは又煙管を點けた。畫筆は又動き出す。脊を向けながら、原口

さんが斯う云つた。

「小川さん。里見さんの眼を見て御覽」

三四郎は云はれた通りにした。美禰子は突然額から團扇を放して、靜かな姿勢を崩した。横を向いて硝子越に庭を眺めてゐる。

「不可ない。横を向いてしまつちや、不可ない。今描き出した許だのに」

「何故餘計な事を仰しやる」と女は正面に歸つた。原口さんは辯解をする。

「冷かしたんぢやない。小川さんに話す事があつたんです」

「何を」

「是から話すから、まあ元の通りの姿勢に復して下さい。さう。もう少し肱を前へ出して。夫で小川さん、僕の描いた眼が、實物の表情通り出来てゐるかね」

「何うも能く分らんですが。一體斯うやつて、毎日々々描いてゐるのに、描かれる人の表情が何時も變らずにゐるものでせうか」

「それは變るだらう。本人が變るばかりぢやない、畫工の方の氣分も毎日變るんだから、本當

を云ふと、肖像畫が何枚でも出来上がらなくつちやならない譯だが、さうは行かない。又たつた一枚で可なり纏まつたものが出来るから不思議だ。何故と云つて見給へ……」

原口さんは此間始終筆を使つてゐる。美禰子の方も見てゐる。三四郎は原口さんの諸機關が一度に働くのを目撃して恐れ入つた。

「かう遣つて毎日描いてゐると、毎日の量が積り積つて、しばらくする内に、描いてゐる畫に一定の氣分が出来てくる。だから、たとひ外の氣分で戶外から歸つて來ても、畫室へ這入つて、畫に向ひさへすれば、ぢきに一種一定の氣分になれる。つまり畫の中の氣分が、此方へ乗り移るのだね。里見さんだつて同じ事だ。自然の儘に放つて置けば色々の刺激で色々の表情になるに極つてゐるんだが、それが實際畫の上へ大した影響を及ぼさないのは、あゝ云ふ姿勢や、斯う云ふ亂雑な鼓だとか、鎧だとか、虎の皮だとかいふ周圍のものが、自然に一種一定の表情を引き起す様になつて來て、其習慣が次第に他の表情を壓迫する程強くなるから、まあ大抵なら、此眼付を此儘で仕上げて行けば好いんだね。それに表情と云つたつて……」

原口さんは突然黙つた。何處か六づかしい所へ來たと見える。一歩許立ち退いて、美禰子と畫

を頻に見較べてゐる。

「里見さん、何かしましたか」と聞た。

「いゝえ」

此答は美禰子の口から出たとは思へなかつた。美禰子はそれ程靜かに姿勢を崩さずにゐる。

「それに表情と云つたつて」と原口さんが又始めた。「畫工はね、心を描くんぢやない。心が外へ見世を出してゐる所を描くんだから、見世さへ手落なく觀察すれば、身代は自ら分るものと、まあ、さうして置くんだね。見世で窺へない身代は畫工の擔任區域以外と諦めべきものだよ。だから我々は肉ばかり描いてゐる。どんな肉を描いたつて、靈が籠らなければ、死肉だから、畫として通用しない丈だ。そこで此里見さんの眼もね。里見さんの心を寫す積で描いてゐるんぢやない。たゞ眼として描いてゐる。此眼が氣に入つたから描いてゐる。此眼の恰好だの、二重瞼の影だの、眸の深さだの、何でも僕に見える所丈を残りなく描いて行く。すると偶然の結果として、一種の表情が出て來る。もし出て來なければ、僕の色出し具合が悪かつたか、恰好の取り方が間違つてゐるか、何方かになる。現にあの色あの形そのものが一種の表情なんだから仕方がない」

原口さんは、此時又二歩ばかり後へ退つて、美禰子と畫とを見較べた。
「何うも、今日は何うかしてゐるね。疲れたんでせう。疲れたら、もう廢しませう。——疲れ
ましたか」

「いゝえ」

原口さんは又畫へ近寄つた。

「それで、僕が何故里見さんの眼を選んだかと云ふとね。まあ話すから聞き給へ。西洋畫の女
の顔を見ると、誰の描いた美人でも、屹度大きな眼をしてゐる。可笑しい位大きな眼ばかりだ。
所が日本では觀音様を始めとして、お多福、能の面、もつとも著しいのは浮世繪にあらはれた美
人、悉く細い。みんな象に似てゐる。何故東西で美の標準がこれ程違ふかと思ふと、一寸不思議
だらう。所が實は何でもない。西洋には眼の大きい奴ばかりゐるから、大きい眼のうちで、美的
淘汰が行はれる。日本は鯨の系統ばかりだから——ピエロロチーといふ男は、日本人の眼は、あ
れで何うして開けるだらうなんて冷かしてゐる。——そら、さう云ふ國柄だから、どうしたつて
材料の寡ない大きな眼に對する審美眼が發達しやうがない。そこで選擇の自由の利く細い眼のう

ちで、理想が出来て仕舞つたのが、歌麿になつたり、祐信になつたりして珍重かられてゐる。然
しいくら日本的でも、西洋畫には、あゝ細いのは盲目を描いた様で見共なくつて不可ない。と云
つて、ラファエルの聖母の様なのは、天でありやしないし、有つた所が日本人とは云はれないか
ら、其所で里見さんを煩はす事になつたのさ。里見さんもう少しですよ」

答はなかつた。美禰子は凝としてゐる。

三四郎は此畫家の話を甚だ面白く感じた。とくに話文聴きに來たのならば猶幾倍の興味を添へ
たらうにと思つた。三四郎の注意の焦點は、今、原口さんの話の上にもない、原口さんの畫の上
にもない。無論向に立つてゐる美禰子に集まつてゐる。三四郎は畫家の話に耳を傾けながら、眼
丈は遂に美禰子を離れなかつた。彼の眼に映じた女の姿勢は、自然の経過を、尤も美しい刹那に、
捕虜にして動けなくした様である。變らない所に、永い慰藉がある。然るに原口さんが突然首を
振つて、女に何うかしましたかと聞いた。其時三四郎は、少し恐ろしくなつた位である。移り易
い美さを、移さずに据ゑて置く手段が、もう盡きたと畫家から注意された様に聞えたからである。
成程さう思つて見ると、何うかしてゐるらしくもある。色光澤が好くない、眼尻に堪へ難い蠟

さが見える。三四郎は此活人畫から受ける安慰の念を失つた。同時にもしや自分が此變化の原因ではなからうかと考へ付いた。忽ち強烈な個性的の刺激が三四郎の心を襲つて來た。移り行く美を果敢なむと云ふ共通性の情緒は丸で影を潜めて仕舞つた。——自分はその程の影響を此女の上の有して居る。——三四郎は此自覺のもとに一切の己れを意識した。けれどもその影響が自分に取つて、利益か不利益かは未決の問題である。

其時原口さんが、とうとう筆を擱いて、

「もう廢さう。今日は何うしても駄目だ」と云ひ出した。美禰子は持つてゐた團扇を、立ちながら床の上に落した。椅子に掛けた羽織を取つて着ながら、此方へ寄つて來た。

「今日は疲れてゐますね」

「私？」と羽織の裾を揃へて、紐を結んだ。

「いや實は僕も疲れた。また明日元氣の好い時に遣りませう。まあ御茶でも飲んで緩なさい」夕暮には、まだ間があつた。けれども美禰子は少し用があるから歸るといふ。三四郎も留められたが、わざと斷つて、美禰子と一所に表へ出た。日本の社會状態で、かう云ふ機會を、隨意に

造る事は、三四郎に取つて困難である。三四郎は成るべく此機會を長く引延ばして利用しやうと試みた。それで比較的人の通らない、閑靜な曙町を一廻り散歩しやうぢや無いかと女を誘つて見た。所が相手は案外にも應じなかつた。一直線に生垣の間を横切つて、大通へ出た。三四郎は、竝んで歩きながら、

「原口さんも左う云つてゐたが、本當に何うかしたんですか」と聞いた。

「私？」と美禰子が又云つた。原口さんに答へたと同じ事である。三四郎が美禰子を知つてから、美禰子がかつて、長い言葉を使つた事がない。大抵の應對は一句か二句で済ましてゐる。しかも甚だ簡單なものに過ぎない。それでゐて、三四郎の耳には一種の深い響を與へる。殆ど他の人からは、聞き得る事の出来ない色が出る。三四郎はそれに敬服した。それを不思議がつた。

「私？」と云つた時、女は顔を半分程三四郎の方へ向けた。さうして二重瞼の切れ目から男を見た。其眼には暈が被つてゐる様に思はれた。何時になく感じが生温く來た。頬の色も少し蒼い。

「色が少し悪い様です」

「左うですか」

二人は五六歩無言であるいた。三四郎は何うともして、二人の間に掛つた薄い幕の様なものに裂き破りたくなつた。然し何と云つたら破れるか、丸で分別が出なかつた。小説などにある甘い言葉は遣ひたくない。趣味の上から云つても、社交上若い男女の習慣としても、遣ひ度ない。三四郎は事實上不可能の事を望んでゐる。望んでゐる許ではない。歩きながら工夫してゐる。

やがて、女の方から口を利き出した。

「今日何か原口さんに御用が御有りだつたの」

「いゝえ、用事は無かつたです」

「ぢや、たゞ遊びに入らしたの」

「いゝえ、遊びに行つたんぢやありません」

「ぢや、何んで入らしたの」

三四郎は此瞬間を捕へた。

「あなたに會ひに行つたんです」

三四郎は是で云へる丈の事を悉く云つた積である。すると、女はすこしも刺激に感じない、し

かも、例の如く男を酔はせる調子で、

「御金は、彼所ぢや頂けないのよ」と云つた。三四郎は落膽した。

二人は又無言で五六間來た。三四郎は突然口を開いた。

「本當は金を返しに行つたのぢやありません」

美禰子はしばらく返事をしなかつた。やがて、靜かに云つた。

「御金は私も要りません。持つて入らつしやい」

三四郎は堪へられなくなつた。急に、

「たゞ、あなたに會ひたいから行つたのです」と云つて、横に女の顔を覗き込んだ。女は三四郎を見なかつた。其時三四郎の耳に、女の口を洩れた微かな溜息が聞えた。

「御金は……」

「金なんぞ……」

二人の會話は雙方共意味を成さないで、途中で切れた。それなりで、又小半町程來た。今度は女から話し掛けた。

「原口さんの畫を御覽になつて、どう御思ひなすつて」

答へ方が色々あるので、三四郎は返事をせず少しの間歩いた。

「餘り出來方が早いので御驚ろきなさりやしなくつて」

「えゝ」と云つたが、實は始めて氣が付いた。考へると、原口が廣田先生の所へ来て、美禰子の肖像を描く意志を洩らしてから、まだ一ヶ月位にしかならない。展覽會で直接に美禰子に依頼してゐたのは、夫より後の事である。三四郎は畫の道に暗いから、あんな大きな額が、何の位な速度で仕上られるものか、殆んど想像の外にあつたが、美禰子から注意されて見ると、餘り早く出來過ぎてゐる様に思はれる。

「何時から取掛つたんです」

「本當に取り掛つたのは、つい此間ですけれども、其前から少し宛描いて頂いてゐたんです」

「其前つて、何時頃からですか」

「あの服装で分るでせう」

三四郎は突然として、始めて池の周圍で美禰子に逢つた暑い昔を思ひ出した。

「そら、あなた、椎の木の下に跣がんでゐらしたちやありませんか」

「あなたは團扇を翳して、高い所に立てゐた」

「あの畫の通りでせう」

「えゝ。あの通りです」

二人は顔を見合はした。もう少しで白山の坂の上へ出る。

向から車が走つて來た。黒い帽子を被つて、金縁の眼鏡を掛けて、遠くから見ても色光澤の好い男が乗つてゐる。此車が三四郎の眼に這入つた時から、車の上の若い紳士は美禰子の方を見詰めてゐるらしく思はれた。二三間先へ來ると、車を急に留めた。前掛を器用に跳ね退けて、蹴込みから飛び下りた所を見ると、脊のすらりと高い細面の立派な人であつた。髭を奇麗に剃つてゐる。それでゐて、全く男らしい。

「今迄待つてゐたけれども、餘り遅いから迎へに來た」と美禰子の眞前に立つた。見下して笑つてゐる。

「さう、難有う」と美禰子も笑つて、男の顔を見返したが、其眼をすぐ三四郎の方へ向けた。

「何誰」と男が聞いた。

「大學の小川さん」と美禰子が答た。

男は軽く帽子を取つて、向ふから挨拶をした。

「早く行かう。兄さんも待つてゐる」

好い具合に三四郎は追分へ曲るべき横町の角に立つてゐた。金はとう／＼返さずに分れた。

十一

此頃與次郎が學校で文藝協會の切符を賣つて回つてゐる。二三日掛かつて、知つたものへは略賣付けた様子である。與次郎はそれから知らないものを捕まへる事にした。大抵は廊下で捕まへる。すると中々放さない。どうか、斯うか買はせて仕舞ふ。時には談判中に號鐘が鳴つて取り逃す事もある。與次郎は之を時利あらずと號してゐる。時には相手が笑つてゐて、何時迄も要領を得ない事がある。與次郎は之を人利あらずと號してゐる。或時便所から出て來た教授を捕まへた。其教授は手帛で手を拭きながら、今一寸と云つた儘急いで圖書館へ這入つて仕舞つた。夫ざり決

して出て來ない。與次郎は之を——何とも號しなかつた。後影を見送つて、あれは腸加答兒に違ないと三四郎に教へて呉れた。

與次郎に切符の販賣方を何枚託まれたのかと聞くと、何枚でも賣れる丈託まれたのだと云ふ。餘り賣れ過ぎて演藝場に這入り切れない恐れはないかと聞くと、少しは有ると云ふ。それでは賣つた後で困るだらうと念を推すと、何大丈夫だ、中には義理で買ふものもあるし、事故で來ないものもあるし、それから腸加答兒も少しは出來るだらうと云つて、澄ましてゐる。

與次郎が切符を賣る所を見てゐると、引き易に金を渡すものからは無論即座に受け取るが、さうでない學生には只切符を渡してゐる。氣の小さい三四郎が見ると、心配になる位渡して歩く。あとから思ふ通り金が寄るかと思つて見ると、無論寄らないといふ答た。几帳面に僅か賣るよりも、だらしなく澤山賣る方が、大體の上にて利益だから斯うすると云つてゐる。與次郎は之をタイムス社が日本で百科全書を賣つた方法に比較してゐる。比較丈は立派に聞えたが、三四郎は何だか心元なく思つた。そこで一應與次郎に注意した時に、與次郎の返事は面白かつた。

「相手は東京帝國大學學生だよ」

「いくらら學生だつて、君の様に金に掛けると呑氣なのが多いだらう」

「なに善意に拂はないのは、文藝協會の方でも八釜敷は云はない筈だ。何うせ幾何切符が賣れたつて、とゞの詰りは協會の借金になる事は明かだから」

三四郎は念の爲、それは君の意見か、協會の意見かと糺して見た。與次郎は、無論僕の意見であつて、協會の意見であると都合のいゝ事を答へた。

與次郎の説を聞くと、今度の演藝會を見ないものは、丸で馬鹿の様な氣がする。馬鹿の様な氣がする迄與次郎は講釋をする。それが切符を賣る爲めだか、實際演藝會を信仰してゐる爲めだか、或はたゞ自分の景氣を付け、かねて相手の景氣をつけ、次いで演藝會の景氣をつけて、世上一般の空氣を出来る丈賑やかにする爲めだか、その所が一寸明晰に區別が立たないものだから、相手は馬鹿の様な氣がするにも拘らず、あまり與次郎の感化を蒙らない。

與次郎は第一に會員の練習に骨を折つてゐる話をする。話通に聞いてゐると、會員の多數は、練習の結果として、當日前に役に立たなくなりさうだ。それから背景の話をする。其背景が大したもの、東京にゐる有爲の青年畫家を悉く引き上げて、悉く應分の技倆を振はした様な事にな

る。次に服装の話をする。其服装が頭から足の先迄故實づくりに出来上つてゐる。次に脚本の話をする。それが、みんな新作で、みんな面白い。其外幾何でもある。

與次郎は廣田先生と原口さんに招待券を送つたと云つてゐる。野々宮兄妹と里見兄妹には上等の切符を買はせたと云つてゐる。萬事が好都合だと云つてゐる。三四郎は與次郎の爲に演藝會萬歳を唱へた。

萬歳を唱へる晩、與次郎が三四郎の下宿へ來た。晝間とは打つて變つてゐる。堅くなつて火鉢の傍へ坐つて寒い寒いと云ふ。其顔がたゞ寒いのでは無いらしい。始めは火鉢へ乗り掛る様に手を翳してゐたが、やがて懐手になつた。三四郎は與次郎の顔を陽氣にする爲に、机の上の洋燈を端から端へ移した。所が與次郎は顎をがつくり落して、大きな坊主頭文を黒く灯に照してゐる。一向冴えない。何うかしたかと聞いた時に、首を舉げて洋燈を見た。

「此家ではまだ電氣を引かないのか」と顔付には全く縁のない事を聞いた。

「まだ引かない。其内電氣にする積ださうだ。洋燈は暗くて不可んね」と答へてゐると、急に、洋燈の事は忘れたと見えて、

「おい、小川、大變な事が出来て仕舞つた」と云ひ出した。

一應理由を聞いて見る。與次郎は懐から皺だらけの新聞を出した。二枚重なつてゐる。其一枚を剝して、新しく疊み直して、此所を讀んで見ると差し付けた。讀む所を指の頭で抑へてゐる。三四郎は眼を洋燈の傍へ寄せた。見出しに大學の純文科とある。

大學の外國文學科は従來西洋人の擔當で、當事者は一切の授業を外國教師に依頼してゐたが、時勢の進歩と多數學生の希望に促されて、今度愈々本邦人の講義も必須科目として認めるに至つた。そこで此間中から適當の人物を人選中であつたが、漸く某氏に決定して、近々發表になるさうだ。某氏は近き過去に於て、海外留學の命を受けた事のある秀才だから至極適任だらうと云ふ内容である。

「廣田先生ぢや無かつたんだな」と三四郎が與次郎を顧みた。與次郎は矢つ張り新聞の上を見てゐる。

「是は慥なのか」と三四郎が又聞いた。

「何うも」と首を曲げたが、「大抵大丈夫だらうと思つてゐたんだがな。遣り損なつた。尤も此

男が大分運動をしてゐると云ふ話は聞いた事もあるが」と云ふ。

「然し是又ぢや、まだ風説ぢやないか。愈々發表になつて見なければ分らないのだから」

「いや、それ丈なら無論構はない。先生の關係した事ぢやないから、然し」と云つて、又残りの新聞を疊み直して、標題を指の頭で抑へて、三四郎の眼の下へ出した。

今度の新聞にも略同様の事が載つてゐる。そこ丈は別段に新しい印象を起しやうもないが、其後へ来て、三四郎は驚かされた。廣田先生が大變な不徳義漢の様に書いてある。十年間語學の教師をして、世間には杏として聞えない凡材の癖に、大學で本邦人の外國文學講師を入れると聞くと、急に狐鼠々々運動を始めて、自分の評判記を學生間に流布した。のみならず其門下生をして「偉大なる暗闇」など、云ふ論文を小雑誌に草せしめた。此論文は零餘子なる匿名の下にあらはれたが、實は廣田の家に入出入する文科大學生小川三四郎なるもの、筆である事迄分つてゐると、とうとう三四郎の名前が出て来た。

三四郎は妙な顔をして與次郎を見た。與次郎は前から三四郎の顔を見てゐる。二人共しばらく黙つてゐた。やがて、三四郎が、

「困るなあ」と云つた。少し與次郎を恨んでゐる。與次郎は、そこは餘構つてゐない。

「君、これを何う思ふ」と云ふ。

「何う思ふとは」

「投書を其儘出したに違ない。決して社の方で調べたものぢやない。文藝時評の六號活字の投書に斯んなのが、いくらでも来る。六號活字は殆んど罪惡のかたまりだ。よく／＼探つて見ると嘘が多い。目に見えた嘘を吐いてゐるものもある。何故そんな愚な事をやるかと云ふとね、君。みんな利害問題が動機になつてゐるらしい。それで僕が六號活字を受持つてゐる時には、性質の好くないのは、大抵屑籠へ放り込んだ。此記事も全くそれだね。反對運動の結果だ」

「何故、君の名が出ないで、僕の名が出たものだらうな」

與次郎は「左うさ」と云つてゐる。しばらくしてから、

「矢張り何だらう。君は本科生で僕は選科生だからだらう」と説明した。けれども三四郎には、是が説明にも何にもならなかつた。三四郎は依然として迷惑である。

「全體僕が零餘子なんて稀知な號を使はずに、堂々と佐々木與次郎と署名して置けば好かつた。

實際あの論文は佐々木與次郎以外に書ける者は一人もないんだからなあ」

與次郎は眞面目である。三四郎に「偉大なる暗闇」の著作権を奪はれて、却つて迷惑してゐるのかも知れない。三四郎は馬鹿々々しくなつた。

「君、先生に話したか」と聞いた。

「さあ、其處だ。偉大なる暗闇の作者なんか、君だつて、僕だつて、どちらだつて構はないが、事先生の人格に關係してくる以上は、話さずにはゐられない。あゝ云ふ先生だから、一向知りません、何か間違でせう、偉大なる暗闇といふ論文は雑誌に出しましたが、匿名です、先生の崇拜者が書いたものですから御安心なさい位に云つて置けば、さうかで直濟んで仕舞ふ譯だが、此際左うは不可ん。どうしたつて僕が責任を明かにしなくつちや。事が旨く行つて、知らん顔をしてゐるのは、心持が好いが、遣り損なつて黙つてゐるのは不愉快で堪らない。第一自分が事を起して置いて、あゝ云ふ善良な人を迷惑な状態に陥らして、それで平氣に見物がして居られるものぢやない。正邪曲直なんて六づかしい問題は別として、たゞ氣の毒で、痛はしくつて不可ない」

三四郎は始めて與次郎を感心な男だと思つた。

「先生は新聞を讀んだんだらうか」

「家へ来る新聞にやない。だから僕も知らなかつた。然し先生は學校へ行つて色々な新聞を見るからね。よし先生が見なくつても誰か話すだらう」

「すると、もう知つてるな」

「無論知つてるだらう」

「君には何とも云はないか」

「云はない。尤も碌に話をする暇もないんだから、云はない筈だが。此間から演藝會の事で始終奔走してゐるものだから——あゝ演藝會も、もう厭になつた。已めて仕舞はうかしらん。御白粉を附けて、芝居なんかやつたつて、何が面白いものか」

「先生に話したら、君、叱られるだらう」

「叱られるだらう。叱られるのは仕方がないが、如何にも氣の毒でね。餘計な事をして迷惑を掛けてるんだから。——先生は道樂のない人でね。酒は飲まず、煙草は」と云ひかけたが途中で已めて仕舞つた。先生の哲學を鼻から烟にして吹き出す量は月に積ると、莫大なものである。

「煙草丈は可なり呑むが、其外に何にも無いぜ。釣をするぢやなし、碁を打つぢやなし、家庭の樂みがあるぢやなし。あれが一番不可ない。子供でもあると可いんだけど。實に枯淡だからなあ」

與次郎は夫で腕組をした。

「たまに、慰め様と思つて、少し奔走すると、斯んな事になるし。君も先生の所へ行つて遣れ」

「行つて遣る所ぢやない。僕にも多少責任があるから、謝罪つて來る」

「君は謝罪する必要はない」

「ぢや辯解して來る」

與次郎は夫で歸つた。三四郎は床に這入つてから度々寐返りを打つた。國にゐる方が寐易い心持がする。偽はりの記事——廣田先生——美禰子——美禰子を迎へに來て連れて行つた立派な男——色々の刺激がある。

夜中からぐつすり寐た。何時もの様に起きるのが、ひどく辛かつた。顔を洗ふ所で、同じ文科の學生に逢つた。顔丈は互に見知り合ひである。失敬と云ふ挨拶のうちに、此男は例の記事を讀

んで居るらしく推した。然し先方では無論話頭を避けた。三四郎も辯解を試みなかつた。暖かい汁の香を嗅いでゐる時に、又故里の母からの書信に接した。又例の如く長かりさうだ。洋服を着換へるのが面倒だから、着たまゝの上へ袴を穿いて、懐へ手紙を入れて、出る。戸外は薄い霜で光つた。

通りへ出ると、殆んど學生許歩いてゐる。それが、みな同じ方向へ行く。悉く急いで行く。寒い往来は若い男の活氣で一杯になる。其中に霜降の外套を着た廣田先生の長い影が見えた。此青年の隊伍に紛れ込んだ先生は、歩調に於て既に時代錯誤である。左右前後に比較すると頗る緩漫に見える。先生の影は校門のうちに隠れた。門内に大きな松がある。巨人の傘の様に枝を擴げて玄關を塞いでゐる。三四郎の足が門前迄来た時は先生の影が、既に消えて、正面に見えるものは、松と、松の上にある時計臺許であつた。此時計臺の時計は常に狂つてゐる。もしくは留まつてゐる。

門内を一寸覗込んだ三四郎は、口の内で「ハイドリオタフヒア」と云ふ字を二度繰返した。此字は三四郎の覺えた外國語のうちで、尤も長い、又尤も六づかしい言葉の一つであつた。意味は

まだ分らない。廣田先生に聞いて見る積でゐる。かつて與次郎に尋ねたら、恐らくダーク・フアブラの類だらうと云つてゐた。けれども三四郎から見ると二つの間には大變な違がある。ダーク・フアブラは躍るべき性質のものと思へる。ハイドリオタフヒアは覺えるのにさへ暇が入る。二返繰り返すと歩調が自から緩漫になる。廣田先生の使ふために古人が作つて置いた様な音がする。學校へ行つたら、「偉大なる暗闇」の作者として、衆人の注意を一身に集めてゐる氣色がした。戸外へ出様としたが、戸外は存外寒いから廊下になた。さうして講義の間に懐から母の手紙を出して讀んだ。

此冬休みには歸つて來いと、丸で熊本にゐた當時と同様な命令がある。實は熊本にゐた時分にこんな事があつた。學校が休みになるか、ならないのに、歸れと云ふ電報が掛かつた。母の病氣に違ないと思ひ込んで、驚いて飛んで歸ると、母の方では此方に變がなくつて、まあ結構だつたと云はぬ許りに喜んでゐる。譯を聞くと、何時迄待つてゐても歸らないから、御稻荷様へ伺を立てたら、こりや、もう熊本を立つてゐるといふ御託宣であつたので、途中で何うかしはせぬだらうかと非常に心配してゐたのだと云ふ。三四郎は其當時を思ひ出して、今度も亦伺を立てられ

る事かと思つた。然し手紙には御稻荷様の事は書いてない。たゞ三輪田の御光さんも待つてゐると割註見た様なものが付いてゐる。御光さんは豊津の女學校をやめて、家へ歸つたさうだ。又御光さんに縫つて貰つた縮入が小包で来るさうだ。大工の角三が山で賭博を打つて九十八圓取られたさうだ。——其顛末が委しく書いてある。面倒だから好い加減に讀んだ。何でも山を買ひたいといふ男が三人連で入り込んで来たのを、角三が案内をして、山を廻つてあるいてる間に取られて仕舞つたのださうだ。角三はうちへ歸つて、女房に何時の間に取られたか分らないと辯解した。すると、女房が夫ぢや御前さん眠り薬でも嗅がされたんだらうと云つたら、角三が、うんさう云へば何だか嗅いだ様だと答へたさうだ。けれども村のものはみんな賭博をして巻き上られたと評判してゐる。田舎でも斯うだから、東京にゐる御前などは、本當によく氣を付けなくては不可な

いと云ふ訓誡が付いてゐる。

長い手紙を巻き収めてゐると、與次郎が傍へ来て、「やあ女の手紙だな」と云つた。昨夕よりは冗談をいふ丈元氣が可い。三四郎は、

「なに母からだ」と、少し詰らなさうに答へて、封筒ごと懐へ入れた。

「里見の御嬢さんからぢやないのか」

「いゝや」

「君、里見の御嬢さんの事を聞いたか」

「何を」と問ひ返してゐる所へ、一人の學生が、與次郎に、演藝會の切符を欲しいといふ人が階下待つてゐると教へに來てくれた。與次郎はすぐ降りて行つた。

與次郎は夫なり消てなくなつた。いくら捕まへやうと思つても出て來ない。三四郎は已を得ず精出して講義を筆記してゐた。講義が濟んでから、昨夕の約束通り廣田先生の家へ寄る。相變らず靜である。先生は茶の間に長くなつて寐てゐた。婆さんに、どうか爲すつたのかと聞くと、左うちや無いのでせう、昨夕餘り遅くなつたので、眠いと云つて、先刻御歸りになると、すぐ横に御成りなすつたのだと云ふ。長い身軀の上に小夜着が掛けてある。三四郎は小さな聲で、又婆さんに、どうして、さう遅くなつたのかと聞いた。なに何時でも遅いのだが、昨夕のは勉強ぢやなくつて、佐々木さんと久しく御話をして御出だつたのだといふ答である。勉強が佐々木に代つたから、晝寐をする説明にはならないが、與次郎が、昨夕先生に例の話をした事文は是で明瞭にな

つた。序に與次郎が、どう叱られたか聞いて置きたいのだが、それは婆さんが知らう筈がないし、肝心の與次郎は學校で取り逃して仕舞つたから仕方がない。今日の元氣の好い所を見ると、大した事件には成らずに済んだのだらう。尤も與次郎の心理現象は到底三四郎には解らないのだから、實際どんな事があつたか想像は出来ない。

三四郎は長火鉢の前へ坐つた。鐵瓶がちん／＼鳴つてゐる。婆さんは遠慮をして下女部屋へ引取つた。三四郎は胡坐をかいて、鐵瓶に手を翳して、先生の起きるのを待つてゐる。先生は熟睡してゐる。三四郎は静かで好い心持になつた。爪で鐵瓶を敲いて見た。熱い湯を茶碗に注いでふうふう吹いて飲んだ。先生は向をむいて寐てゐる。二三日前に頭を刈つたと見えて、髪が甚だ短い。髭の端が濃く出てゐる。鼻も向ふを向てゐる。鼻の穴がすう／＼云ふ。安眠だ。

三四郎は返さうと思つて、持つて來たハイドリオタフヒアを出して讀み始めた。ぽつ／＼拾ひ讀をする。中々解らない。墓の中に花を投げる事が書いてある。羅馬人は薔薇を affect すると書てある。何の意味だか能く知らないが、大方好むとでも譯するんだらうと思つた。希臘人は Amaranthus を用ひると書いてある。是も明瞭でない。然し花の名には違ひない。夫から少し先へ

行くと、丸で解らなくなつた。頁から眼を離して先生を見た。まだ寐てゐる。何で斯んな六づかしい書物を自分に貸したものだらうと思つた。それから、此六づかしい書物が、何故解らないながらも、自分の興味を惹くのだらうと思つた。最後に廣田先生は畢竟ハイドリオタフヒアだと思つた。

さうすると、廣田先生がむくりと起きた。首丈持上げて、三四郎を見た。

「何時來たの」と聞いた。三四郎はもつと寐て御出なさいと勧めた。實際退屈ではなかつたのである。先生は、

「いや起る」と云つて起きた。それから例の如く哲學の烟を吹き始めた。烟が沈黙の間に、棒になつて出る。

「有難う。書物を返します」

「あゝ。——讀んだの」

「讀んだけれどもよく解らんです。第一標題が解らんです」

「ハイドリオタフヒア」

「何の事ですか」

「何の事か僕にも分らない。兎に角希臘語らしいね」

三四郎はあとを尋ねる勇氣が抜けて仕舞つた。先生は欠を一つした。

「あゝ眠かつた。好い心持に寐た。面白い夢を見てね」

先生は女の夢だと云つてゐる。それを話すのかと思つたら、湯に行かないかと云ひ出した。二人は手拭を提げて出掛けた。

湯から上つて、二人が板の間に据ゑてある器械の上に乗つて、身長を測つて見た。廣田先生は五尺六寸ある。三四郎は四寸五分しかない。

「まだ延びるかも知れない」と廣田先生が三四郎に云つた。

「もう駄目です。三年來この通です」と三四郎が答へた。

「左うかな」と先生が云つた。自分を餘程子供の様に考へてゐるのだと三四郎は思つた。家へ歸つた時、先生が、用が無ければ話して行つても構はないと、書齋の戸を開けて、自分が先へ這入つた。三四郎は兎に角、例の用事を片付ける義務があるから、續いて這入つた。

「佐々木は、まだ歸らない様ですか」

「今日は遅くなるとか云つて斷わつてゐた。此間から演藝會の事で大分奔走してゐる様だが、世話好きなんだか、駆け回る事が好きなんだか、一向要領を得ない男だ」

「親切なんですよ」

「目的丈は親切な所も少あるんだが、何しろ、頭の出來が甚だ不親切なものだから、碌な事は仕出かさない。一寸見ると、要領を得てゐる。寧ろ得過ぎてゐる。けれども終局へ行くと、何の爲めに要領を得て來たのだから、丸で滅茶苦茶になつて仕舞ふ。いくら云ても直さないから放つて置く。あれは悪戯をしに世の中へ生れて來た男だね」

三四郎は何とか辯護の道がありさうなものだと思つたが、現に結果の悪い實例があるんだから、仕様がなない。話を轉じた。

「あの新聞の記事を御覽でしたか」

「えゝ、見た」

「新聞に出る迄は些とも御存じなかつたのですか」

「いゝえ」

「御驚きなすつたでせう」

「驚くつて——夫れは全く驚かない事もない。けれども世の中の事はみんな、彼んなものだと
思つてるから、若い人程正直に驚きはしない」

「御迷惑でせう」

「迷惑でない事もない。けれども僕位世の中に住み古るした年配の人間なら、あの記事を見て、
すぐ事實だと思ひ込む人許もないから、矢つ張若い人程正直に迷惑とは感じない。與次郎は社員
に知つたものがあるから、其男に頼んで真相を書いて貰ふの、あの投書の出所を探して制裁を加
へるの、自分の雑誌で充分反駁を致しますのと、善後策の了見で下らない事を色々云ふが、そん
な手敷をするならば、始から餘計な事を起さない方が、いくら好いか分りやしない」

「全く先生の爲を思つたからです。悪氣ぢやないです」
「悪氣で遣られて堪るものか。第一僕の爲めに運動をするものがさ、僕の意向も聞かないで、
勝手な方法を講じたり勝手な方針を立た日には、最初から僕の存在を愚弄してゐると同じ事ぢや

ないか。存在を無視されてゐる方が、どの位體面を保つに都合が好いか知れやしない」

三四郎は仕方なしに黙つてゐた。

「さうして、偉大なる暗闇なんて愚にも付かないものを書いて。——新聞には君が書いたとし
てあるが實際は佐々木が書いたんだつてね」

「左うです」

「昨夜佐々木が自白した。君こそ迷惑だらう。あんな馬鹿な文章は佐々木より外に書くものは
ありやしない。僕も讀んで見た。實質もなければ、品位もない、丸で救世軍の太鼓の様なものだ。
讀者の悪感情を引き起す爲めに、書いてるとしか思はれやしない。徹頭徹尾故意だけで成り立つ
てゐる。常識のあるものが見れば、何うしても爲にする所があつて起稿したものだとは判定がつく。
あれぢや僕が門下生に書かしたと云はれる筈だ。あれを讀んだ時には、成程新聞の記事は尤もだ
と思つた」

廣田先生は夫で話を切つた。鼻から例によつて烟を吐く。與次郎は此烟の出方で、先生の氣分
を窺ふ事が出来ると云つてゐる。濃く眞直に迸る時は、哲學の絶高頂に達した際に、緩く崩れ

る時は、心氣平穩、ことによると冷かされる恐れがある。烟が、鼻の下に低徊して、髭に未練がある様に見える時は、冥想に入る。もしくは詩的感興がある。尤も恐るべきは孔の先の渦である。渦が出ると、大變に叱られる。與次郎の云ふ事だから、三四郎は無論當にはしない。然し此際だから氣を付けて烟りの形状を眺めてゐた。すると與次郎の云つた様な判然たる烟は些とも出て來ない。其代り出るものは、大抵な資格をみんな具へてゐる。

三四郎が何時迄立つても、恐れ入つた様に控へてゐるので、先生は又話し始めた。

「濟んだ事は、もう已めやう。佐々木も昨夜悉く詫まつて仕舞つたから、今日あたりは又晴晴して例の如く飛んで歩いてゐるだらう。いくら蔭で不心得を責めたつて、當人が平氣で切符なぞ賣つて歩いて居ては仕方がない。夫よりもつと面白い話を仕様」

「えゝ」

「僕がさつき晝寐をしてゐる時、面白い夢を見た。それはね、僕が生涯にたつた一遍逢つた女に、突然夢の中で再會したと云ふ小説染みた御話だが、其方が、新聞の記事より聞いてゐても愉快だよ」

「えゝ。何んな女ですか」

「十二三の奇麗な女だ。顔に黒子がある」

三四郎は十二三と聞いて少し失望した。

「何時頃御逢ひになつたのですか」

「二十年許前」

三四郎は又驚いた。

「善く其女と云ふ事が分りましたね」

「夢だよ。夢だから分るさ。さうして夢だから不思議で好い。僕が何でも大きな森の中を歩いて居る。あの色の褪めた夏の洋服を着てね、あの古い帽子を被つて。——さう其時は何でも、六づかしい事を考へてゐた。凡て宇宙の法則は變らないが、法則に支配される凡て宇宙のものは必ず變る。すると其法則は、物の外に存在してゐなくてはならない。——覺めて見ると話らないが夢の中だから眞面目にそんな事を考へて森の下を通つて行くと、突然其女に逢つた。行き逢つたのではない。向は凝と立つてゐた。見ると、昔の通りの顔をしてゐる。昔の通りの服装をしてゐる」

る。髪も昔の髪である。黒子も無論あつた。つまり二十年前見た時と少しも變らない二十三の女である。僕が其女に、あなたは少しも變らないといふと、其女は僕に大變年を御取りなすつたと云ふ。次に僕が、あなたは何うして、さう變らずに居るのかと聞くと、此顔の年、此服装の月、此髪の日が一番好きだから、かうして居ると云ふ。それは何時の事かと聞くと、二十年前、あなたに御目にかゝつた時だといふ。それなら僕は何故斯う年を取つたんだらうと、自分で不思議がると、女が、あなたは、其時よりも、もつと美しい方へ方へと御移りなさりたがるからだと教へて呉れた。其時僕が女に、あなたは晝だと云ふと、女が僕に、あなたは詩だと云つた」

「それから何うしました」と三四郎が聞いた。

「それから君が來たのさ」と云ふ。

「二十年前に逢つたと云ふのは夢ぢやない、本當の事實なんですか」

「本當の事實なんだから面白い」

「何處で御逢ひになつたんですか」

先生の鼻は又烟を吹き出した。其烟を眺めて、當分黙つてゐる。やがて斯う云つた。

「憲法發布は明治二十二年だつたね。其時森文部大臣が殺された。君は覚えてゐない。幾年かた君は。さう、それぢや、まだ赤ん坊の時分だ。僕は高等學校の生徒であつた。大臣の葬式に参列するのだと云つて、大勢鐵砲を擔いで出た。墓地へ行くのだと思つたら、さうではない。體操の教師が竹橋内へ引張つて行つて、路傍へ整列させた。我々は其處へ立つたなり、大臣の柩を送る事になつた。名は送るのだけれども、實は見物したのも同然だつた。其日は寒い日でね、今でも覚えてゐる。動かずに立つてゐると、靴の下で足が痛む。隣の男が僕の鼻を見ては赤い赤いと云つた。やがて行列が來た。何でも長いものだつた。寒い眼の前を靜かな馬車や俵が何臺となく通る。其中に今話した小さな娘がゐた。今、其時の模様を思ひ出さうとしても、ぼうとして迎も明瞭に浮んで來ない。たゞこの女文は覚えてゐる。夫も年を経つに従つて段々薄らいで來た、今では思ひ出す事も滅多にない。今日夢を見る前迄は、丸で忘れてゐた、けれども其當時は頭の中へ焼き付けられた様に熱い印象を持つてゐた。——妙なものだ」

「それから其の女には丸で逢はないんですか」

「丸で逢はない」

「ぢや、何處の誰だか全く分らないんですか」

「無論分らない」

「尋ねて見なかつたですか」

「いゝや」

「先生は夫で……」と云つたが急に瘧へた。

「夫で？」

「夫で結婚をなさらないんですか」

先生は笑ひ出した。

「それ程浪漫的な人間ぢやない。僕は君よりも遙に散文的に出来てゐる」

「然し、もし其女が来たら御貰ひになつたでせう」

「さうさね」と一度考へた上で、「貰つたらうね」と云つた。三四郎は氣の毒な様な顔をしてゐる。すると先生が又話出した。

「その爲に獨身を餘儀なくされたといふと、僕が其女の爲に不具にされたと同じ事になる。け

れども人間には生れ付いて、結婚の出来ない不具もあるし。其外色々結婚のしにくい事情を持つてゐる者がある」

「そんなに結婚を妨げる事情が世の中に澤山あるでせうか」

先生は烟の間から、凝と三四郎を見てゐた。

「ハムレットは結婚したく無かつたんだらう。ハムレットは一人しか居ないかも知れないが、

あれに似た人は澤山ゐる」

「例へばどんな人です」

「例へば」と云つて、先生は黙つた。烟がしきりに出る。「例へば、こゝに一人の男がゐる。

父は早く死んで、母一人を頼に育つたとする。其母が又病氣に罹つて、愈息を引き取るといふ、間際に、自分が死んだら誰某の世話になれといふ。子供が會つた事もない、知りもしない人を指名する。理由を聞くと、母が何とも答へない。強ひて聞くと實は誰某が御前の本當の御父だと微かな聲で云つた。——まあ話だが、さういふ母を持つた子がゐるとする。すると、其子が結婚に信仰を置かなくなるのは無論だらう」

「そんな人は滅多にないでせう」

「滅多には無いだらうが、居る事は有る」

「然し先生のは、そんなのぢや無いでせう」

先生はハ、ハ、と笑つた。

「君は慥か御母さんが居たね」

「え、」

「御父さんは」

「死にました」

「僕の母は憲法發布の翌年に死んだ」

十二

演藝會は比較的寒い時に開かれた。年は漸く押し詰つて来る。人は二十日足らずの眼の先に春を控えた。市に生きるものは、忙しからんとしてゐる。越年の計は貧者の頭に落ちた。演藝會

は此間に在つて、凡ての長閑なるものと、餘裕あるものと、春と暮の差別を知らぬものとを迎へた。

それが、幾何でも有る。大抵は若い男女である。一日目に與次郎が、三四郎に向つて大成功と叫んだ。三四郎は二日目の切符を持つてゐた。與次郎が廣田先生を誘つて行けと云ふ。切符が違ふだらうと聞けば、無論違ふと云ふ。然し一人で放つて置くと、決して行く氣遣がないから、君が寄つて引張出すのだと理由を説明して聞かせた。三四郎は承知した。

夕刻に行つて見ると、先生は明るい洋燈の下に大きな本を擴げてゐた。

「御出になりませんか」と聞くと、先生は少し笑ひながら、無言の儘首を横に振つた。子供の様な所作をする。然し三四郎には、それが學者らしく思はれた。口を利かない所が床しく思はれたのだらう。三四郎は中腰になつて、ぼんやりしてゐた。先生は斷わつたのが氣の毒になつた。

「君行くなら、一所に出様。僕も散歩ながら、其所迄行くから」

先生は黒い廻套を着て出た。懐手らしいが分らない。空が低く垂れてゐる。星の見えない寒さである。

「雨になるかも知れない」

「降ると困るでせう」

「出入りにね。日本の芝居小屋は下足があるから、天氣の好い時ですら大變な不便だ。それで小屋の中は、空氣が通はなかつて、煙草が烟つて、頭痛がして、——よく、みんな、彼で我慢が出来るものだ」

「ですけれども、眞逆戸外で遣る譯にも行かないからでせう」

「御神樂は何時でも外で遣つてゐる。寒い時でも外で遣る」

三四郎は、こりや議論にならないと思つて、答を見合せて仕舞つた。

「僕は戸外が好い。暑くも寒くもない、綺麗な空の下で、美しい空氣を呼吸して、美しい芝居が見たい。透明な空氣の様な、純粹で單簡な芝居が出来さうなものだ」

「先生の御覽になつた夢でも、芝居にしたならそんなものが出て来るでせう」

「君希臘の芝居を知つてゐるか」

「能く知りません。随か戸外で遣つたんですね」

「戸外。眞晝間。嘸好い心持だつたらうと思ふ。席は天然の石だ。堂々としてゐる。與次郎の様なもの、さう云ふ所へ連れて行つて、少し見せてやると好い」

又與次郎の悪口が出た。其與次郎は今頃窮屈な會場のなかで、一生懸命に、奔走し且つ韓旋して大得意なのだから面白い。もし先生を連れて行かなからうものなら、先生果して來ない。會には斯う云ふ所へ來て見るのが、先生の爲には何の位好いか分らないのだのに、いくら僕が云つても聞かない。困つたものだなあ。と嘆息するに極つてゐるから猶面白い。

先生は夫から希臘の劇場の構造を委しく話して呉れた。三四郎は此時先生から、Theatron, Orchestra, Skéné, Proskénion など、云ふ字の講釋を聞いた。何とか云ふ獨逸人の説によると亞典の劇場は一萬七千人を容れる席があつたと云ふ事も聞いた。それは小さい方である。尤も大きいのは、五萬人を容れたと云ふ事も聞いた。入場券は象牙と鉛と二通りあつて、何れも賞牌見たやうな恰好で、表に模様が打ち出してあつたり、彫刻が施してあると云ふ事も聞いた。先生は其入場券の價迄知つてゐた。一日丈の小芝居は十二錢で、三日續の大芝居は三十五錢だと云つた。三四郎がへえ、へえと感心してゐるうちに、演藝會場の前へ出た。

盛んに電燈が點いてゐる。入場者は續々寄つて来る。與次郎の云つたよりも以上の景氣である。「どうです、折角だから御這入になりませんか」

「いや這入らない」

先生は又暗い方へ向いて行つた。

三四郎は、しばらく先生の後影を見送つてゐたが、あとから、車で乗り付ける人が、下足札を受け取る手間も惜しさうに、急いで這入つて行くのを見て、自分も足早に入場した。前へ押されたと同じ事である。

入口に四五人用のない人が立つてゐる。そのうちの袴を着けた男が入場券を受け取つた。其男の肩の上から場内を覗いて見ると、中は急に廣くなつてゐる。且つ甚だ明るい。三四郎は眉に手を加へない許にして、導かれた席に着いた。狭い所に割り込みながら、四方を見廻すと、人間の持つて来た色で眼がちら／＼する。自分の眼を動かすから許ではない。無数の人間に附着した色が、廣い空間で、絶えず各自に、且つ勝手に、動くからである。舞臺ではもう始まつてゐる。出て来る人物が、みんな冠を被つて、沓を穿いて居た。そこへ長

い興を擔いで来た。それを舞臺の真中で留めたものがある。興を卸すと、中から又一人あらはれた。其男が刀を抜いて、興を突き返したのと斬り合を始めた。——三四郎には何のことも丸で分らない。尤も與次郎から梗概を聞いた事はある。けれども好加減に聞いてゐた。見れば分るだらうと考へて、うん成程と云つてゐた。所が見れば毫も其意を得ない。三四郎の記憶にはたゞ入鹿の大臣といふ名前が残つてゐる。三四郎はどれが入鹿だらうかと考へた。それは到底見込がつかない。そこで舞臺全體を入鹿の積で眺めてゐた。すると冠でも、沓でも、筒袖の衣服でも、使ふ言葉でも、何となく入鹿臭くなつて来た。實を云ふと三四郎には確然たる入鹿の觀念がない。日本歴史を習つたのが、あまりに遠い過去であるから、古い入鹿の事もつい忘れて仕舞つた。推古天皇の時の様でもある。欽明天皇の御代でも差支ない氣がする。應神天皇や聖武天皇では決してないと思ふ。三四郎はたゞ入鹿じみた心持を持つてゐる丈である。芝居を見るには夫で澤山だと考へて、唐めいた装束や背景を眺めてゐた。然し筋はちつとも解らなかつた。其うち幕になつた。幕になる少し前に、隣りの男が、其の又隣りの男に、登場人物の聲が、六疊敷で、親子差向の談話の様だ。丸で訓練がないと非難してゐた。そつち隣りの男は登場人物の腰が据らない。悉く

ひよろ／＼してゐると訴へてゐた。二人は登場人物の本名をみんな暗んじてゐる。三四郎は耳を傾けて二人の談話を聞いてゐた。二人共立派な服装をしてゐる。大方有名な人だらうと思つた。けれどももし興次郎に此談話を聞かせたら定めし反對するだらうと思つた。其時後の方で旨い旨い中々旨いと大きな聲を出したものがあつた。隣の男は二人とも後を振り返つた。それぎり話を已て仕舞つた。そこで幕が下りた。

彼處、此處に席を立つものがあつた。花道から出口へ掛けて、人の影が頗る忙しい。三四郎は中腰になつて、四方をぐるりと見廻した。來てゐる筈の人は何處にも見えない。本當を云ふと演藝中にも出来る丈は氣を付けてゐた。それで知れないから、幕になつたらばと内々心當にしてゐたのである。三四郎は少し失望した。已を得ず眼を正面に歸した。

隣の連中は餘程世間が廣い男達と見えて、右左を顧みて、彼處には誰がゐる。此處には誰がゐると頻りに知名の人の名を口にする。中には離れながら、互に挨拶をしたのも一二人ある。三四郎は御蔭で此等知名人の細君を少し覺えた。其中には新婚した許のものもあつた。是は隣の一人にも珍らしかつたと見えて、其男はわざ／＼眼鏡を拭き直して、成程々々と云つて見てゐた。

すると、幕の下りた舞臺の前を、向ふの端から此方へ向けて、小走りに興次郎が走來た。三分の二程の所で留つた。少し及び腰になつて、土間の中を覗き込みながら、何か話してゐる。三四郎はそれを見當に覘ひを付けた。——舞臺の端に立つた興次郎から一直線に二三間隔て、美禰子の横顔が見えた。

其傍にゐる男は脊中を三四郎に向けてゐる。三四郎は心のうちに、此男が何かの拍子に、どうかして此方に向けて呉れ、ば好いと念じてゐた。旨い具合に其男は立つた。坐り疲れたと見え、柀の仕切に腰を掛けて、場内を見廻し始めた。其時三四郎は明らかに野々宮さんの廣い額と大きな眼を認める事が出来た。野々宮さんが立つと共に、美禰子の後にゐたよし子の姿も見えた。三四郎は此三人の外に、まだ連が居るか居ないかを確かめやうとした。けれども遠くから見ると、たゞ人がぎつしり詰つてゐる丈で、連と云へば土間全體が連と見える迄だから仕方がない。美禰子と興次郎の間には、時々談話が交換されつゝあるらしい。野々宮さんも折々口を出すと思はれる。

すると突然原口さんが幕の間から出て來た。興次郎と並んでしきりに土間の中を覗き込む。口

は無論動かしてゐるのだらう。野々宮さんは相圖の様な首を堅に振つた。其時原口さんは後から、平手で、與次郎の脊中を叩いた。與次郎はくると引つ繰り返つて、幕の裾を潜つて何處かへ消え失せた。原口さんは、舞臺を降りて、人と人との間を傳はつて、野々宮さんの傍迄來た。野々宮さんは、腰を立て、原口さんを通した。原口さんはばかりと人の中へ飛込んだ。美禰子とよし子のゐる邊で見えなくなつた。

此連中の一舉一動を演藝以上の興味を以て注意してゐた三四郎は、此時急に原口流の所作が羨ましくなつた。あゝ云ふ便利な方法で人の傍へ寄る事が出来やうとは毫も思ひ付かなかつた。自分も一つ眞似て見様かしらと思つた。然し眞似ると云ふ自覺が、既に實行の勇氣を挫いた上に、もう入る席は、いくら詰めても、六づかしからうといふ遠慮が手傳つて、三四郎の尻は依然として、故の席を去り得なかつた。

其うち幕が開いて、ハムレットが始まつた。三四郎は廣田先生のうちで西洋の何とかいふ名優の扮したハムレットの寫眞を見た事がある。今三四郎の眼の前にはあらはれたハムレットは、是と略同様の服装をしてゐる。服装ばかりではない。顔造似てゐる。兩方共八の字を寄せてゐる。

此ハムレットは動作が全く輕快で、心持が好い。舞臺の上を大に動いて、又大いに動かせる。能掛りの入鹿とは大變趣を異にしてゐる。ことに、ある時、ある場合に、舞臺の眞中に立つて、手を擴げて見たり、空を睨んで見たりするときは、觀客の眼中に外のものは一切入り込む餘地のない位強烈な刺激を與へる。

其代り臺詞は日本語である。西洋語を日本語に譯した日本語である。口調には抑揚がある。節奏もある。ある所は能辯過ぎると思はれる位流暢に出る。文章も立派である。それでゐて、氣が乗らない。三四郎はハムレットがもう少し日本人じみた事を云つて呉れれば好いと思つた。御母さん、それぢや御父さんに濟まないぢやありませんかと云ひさうな所で、急にアポロ杯を引合に出して、呑氣に遣つて仕舞ふ。それでゐて顔付は親子とも泣き出しさうである。然し三四郎は此矛盾をたゞ臍氣に感じたのみである。決して詰らないと思ひ切る程の勇氣は出なかつた。

従つて、ハムレットに飽きた時は、美禰子の方を見てゐた。美禰子が人の影に隠れて見えなくなる時は、ハムレットを見てゐた。

ハムレットがオフエリヤに向つて、尼寺へ行け尼寺へ行けと云ふ所へ來た時、三四郎は不圖廣

田先生のことを考へ出した。廣田先生は云つた。——ハムレットの様なものに結婚が出来るか。——成程本で讀むと左うらしい。けれども、芝居では結婚しても好ささうである。能く思案して見ると、尼寺へ行けとの云ひ方が悪いのだらう。其證據には尼寺へ行けと云はれたオフエリヤが些とも氣の毒にならない。

幕が又下りた。美禰子とよし子が席を立つた。三四郎もつゞいて立つた。廊下迄来て見ると、二人は廊下の中程で、男と話をしてゐる。男は廊下から出入りの出来る左側の席の戸口に半分身體を出した。男の横顔を見た時、三四郎は後へ引き返した。席へ返らずに下足を取つて表へ出た。本來は暗い夜である。人の力で明るくした所を通り越すと、雨が落ちてゐるやうに思ふ。風が枝を鳴らす。三四郎は急いで下宿に歸つた。

夜半から降り出した。三四郎は床の中で、雨の音を聞きながら、尼寺へ行けと云ふ一句を柱にして、其周圍にぐる／＼低徊した。廣田先生も起きてゐるかも知れない。先生はどんな柱を抱いてゐるだらう。興次郎は偉大なる暗闇の中に正體なく埋つてゐるに違ない。……明日は少し熱がする。頭が重いから寐てゐた。午飯は床の上に起き直つて食つた。又一寐入す

ると今度は汗が出た。氣がうとくなる。そこへ威勢よく興次郎が這入つて來た。昨夕も見えず、今朝も講義に出ない様だから何うしたかと思つて訪ねたと云ふ。三四郎は禮を述べた。

「なに、昨夕は行つたんだ。行つたんだ。君が舞臺の上に出て來て、美禰子さんと、遠くで話をしてゐたのも、ちやんと知つてゐる」

三四郎は少し酔つた様な心持である。口を利き出すと、つる／＼と出る。興次郎は手を出して、三四郎の額を抑へた。

「大分熱がある。薬を飲まなくつちや不可ない。風邪を引いたんだ」

「演藝場があまり暑過ぎて、明る過ぎて、さうして外へ出ると、急に寒過ぎて、暗過ぎるからだ。あれは可くない」

「可けないたつて、仕方がないぢやないか」

「仕方がないつたつて、可けない」

三四郎の言葉は段々短くなる、興次郎が好加減にあしらつてゐるうちに、すう／＼寐て仕舞つた。一時間程して又眼を開けた。興次郎を見て、

「君、其處にゐるのか」と云ふ。今度は平生の三四郎の様である。気分はどうかと聞くと、頭が重いと答へた丈である。

「風邪だらう」

「風邪だらう」

両方で同じ事を云つた。しばらくしてから、三四郎が與次郎に聞いた。

「君、此間美禰子さんの事を知つてるかと僕に尋ねたね」

「美禰子さんの事を？何處で？」

「學校で」

「學校で？何時」

與次郎はまだ思出せない様子である。三四郎は已を得ず、其前後の當時を詳しく説明した。與次郎は、

「成程そんな事が有たかも知れない」と云つてゐる。三四郎は随分無責任だと思つた。與次郎も少し氣の毒になつて、考へ出さうとした。やがて斯う云つた。

「ぢや、何ぢやないか。美禰子さんが嫁に行くと云ふ話ぢやないか」

「極つたのか」

「極つた様に聞いたが、能く分らない」

「野々宮さんの所か」

「いや、野々宮さんぢやない」

「ぢや……」と云ひ掛けて已めた。

「君、知つてるのか」

「知らない」と云ひ切つた。すると與次郎が少し前へ乗り出して來た。

「何うも能く分らない。不思議な事があるんだが。もう少し立たないと、何うなるんだか見當

が付かない」

三四郎は、其不思議な事を、すぐ話せば好いと思ふのに、與次郎は平氣なもので、一人で呑み込んで、一人で不思議がつてゐる。三四郎は少時我慢してゐたが、とうとう焦れつたくなつて、與次郎に、美禰子に關する凡ての事實を隠さずに話して呉れと請求した。與次郎は笑ひ出した。

さうして慰藉の爲か何だか、飛んだ所へ話頭を持つて行つて仕舞つた。

「馬鹿だなあ、あんな女を思つて。思つたつて仕方がないよ。第一、君と同年位ぢやないか。同年位の男に惚れるのは昔の事だ。八百屋お七時代の戀だ」

三四郎は黙つてゐた。けれども與次郎の意味は能く分らなかつた。

「何故と云ふに。甘前後の同じ年の男女を二人竝べて見る。女の方が萬事上手だあね。男は馬鹿にされる許だ。女だつて、自分の輕蔑する男の所へ嫁に行く氣は出ないやね。尤も自分が世界で一番偉いと思つてる女は例外だ。輕蔑する所へ行かなければ獨身で暮すより外に方法はないんだから。よく金持の娘や何かにそんなのがあるぢやないか、望んで嫁に来て置きながら、亭主を輕蔑してゐるのが。美禰子さんは夫よりすつと偉い。其代り、夫として尊敬の出来ない人の所へは始から行く氣はないんだから、相手になるものは其氣で居なくつちや不可ない。さう云ふ點で君だの僕だのは、あの女の夫になる資格はないんだよ」

三四郎はとうとう、與次郎と一所にされて仕舞つた。然し依然として黙つてゐた。

「そりや君だつて、僕だつて、あの女より遙に偉いさ。御互に是でも、なあ。けれども、もう

五六年経たなくつちや、其偉さ加減が彼の女の眼に映つて來ない。しかして、かの女は五六年凝としてゐる氣遣はない。従つて、君があんな女と結婚する事は風馬牛だ」

與次郎は風馬牛と云ふ熟字を妙な所へ使つた。さうして一人で笑つてゐる。

「なに、もう五六年もすると、あれより、すつと上等なのが、あらはれて來るよ。日本ぢや今女の方が餘つてゐるんだから。風邪なんか引いて熱を出したつて始まらない。——なに世の中は廣いから、心配するものはない。實は僕にも色々あるんだが、僕の方であんまり煩いから、御用で長崎へ出張すると云つてね」

「何だ、それは」

「何だつて、僕の關係した女さ」

三四郎は驚いた。

「なに、女だつて、君なんぞの曾て近寄つた事のない種類の女だよ。それをね、長崎へ黴菌の試験に出張するから當分駄目だつて斷つちまつた。所が其女が林檎を持つて停車場まで送り行くこと云ひ出したんで、僕は弱つたね」

三四郎は益驚いた。驚きながら聞いた。

「それで、何うした」

「何うしたか知らない。林檎を持って、停車場に待つてゐたんだらう」

「苛い男だ。よく、そんな悪い事が出来るね」

「悪い事で、可哀な事だとは知つて居るけれども、仕方がない。始から次第々々に、そこ迄運命に持つて行かれるんだから。實はとうの前から僕が醫科の學生になつてゐたんだからなあ」

「なんで、そんな餘計な嘘を吐くんだ」

「そりや、又それ／＼事情のある事なのさ。それで、女が病氣の時に、診断を頼まれて困つた事もある」

三四郎は可笑しくなつた。

「其時は舌を見て、胸を叩いて、好い加減に胡魔化したのが、其次に病院へ行つて、見て貰ひたいが好いかと聞かれたには閉口した」

三四郎はとう／＼笑出した。與次郎は、

「さう云ふ事も澤山あるから、まあ安心するが好からう」と云つた。何の事だか分らない。然し愉快になつた。

與次郎は其時始めて、美禰子に關する不思議を説明した。與次郎の云ふ所によると、よし子にも結婚の話がある。それから美禰子にもある。それ丈ならば好いが、よし子の行く所と、美禰子の行く所が、同じ人らしい。だから不思議なのださうだ。

三四郎も少し馬鹿にされた様な氣がした。然しよし子の結婚丈は慥である。現に自分が其話を傍で聞いてゐた。ことによると其話しを美禰子のと取違へたのかも知れない。けれども美禰子の結婚も、全く嘘ではないらしい。三四郎は判然した所が知りたくなつた。序だから、與次郎に教へて呉れと頼んだ。與次郎は譯なく承知した。よし子を見舞に來る様にしてやるから、直に聞いて見るといふ。旨い事を考へた。

「だから、藥を飲んで、待つて居なくつては不可ない」

「病氣が癒つても、寐て待つてゐる」

二人は笑つて別れた。歸りがけに與次郎が、近所の醫者に來て貰ふ手續をした。

晩になつて、醫者が来た。三四郎は自分で醫者を迎へた覺がないんだから、始めは少し狼狽した。そのうち脈を取られたので漸く氣が付いた。年の若い丁寧な男である。三四郎は代診と鑑定した。五分の後病症はインフルエンザと極つた。今夜頓服を飲んで、成る可く風に當らない様にしろと云ふ注意である。

翌日眼が覺めると、頭が大分軽くなつてゐる。寐てゐれば、殆ど常體に近い。たゞ枕を離れると、ふら／＼する。下女が来て、大分部屋の中が熱臭いと云つた。三四郎は飯も食はずに、仰向に天井を眺めてゐた。時々／＼眠くなる。明かに熱と疲とに囚はれた有様である。三四郎は、囚はれた儘、逆らずに、寐たり覺たりする間に、自然に従ふ一種の快感を得た。病症が軽いからだと思つた。

四時間、五時間と経つうちに、そろ／＼退屈を感じ出した。しきりに寐返りを打つ。外は好い天氣である。障子に當る日が、次第に影を移して行く。雀が鳴く。三四郎は今日も與次郎が遊びに来て呉れ、ば好いと思つた。

所へ下女が障子を開けて、女の御客様だと云ふ。よし子が、さう早く來やうとは待ち設けな

つた。與次郎丈に敏捷な働きをした。寐た儘、開け放しの入口に眼を着けてゐると、やがて高い姿が敷居の上へあらはれた。今日は紫の袴を穿いてゐる。足は兩方共廊下にある。一寸這入るのを躊躇した様子が見える。三四郎は肩を床から上げて、「入らつしやい」と云つた。

よし子は障子を閉て、枕元へ坐つた。六疊の座敷が、取り亂してある上に、今朝は掃除をしないから、猶狭苦しい。女は、三四郎に、

「寐て入らつしやい」と云た。三四郎は又頭を枕へ着た。自分丈は穩かである。

「臭くはないですか」と聞いた。

「え、少し」と云つたが、別段臭い顔もしなかつた。「熱が御有なの。何なんでせう、御病氣は。御醫者は入らしつて」

「醫者は昨夕來ました。インフルエンザださうです」

「今朝早く佐々木さんが御出になつて、小川が病氣だから見舞に行つて遣つて下さい。何病だか分からないが、何でも輕くはない様だつて仰しやるものだから、私も美禰子さんも喫驚したの」與次郎が又少し法螺を吹いた。悪く云へば、よし子を釣り出した様なものである。三四郎は人

が好いから、氣の毒でならない。「どうも難有う」と云つて寐てゐる。よし子は風呂敷包の中から、蜜柑の籃を出した。

「美禰子さんの御注意があつたから買つて來ました」と正直な事を云ふ。どつちの御見舞だか分らない。三四郎はよし子に對して禮を述べて置いた。

「美禰子さんも上る筈ですが、此頃少し忙しいものですから——どうぞ宜しくつて……」

「何か特別に忙しいことが出來たのですか」

「ええ。出來たの」と云つた。大きな黒い眼が、枕に着いた三四郎の顔の上に落ちてゐる。三四郎は下から、よし子の蒼白い額を見上げた。始めて此女に病院で逢つた昔を思ひ出した。今でも物憂げに見える。同時に快活である。頼になるべき凡ての慰藉を三四郎の枕の上に齎して來た。

「蜜柑を削いて上げませうか」

女は青い葉の間から、果物を取り出した。渴いた人は、香に逆する甘い露を、したゝかに飲んだ。

「美味いでせう。美禰子さんの御見舞よ」

「もう澤山」

女は袂から白い手帛を出して手を拭いた。

「野々宮さん、あなたの御縁談はどうなりました」

「あれ限りです」

「美禰子さんにも縁談の口があるさうぢやありませんか」

「ええ、もう纏りました」

「誰ですか、先は」

「私を貰ふと云つた方なの。ほゝ、可笑いでせう。美禰子さんの御兄さんの御友達よ。私近い内に又兄と一所に家を持ちますの。美禰子さんが行つて仕舞ふと、もう御厄介になつて行かないから」

「あなたは御嫁には行かないんですか」

「行きたい所がありさへすれば行きますわ」

女は斯う云ひ棄て、心持よく笑つた。まだ行きたい所がないに極つてゐる。

三四郎は其日から四日程床を離れなかつた。五日目に怖々ながら湯に入つて、鏡を見た。亡者の相がある。思ひ切つて床屋へ行つた。其明る日は日曜である。

朝食後、襦衣を重ねて、外套を着て、寒くない様にして、美禰子の家へ行つた。玄關によし子が立つて、今沓脱へ降りやうとしてゐる。今兄の所へ行く所だと云ふ。美禰子はゐない。三四郎は一所に表へ出た。

「もう悉皆好いんですか」

「難有う。もう癒りました。——里見さんは何處へ行つたんですか」

「兄さん？」

「いゝえ、美禰子さんです」

「美禰子さんは會堂」

美禰子の會堂へ行く事は始めて聞いた。何處の會堂か教へて貰つて、三四郎はよし子に別れた。横町を三つ程曲ると、すぐ前へ出た。三四郎は全く耶穌教に縁のない男である。會堂の中は覗いて見た事もない。前へ立つて、建物を眺めた。説教の掲示を讀んだ。鐵柵の所を往つたり來たり

した。ある時は寄り掛かつて見た。三四郎は兎も角もして、美禰子の出てくるのを待つ積である。やがて唱歌の聲が聞えた。讚美歌といふものだらうと考へた。締切つた高い窓のうちの出來事である。音量から察すると餘程の人数らしい。美禰子の聲もそのうちにある。三四郎は耳を傾けた。歌は歇んだ。風が吹く。三四郎は外套の襟を立てた。空に美禰子の好きな雲が出た。

かつて美禰子と一所に秋の空を見た事もあつた。所は廣田先生の二階であつた。田端の小川の縁に坐つた事もあつた。其時も一人ではなかつた。迷羊。迷羊。雲が羊の形をしてゐる。

忽然として會堂の戸が開いた。中から人が出る。人は天國から浮世へ歸る。美禰子は終りから四番目であつた。縞の吾妻コートを着て、俯向いて、上り口の階段を降りて來た。寒いと見えて、肩を窄めて、兩手を前で重ねて、出来る丈外界との交渉を少くしてゐる。美禰子は此凡てに揚がらざる態度を門際迄持續した。其時、往來の忙しさに、始めて氣が付いた様に顔を上げた。三四郎の脱いだ帽子の影が、女の眼に映つた。二人は説教の掲示のある所で、互に近寄つた。

「何うなすつて」

「今御宅迄一寸出た所です」

「さう、ぢや入らつしやい」

女は半ば歩を回しかけた。相變らず低い下駄を穿いてゐる。男はわざと會堂の垣に身を寄せた。

「此處で御目に掛ければそれで好い。先刻から、あなたの出て來るのを待つてゐた」

「御這入りになれば好いのに。寒かつたでせう」

「寒かつた」

「御風邪はもう好いの。大事になさらないと、ぶり返しますよ。まだ顔色が好くない様ね」
男は返事をしらずに、外套の隠袋から半紙に包んだものを出した。

「拜借した金です。永々難有う。返さう／＼と思つて、つい遅くなつた」

美禰子は一寸三四郎の顔を見たが、其儘逆らはずに、紙包を受け取つた。然し手に持つたなり、納はずに眺めてゐる。三四郎もそれを眺めてゐる。言葉が少しの間切れた。やがて、美禰子が云つた。

「あなた、御不自由ぢや無くつて」

「いゝえ、此間から其積で國から取寄せて置いたのだから、何うか取つて下さい」

「さう。ぢや頂いて置きませう」

女は紙包を懐へ入れた。其手を吾妻コートから出した時、白い手帛を持つてゐた。鼻の所へ宛て、三四郎を見てゐる。手帛を嗅ぐ様子でもある。やがて、其手を不意に延ばした。手帛が三四郎の顔の前へ來た。鋭い香がふんとする。

「ヘリオトロップ」と女が靜かに云つた。三四郎は思はず顔を後へ引いた。ヘリオトロップの蟻。四丁目の夕暮。迷羊。迷羊。空には高い日が明かに懸る。

「結婚なさるさうですね」

美禰子は白い手帛を袂へ落した。

「御存じなの」と云ひながら、二重瞼を細目にして、男の顔を見た。三四郎を遠くに置いて、却て遠くにゐるのを氣遣ひ過た眼付である。其癖眉文は明確落つてゐる。三四郎の舌が上顎へ密着して仕舞つた。

女はやゝしばらく三四郎を眺めた後、聞兼る程の嘆息をかすかに漏らした。やがて細い手を濃い眉の上に加へて云つた。

「われは我が愆を知る。我が罪は常に我が前にあり」
聞き取れない位な聲であつた。それを三四郎は明かに聞き取つた。三四郎と美禰子は斯様にして分れた。下宿へ歸つたら母からの電報が來てゐた。開けて見ると、何時立つとある。

十三

原口さんの畫は出來上がつた。丹青會は之を一室の正面に懸けた。さうして其前に長い腰掛を置いた。休む爲でもある。畫を見る爲でもある。休み且つ味はふ爲でもある。丹青會はかうして、此大作に低徊する多くの觀覽者に便利を與へた。特別の待遇である。畫が特別の出來だからと云ふ。或は人の目を惹く題だからとも云ふ。少數のものは、あの女を描たからだと云つた。會員の一二は全く大きいからだと辯解した。大きいには違ない。幅五寸に餘る金の縁を付けて見ると、見違へる様に大きくなつた。

原口さんは開會の前日檢分の爲一寸來た。腰掛に腰を卸して、久しい間烟管を啣へて眺めてゐた。やがて、ぬつと立つて、場内を一顧丁寧に回つた。夫から又故の腰掛へ歸つて、第二の烟管を緩くり吹かした。

「森の女」の前には開會の當日から人が一杯集つた。折角の腰掛は無用の長物となつた。たゞ疲れたものが、畫を見ない爲に休んでゐた。それでも休みながら「森の女」の評をしてゐたものがある。

美禰子は夫に連れられて二日目に來た。原口さんが案内をした。「森の女」の前へ出た時、原口さんは「何うです」と二人を見た。夫は「結構です」と云つて、眼鏡の奥からじつと眸を凝らした。

「此團扇を翳して立つた姿勢が好い。流石専門家は違ますね。能く茲所に氣が付いたものだ。光線が顔へあたる具合が旨い。陰と日向の段落が確然して——顔文でも非常に面白い變化がある」

「いや皆御當人の御好みだから。僕の手柄ぢやない」

「御蔭さまで」と美禰子が禮を述べた。

「私も、御蔭さまで」と今度は原口さんが禮を述べた。

夫は細君の手柄だと聞いて左も嬉しさうである。三人のうちで一番鄭重な禮を述べたのは夫である。

開會後第一の土曜の午過には大勢一所に來た。廣田先生と野々宮さんと與次郎と三四郎と。

四人は餘所を後廻しにして、第一に「森の女」の部屋に這入つた。與次郎が「あれだ、あれだ」と云ふ。人が澤山集てゐる。三四郎は入口で一才躊躇した。野々宮さんは超然として這入つた。

大勢の後から、覗き込んだ丈で、三四郎は退いた。腰掛に倚つてみんなを待ち合はしてゐた。

「素敵に大きなもの描いたな」と與次郎が云つた。

「佐々木に買つて貰ふ積ださうだ」と廣田先生が云つた。

「僕より」と云ひ掛けて、見ると、三四郎は六づかしい顔をして腰掛にもたれてゐる。與次郎は黙つて仕舞つた。

「色の出し方が中々洒落てゐますね。寧ろ意氣な畫だ」と野々宮さんが評した。

「少し氣が利き過ぎてゐる位だ。是ぢや鼓の音の様にぼん／＼する畫は描けないと自白する筈だ」と廣田先生が評した。

「何ですぼん／＼する畫と云ふのは」

「鼓の音の様に間が抜けてゐて、面白い畫の事さ」

二人は笑つた。二人は技巧の評ばかりする。與次郎が異を樹てた。

「里見さんを描いちや、誰か描いたつて、間が抜けてる様には描けませんよ」

野々宮さんは目録へ記録を付る爲に、隠袋へ手を入れて鉛筆を探した。鉛筆がなくなつて、一枚

の活版摺の端書が出て來た。見ると、美禰子の結婚披露の招待状であつた。披露はとうに濟んだ。

野々宮さんは廣田先生と一所にフロクコートで出席した。三四郎は歸京の當日此招待状を下宿

の机の上に見た。時期は既に過ぎてゐた。

野々宮さんは、招待状を引き千切つて床の上に乗てた。やがて先生と共に外の畫の評に取り掛

る。與次郎丈が三四郎の傍へ來た。

「どうだ森の女は」

「森の女と云ふ題が悪い」

「ぢや、何とすれば好いんだ」

三四郎は何とも答なかつた。たゞ口の内で迷羊迷羊と繰返した。

それから

四二、六、二七—四二、一〇、一四

誰か慌たゞしく門前を馳けて行く足音がした時、代助の頭の中には、大きな組下駄が空から、ぶら下つてゐた。けれども、その組下駄は、足音の遠退くに従つて、すうと頭から抜け出して消えて仕舞つた。さうして眼が覺めた。

枕元を見ると、八重の椿が一輪疊の上に落ちてゐる。代助は昨夕床の中で慥かに此花の落ちる音を聞いた。彼の耳には、それが護謨毬を天井裏から投げ付けた程に響いた。夜が更けて、四隣が静かな所爲かとも思つたが、念のため、右の手を心臓の上に載せて、肋のはづれに正しく中る血の音を確かめながら眼に就いた。

ぼんやりして、少時、赤ん坊の頭程もある大きな花の色を見詰めてゐた彼は、急に思ひ出した

様に、寐ながら胸の上に手を當て、又心臓の鼓動を検し始めた。寐ながら胸の脈を聴いて見るのは彼の近來の癖になつてゐる。動悸は相變らず落ちついて確に打つてゐた。彼は胸に手を當てた儘、此鼓動の下に、温かい紅の血潮の緩く流れる様を想像して見た。是が命であると考へた。自分は今流れる命を掌で抑へてゐるんだと考へた。それから、此掌に應へる、時計の針に似た響は、自分を死に誘ふ警鐘の様なものであると考へた。此警鐘を聞くことなしに生きてゐられたなら、——血を盛る袋が、時を盛る袋の用を兼ねなかつたなら、如何に自分は氣樂だらう。如何に自分は絶對に生を味はひ得るだらう。けれども——代助は覺えず悚とした。彼は血潮によつて打たる、掛念のない、靜かな心臓を想像するに堪へぬ程に、生きたがる男である。彼は時々寐ながら、左の乳の下に手を置いて、もし、此所を鐵槌で一つ撲されたならと思ふ事がある。彼は健全に生きてゐながら、此生きてゐるといふ大丈夫な事實を、殆んど奇蹟の如き僥倖とのみ自覺し出す事さへある。

彼は心臓から手を放して、枕元の新聞を取り上げた。夜具の中から兩手を出して、大きく左右に開くと、左側に男が女を斬つてゐる繪があつた。彼はすぐ外の頁へ眼を移した。其所には學校騒動が大きな活字で出てゐる。代助は、しばらく、それを讀んでゐたが、やがて、倦怠さうな手から、はたりと新聞を夜具の上に落した。夫から烟草を一本吹かしながら、五寸許り布團を摺り出して、疊の上の椿を取つて、引つ繰り返して、鼻の先へ持つて來た。口と口髭と鼻の大部分が全く隠れた。烟りは椿の瓣と蕊に絡まつて漂ふ程濃く出た。それを白い敷布の上に置くと、立ち上がつて風呂場へ行つた。

其所で叮嚀に齒を磨いた。彼は齒竝の好いのを常に嬉しく思つてゐる。肌を脱いで綺麗に胸と脊を摩擦した。彼の皮膚には濃かな一種の光澤がある。香油を塗り込んだあとを、よく拭き取つた様に、肩を揺かしたり、腕を上げたりする度に、局所の脂肪が薄く漲つて見える。かれは夫にも満足である。次に黒い髪を分けた。油を塗けないでも面白い程自由になる。髭も髪同様に細く且初々しく、口の上を品よく蔽ふてゐる。代助は其ふつくらした頬を、兩手で兩三度撫でながら、鏡の前にわが顔を映してゐた。丸で女が御白粉を付ける時の手付と一般であつた。實際彼は必要があれば、御白粉さへ付けかねぬ程に、肉體に誇を置く人である。彼の尤も嫌ふのは羅漢の様な骨格と相好で、鏡に向ふたんびに、あんな顔に生れなくつて、まあ可かつたと思ふ位である。其

代り人から御洒落と云はれても、何の苦痛も感じ得ない。それ程彼は舊時代の日本を乗り超えてゐる。

約三十分の後彼は食卓に就いた。熱い紅茶を啜りながら焼麴麩に牛酪を付けてゐると、門野と云ふ書生が座敷から新聞を疊んで持つて来た。四つ折りにしたのを座布團の傍へ置きながら、「先生、大變な事が始まりましたな」と仰山な聲で話しかけた。此書生は代助を捕まへては、先生先生と敬語を使ふ。代助も、はじめ一二度は苦笑して抗議を申し込んだが、えへへ、だつて先生と、すぐ先生にして仕舞ふので、已を得ず其儘にして置いたのが、いつか習慣になつて、今では、此男に限つて、平氣に先生として通してゐる。實際書生が代助の様な主人を呼ぶには、先生以外に別段適當な名稱がないと云ふことを、書生を置いて見て、代助も始めて悟つたのである。

「學校騒動の事ぢやないか」と代助は落付いた顔をして麴麩を食つて居た。

「だつて痛快ぢやありませんか」

「校長排斥がですか」

「え、到底辭職もんでせう」と嬉しがつてゐる。

「校長が辭職でもすれば、君は何か儲かる事でもあるんですか」

「冗談云つちや不可ません。さう損得づくで、痛快がられやしません」

代助は矢つ張り麴麩を食つてゐた。

「君、あれは本當に校長が悪らしくつて排斥するのか、他に損得問題があつて排斥するのか知つてますか」と云ひながら鐵瓶の湯を紅茶々碗の中へ注した。

「知りませんな。何ですか、先生は御存じなんですか」

「僕も知らないさ。知らないけれども、今の人間が、得にならないと思つて、あんな騒動をやるもんかね。ありや方便だよ、君」

「へえ、左様なもんですか」と門野は稍眞面目な顔をした。代助はそれぎり黙つて仕舞つた。門野は是より以上通じない男である。是より以上は、いくら行つても、へえ左様なもんですかなくて押し通して澄ましてゐる。此方の云ふことが應へるのだから、應へないのだから丸で要領を得ない。代助は、其所が漠然として、刺激が要らなくつて好いと思つて書生に使つてゐるのである。其代

「御前さんが？」

「本は讀まんでも好いがね。あゝ云ふ具合に遊んで居たいね」

「夫はみんな、前世からの約束だから仕方がない」

「左様なものかな」

まづ斯う云ふ調子である。門野が代助の所へ引き移る二週間前には、此若い獨身の主人と、此食客との間に下の様な會話があつた。

「君は何方の學校へ行つてゐるんですか」

「もとは行きました。今は廢めちまいました」

「もと、何處へ行つたんです」

「何處つて方々行きました。然しどうも厭きつぽいもんだから」

「ぢき厭になるんですか」

「まあ、左様ですな」

「で、大して勉強する考へもないんですか」

り、學校へも行かず、勉強もせず、一日ごろ／＼してゐる。君、ちつと、外國語でも研究しちやどうかなど、云ふ事がある。すると門野は何時でも、左様でせうか、とか、左様なもんでせうか、とか答へる丈である。決して爲ませうといふ事は口にしない。又かう、怠惰なものでは、さう判然した答が出来ないのである。代助の方でも、門野を教育しに生れて來た譯でもないから、好加減にして放つて置く。幸ひ頭と違つて、身體の方は善く動くので、代助はそこを大いに重寶がつてゐる。代助ばかりではない、從來からゐる婆さんも門野の御蔭で此頃は大變助かる様になつた。その原因で婆さんと門野とは頗る仲が好い。主人の留守などには、よく二人で話をする。

「先生は一體何を爲る氣なんだらうね。小母さん」

「あの位になつて入らつしやれば、何でも出來ますよ。心配するがものはない」

「心配はせんがね。何か爲たら好ささうなもんだと思ふんだが」

「まあ奥様でも御貰ひになつてから、緩つくり、御役でも御探しなさる御積りなんでせうよ」

「いゝ積だなあ。僕も、あんな風に一日本を讀んだり、音楽を聞きに行つたりして暮して居たいな」

「え、一寸有りませんな。それに近頃家の都合が、あんまり好くないもんですから」
「家の婆さんは、あなたの御母さんを知ってるんだつてね」

「え、もと、直近所に居たもんですから」

「御母さんは矢つ張り……」

「矢つ張りつまらない内職をしてゐるんですが、どうも近頃は不景気で、餘まり好くない様です」

「好くない様ですつて、君、一所に居るんぢやないですか」

「一所に居ることは居ますが、つい面倒だから聞いた事ありません。何でも能くこぼしてる様です」

「兄さんは」

「兄は郵便局の方へ出てゐます」

「家は夫丈ですか」

「まだ弟がゐます。是は銀行の——まあ小使に少し毛の生えた位な所なんでせう」

「すると遊んでるのは、君許りぢやないか」

「まあ、左様なもんですな」

「それで、家にゐるときは、何をしてゐるんです」

「まあ、大抵寐てゐますな。でなければ散歩でも爲ますかな」

「外のものが、みんな稼いでるのに、君許り寐てゐるのは苦痛ぢやないですか」

「いえ、左様でもありませんな」

「家庭が餘つ程圓滿なんですか」

「別段喧嘩もしませんがな。妙なもんで」

「だつて、御母さんや兄さんから云つたら、一日も早く君に獨立して貰ひたいでせうがね」

「左様かも知れませんか」

「君は餘つ程氣樂な性分と見える。それが本當の所なんですか」

「え、別に嘘を吐く料簡もありませんな」

「ぢや全くの呑氣屋なんだね」

「え、まあ呑氣屋つて云ふもんでせうか」

「兄さんは何歳になるんです」

「斯うつと、取つて六になりますか」

「すると、もう細君でも貰はなくちやならないでせう。兄さんの細君が出来ても、矢つ張り今の様にしてゐる積ですか」

「其時に爲つて見なくつちや、自分でも見當が付きませんが、何しろ、どうか爲るだらうと思つてます」

「其外に親類はないんですか」

「叔母が一人ありますがな。こいつは今、濱で運漕業をやつてます」

「叔母さんが？」

「叔母が遣つてる譯でもないんでせうが、まあ叔父ですな」

「其所へでも頼んで使つて貰つちや、どうです。運漕業なら大分人が要るでせう」

「根が怠惰もんですからな。大方斷わるだらうと思つてるんです」

「さう自任してゐちや困る。實は君の御母さんが、家の婆さんに頼んで、君を僕の宅へ置いて呉れまいかといふ相談があるんですよ」

「え、何だかそんな事を云つてました」

「君自身は、一體どう云ふ氣なんです」

「え、成るべく怠けない様にして……」

「家へ來る方が好いんですか」

「まあ、左様ですな」

「然し寐て散歩する丈ぢや困る」

「そりや大丈夫です。身體の方は達者ですから。風呂でも何でも汲みます」

「風呂は水道があるから汲まないでも可い」

「ぢや、掃除でもしませう」

門野は斯う云ふ條件で代助の書生になつたのである。

代助はやがて食事を済まして、烟草を吹かし出した。今迄茶筌筒の陰に、ぼつねんと膝を抱へ

て柱に倚り懸つてゐた門野は、もう好い時分だと思つて、又主人に質問を掛けた。

「先生、今朝は心臓の具合はどうですか」

此間から代助の癖を知つてゐるので、幾分か茶化した調子である。

「今日はまだ大丈夫だ」

「何だか明日にも危しくなりさうですな。どうも先生見た様に身體を氣にしちや、——仕舞には本當の病氣に取つ付かれるかも知れませんか」

「もう病氣ですよ」

門野は只へえと云つた限、代助の光澤の好い顔色や肉の豊かな肩のあたりを羽織の上から眺めてゐる。代助はこんな場合になると何時でも此青年を氣の毒に思ふ。代助から見ると、此青年の頭は、牛の脳味噌で一杯詰つてゐるとしか考へられないのである。話をすると、平民の通る大通りを半町位しか付いて來ない。たまに横町へでも曲ると、すぐ迷兒になつて仕舞ふ。論理の地盤を堅に切り下げた坑道などへは、てんから足も踏み込めない。彼の神経系に至つては猶更粗末である。恰も荒縄で組み立てられたるかの感が生ずる。代助は此青年の生活状態を観察して、彼は

必竟何の爲に呼吸を敢てして存在するかを怪しむ事さへある。それでゐて彼は平氣にのらくらしてゐる。しかも此のらくらさを以て、暗に自分の態度と同一型に屬するものと心得て、中々得意に振舞たがる。其上頑強一點張りの肉體を笠に着て、却つて主人の神経的な局所へ肉薄して來る。自分の神経は、自分に特有なる細緻な思索力と、鋭敏な感應性に對して拂ふ租税である。高尚な教育の彼岸に起る反響の苦痛である。天爵的に貴族となつた報に受る不文の刑罰である。是等の犠牲に甘んずればこそ、自分は今の自分に爲れた。否、ある時は是等の犠牲そのものに、人生の意義をまともに認める場合さへある。門野にはそんな事は丸で分らない。

「門野さん、郵便は來て居なかつたかね」

「郵便ですか。斯うつと。來てゐました。端書と封書が。机の上に置きました。持つて來ますか」

「いや、僕が彼方へ行つても可い」

齒切れのわるい返事なので、門野はもう立つて仕舞つた。さうして端書と郵便を持つて來た。端書は、今日二時東京着、たゞちに表面へ投宿、取敢へず御報、明日午前會ひたし、と薄墨の